

---

# 今時金色のヴィーナスの方程式・空の軌道編

模造堂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今時金色のヴィーナスの方程式・空の軌道編

### 【Nコード】

N7682X

### 【作者名】

模造堂

### 【あらすじ】

とは言っても昔書いたものですから古い感じですが仮想現実体験型ヴァーチャルゲーム的一幕が挙がります。

注意グロテスクな描写があります、流血を嫌う方は読まないことをオススメします。定番のVRMMORPG、またデスゲーム・転生・憑依・チートではありません。伝説を求めて歴史は動き出します、そう静かに確実に正確に

過去偏を組み込みましたナイツ・オブ・デスの若き頃、遺伝子戦役

の前です

## 序章（前書き）

定番でなくてすみません

## 序章

第一部、第一編、紡がれる日常の前置き。

夜明けが近い今は暁だ。煙草の灰が落ち吸い殻を草むらに押しつける。ガキが煙草を吸うなという大人がいるが騒音の一つだ。煙草といえはこの街じゃあ煙のでない車が一般的だ、技術の進歩でいう電気自動車が普及しているが公共移動機関でモノレールが存在する、世界でも珍しいことに三層に及ぶ大規模なモノレールだ。

時季は春にして三月の終わり、四月からは成人の二歩手前高校二年生の前期が始まる、珍しくもなくなつたギルドの活動、学生市場独立保護機構という正式名称を使う者も少ないほど当たり前になつた。元々は学生の市場開拓から相互扶助組織に発展し、まあ幅広く広まつた。そんな学生との兼業で探偵なんかをしている、学費の元を取る気で始めた商売は後少して一年になる。捜し物係の様な存在だがたまに珍しい依頼もある、今回はその珍しい依頼だ。人に害のある犯罪に対して過剰な攻撃をする非合法組織アルカイザーズの調査は多くあるが、その中でも珍しいのはその組織から直接依頼されることだ。

内情は知らないが浮気現場の動画撮影を依頼された。そこまでわかるなら辞めさせるなり罰則を適応すればいいが依頼されたことに文句を言う必要はない。手っ取り早く浮気をしているが浮気というのは知らない、三十後半の男女が公園のベンチで懐かしそうに世間話をしている。浮気とはいわないだろう。

依頼されたのは法的に浮気といえる現場を押さえることで世間話をする現場を納めることではない。一時間ばかり話しそして男女は別れ、朝方帰宅する。男性の方の奥さんから依頼されたがりのま

まに話した。

仕事で遅くなり一休みする場所に偶々居合わせた女性と世間話をするようになった。仕事の量からして過労死しない方が珍しい体力の持ち主だ。朝方八時から午前の四時までの仕事、残業代の話より疲労で倒れるのが当たり前だ。それを愚痴にすら出さない、出来た男だ。

だが依頼者の妻の方は信じられなく追加依頼をした。楽な仕事をくれるありがたい話であるが馬鹿馬鹿しいあそこまで働く夫に対してそこまで不自信を持つ方がおかしいだろう。依頼者を保護し緊急病棟の精神科、神経科に連れて行った。疲れがたまっていたのは奥さんの方で育児疲労と判明した。

夫の男性に話した、働きすぎて奥さんは育児に疲れていると残業を止め、育児を手伝うことを強く勧めた、男性の方は悪気が当たり前になかったそうすると話少し残念そうであった、聞けば出世したてて仕事が楽しかったらしい。アフターケアもここまでだ。

個人営業なので事務所はない、法律的な関係から税務に至るまで生徒会がするが今月の春休みからは休みだ、かといって必要な手続きも税理もない。探偵の仕事も終わり寮に帰る。

小さな寮で四階建ての庭すらない外装はコンクリート下地に物好きがスプレーアート施し、何となく安っぽい。中は一階がロビーと受付のカウンターと事務机のある場所、リビングに食堂に何故かあるカウンターバーの様な一角、二階から三階までの部屋、二階が男子、三階が女子、四階が訓練施設だ。寮に入ると寮長の今度三年生になる鳳 美鶴が居る、朝方の訓練に起きたらしく朝方に帰寮する俺を一別する。

「仕事熱心だな」

「皮肉と嫌みと苦情と小言は勘弁してくれ」

「ならギルドの規則である十一時までの労働時間を守れ」

「アフターケアで手間取った、勤労な旦那さんに育児で疲れた奥さんよくある話だ」

「依頼内容を話すな」

「ごもつとも」

完璧美人ともつぱら噂の鳳先輩との会話を終わらせ二階へと上がるために螺旋階段を上る。体力はある方だが個人業務が報われることは少ない。

二階のラウンジで缶珈琲を購入し、一息つく、煙草がほしくなるがその前に腹が減った、最悪なことに昨日の朝から清涼飲料水だけの栄養源だ。飲み干すとリサイクルの指定ゴミ箱に入れる。自室に戻り着替え眠りに入る。

起きるとシャワーを浴び簡単な調理器具でラーメンを作り食べ終わると片づける。

携帯が鳴る、確認すると依頼が入っている、実験に協力してほしいと。珍しい依頼なので私服着替えその場所に向かう。街は七姉妹都市と呼ばれている、七つの海上都市が融合したから名付けられた。中央のサハスララ、北アジュニヤー、北東ヴィシユタ、南東アナハタ、南マニブラ、南西スウェイスターナ、北西ムラダーナ。内ムラダーナはヴィーナス企業体専用都市だ。

中央のサハスララは都市機能を密集させた関係者以外立ち入り禁止、実質五つだけが通行可能で依頼されたのはムラダーナのヴィーナス企業体専用都市技術開発部門の実験。何のことかはわからず至

着し事情を説明すると入れてくれた上に案内された、一つの都市だけに独自の通行手段であるモノレールが行き渡り技術開発部門の専用区に到着する。案内する人が代わり技術開発部門専用区で一人の科学者が待っていた。

「小此木 要一だ」

「工藤」

「用件は一つ私が開発した遺伝子強化を受けてくれないか」

「確か生物遺伝子医療計画、機械因子医療計画がありましたな」

「その二つと共にもう二つの計画があり一つは変異遺伝子計画、一つが強化された人々を無力化する計画、無力化計画とある、その無力化計画の実験で君に白羽の矢がたった」

小此木の話聞き流し実験を受けることを承諾した。どのみち危険はないと判断からだ。

研究室の培養液のカプセルに入り注射での遺伝子強化を受ける。

付与される能力は無力化計画の一環である、電磁迷彩、可視光線を歪め透明化する能力を見破るために電熱視認能力。高電圧の電磁場バリアを無力化するため同等の能力、強化された遺伝子を睡眠させるための無力化ガス能力、それは一つの能力にして三つの具体化能力、妖魔の剣、妖魔の小手、妖魔の具足この三つは相手の持つ能力をコピーする能力だそうだ総じて妖魔の武具と呼ばれている能力。相手の恒常的強化能力を弱体化させるための超音波能力を最初のコピーした以上四つだが追加の依頼でチューナー能力と恒常的強化能力が付与された。

小此木博士が考えたのは巷を騒がすアルカイザーズに対抗する能力。ただそれだけだ。実験が終わり能力の熟練のための訓練や基礎的学習から応用学習等をこなし早速実戦に挑む。

アルカイザーズの作戦を小野木博士が流しアルカイザーズの一組がマニブラの犯罪組織の殲滅を行う、その作戦を先んじて行えばアルカイザーズのアルカイザーは敵として現れるだろうという読みだ。場所はマニブラの第一貿易区の倉庫、変身後の外見は生体甲殻装甲甲冑を身に纏う、

零下二百度にも耐えられ、摂氏数百度の高温にも耐えられ、真空中に近い状態にも耐えられる生物としてはアフリカに住むユスリカの幼虫の能力をコピーしたモノだ。

倉庫に突入する、犯罪者の一党は下手な攻撃は効かないと判断し機械装甲服、人間が直接着込み稼働させる機械の鎧を着込み通称アーマードという専用の機関砲を撃ち始めた、それを電磁場バリアが無力化する、電磁場バリアはアーマードの重火器を無力化する防御力を誇るらしい、人数を把握する、合計二十名が応戦し障害物であるコンテナに砲弾を撃ち込んでいる。

手近な一人の的を絞り電磁場バリアをぶつける、一撃で大破し中にいる者は即死か重傷だろう。

電磁場バリアをぶつける方法で四人を撃破する、さすがに分が悪いと判断したのか接近させず障害物を盾に攻撃に転じる。逃げ回られると弱い、遠距離攻撃手段を持たないことや、相手は燃料を使うことでの自動車並みの速度が出る接近しなければ攻撃のしようがない。お手上げとばかりに退却しようとする和本物のアルカイザーズの男女が突入した。外見は瓜二つのアルカイザーやアリアンフロッド、圧倒的な熱線で瞬く間に潰す。そしてアルカイザーが前に出る。

「おい紛い物」

怒っているような声をかけられた攻撃のレベルが違う、勝て

るような相手ではないので逃亡する、それを追ってくることはなかったが博士と合流し報告すると抜本の見直しが必要だと判断された。ひとまず今日の所は終わり。俺はというと能力テストでの能力の把握、レベル的にはBマイナスと判断されたアルカイザーは基本的にA、通常の人とはつまりスペック的には中途半端な生き物。

「どうも失敗のようだ」

小此木博士が白髪のを掻きむしりながら話す。

「身体速度があがらないことには、どうしようもないアーマードにすら勝てないのだから」

俺の言葉に小此木博士が項垂れるが、考えが浮かんだらしい。

「電熱探知能力は欠かせない、電磁場バリアも外せない、能力をコピーする妖魔の武具に対アルカイザー能力を集めよう、残った一つについては身体反応速度向上能力」

「追加料金とるからなまた培養液か」

「助かるよ」

研究室の培養液に入る、小此木博士が投薬するための操作を繰り返し、俺は軽く睡眠をとる。

起こされ塗れた体を拭き、私服を着込む。小此木博士がディスプレイで説明する。

能力の整理で電磁迷彩の可視光線を歪め透明化する能力を見破るために電熱視認能力、高電圧の電磁場バリアを無力化するため同等の電磁場バリア、身体反応速度上昇能力アクセラレーターを付与し

超高速での活動を可能とさせる、能力一つ妖魔の武具は能力にして三つの具体化能力、元々は相手の持つ能力をコピーする能力を活用し、妖魔の剣にリミテッド反応発熱能力、妖魔の小手に強化された遺伝子を睡眠させるための無力化ガス能力、妖魔の具足に相手の恒常的強化能力を弱体化させるための超音波能力。

「了解したチューナー解放後妖魔の武具を解放してみる」

チューナー因子を活性化させた後変身する、周囲が非常に遅く感じるどうやにアクセラレイターの能力は成功らしい、電磁場バリアの確認も終える、電熱探知の確認が終わり、妖魔の武具を解放する小手が具体化し生体甲殻装甲甲冑の中に生まれ小手の所が隆起する、具足の部分である足の甲冑内部に生まれ隆起する。最後に剣が具体化し手に生まれる。何事も順調に進んだ。ハズだった、博士の様子がおかしく何かを指さす、鏡と判断してみると何の異常もないハズだったが艶やかなプラチナブロンドの腰元まで伸ばし、と俺の髪は黒髪だ異常に感じヘルムを解除する、実際の年齢は知らないが十代中盤の最後の十六歳、愛くるしい碧眼の切れ目、優美な眉は形が好く、鼻梁は高く、小口は桜色の花卉のよう口唇、西洋的美少女の顔立ちになっている。

「冗談ではないスリーサイズは見応えがありモデルのような痩身ではなく砂時計体型の豊かな胸に見事に張った腰回りから伸びるスラリとした足、明らかに性別まで変異している。そして能力の負荷に耐えられず通常の状態に強制変異する。男性に戻っていることを確認し安堵する。」

「小此木博士？」

「またしても失敗らしい」

「というより悪化しているようだったが、性別変換など聞いてい

ないぞ」

「君は落ち着いているな」

「一時的な状態だ異常かもしれないが、通常の状態に影響しないなら、関係はない」

「当座はデータから研究してみる今日の所は帰ってくれ」

携帯での支払い後研究室から出ようとして能力の酷使のため力が抜け意識を失った。夢を見た子供と少女が遊ぶ夢、直ぐに消え目が覚めるのは研究室の仮眠室で異常なまで腹が減った状態だった。博士が食べ物を置いておりそれをひたすら食べる、味わうというより飢えを満たすという方が適切だ。鏡を確認したが変異は存在しない。博士が原因究明に勤しんでいる。

「小此木博士帰るぞ」

「ああ、どうも付与された能力は、高い消耗を強いられるらしい変身するなら一日一回にしておくことを強く勧めるよ」

すでに二回していることに苦笑しながら出て行く、モノレールでムラダーナのヴィーナス専用都市から離れヴィシユタの学寮に帰寮する。夕方の夕焼けを玄関に面した道路からみる、一仕事を終えた後の夕日は綺麗だ。見終えると中に入る。

寮の一階のリビングに鳳が居た、暇そうに雑誌を読んでいる。近くには同じく三年になる荒戸 昭彦が夕食の出前、いつもながらの牛丼を食べている。同学年の二年になる女子の栗栖野 縁が挨拶を送る時な俺を凝視する。受付に帰寮したことを記録し出前で夕飯を注文するその後リビングのソファに身を沈めた。

「どうしたの工藤、肌が綺麗になっているじゃない」

「おそらくエステに行ったのだろう」

俺が茶化すと明保野が睨み付け俺の手を取る。自分で見る限り別段と変わりはない。が栗栖野は何度も観察し先輩である鳳先輩に話す。

「鳳先輩肌が」

「ヴィーナスの培養液にでも入ったのだろう、あれは皮膚を活性化させ美容効果がある」

栗栖野が感心し俺を質問攻めにするが守秘義務を盾に適当に返す、出前のピザが到着し支払いを済ませ食堂のカウンターに座り熱い内に食べる。食べ終わると箱を捨てる。

自室に戻り家計簿をつける、収入はあるが出費も多い。学費の元も取れ後は儲けを出すだけだ。

ドアが叩かれる

「栗栖野ですけどお客さんよ」

「あいよ」

シャワーを浴び取り付けられている鏡を見る、平凡な少年の顔がある、断じて欧米風の美少女ではない。見間違いではないが現実的にあんな顔になるのはぞっとしない。軽い口内や眉の手入れを行い、口臭を変えるガムを噛みながら私服に着替える、シャツにスラックス、ボウタイに厚手のジャケット、ここは南西諸島、寒かろうが何だろうが暖房は必要経費で使えない。

客は一階で待っていた、女性で清楚な印象の科学者らしい、前置きはなく用件を話した。

「この世で尤も凝ったゲーム開発をしています、そこで依頼とい

う形ですが体験してもらえませんか」

「イヤだ」

「今ならヴィーナス製品割引券百万円分を用意しています」

「普通に円払えよ」

「もちろん前金で五十万、後金で五十万いち早くクリアするなら二百万用意しています、合わせて四百万円分を用意しています」

金はほしいがどうも怪しい、いかがわしさ大爆発。たかがゲームに金を用意するか。しかし金はほしいと引き受けることを前提に話す。

「引き受けたいのですが、予備知識や前置きを必要とします。無条件で引き受けるほど暇ではないもので」

「説明書なら体験版の中で使えます」

「具体的にはどのようなジャンルで？」

「自由度の高い体感ゲームです」

「具体的にはどのような部分が自由なのですか、シナリオですか、イベントですか、敵ですか、味方ですか、装備ですか」

「全部です、凝っていますからゲーム好きもゲーム否定派も、これは良作だというしかないゲームです」

話す気はさらさら無い訳か、なら質問を変える。

「では何故自分に？」

「平凡な高校生だからです、成績も可もなく不可もなく、交流関係はあるもの親友と呼べる存在はおらず、仕事熱心ではあるモノ優秀とはいえない」

「断つてもいいわけですよね？」

「もちろんです」

「どうもお互い知りもなく助け合う間柄ではないようです、お断

ります」

席を立ち後から何を言おうとも無視して二階へと上がっていく。ろくでもないゲームで時間をつぶすほど余裕はない。部屋に入りネット上で依頼を引き受けようと仕事部の公式サイトを閲覧する。あの女性のことを警察に通報する違法のゲーム開発主任と。今頃道端で任意同行から賞金稼ぎの相手でもしているだろう、ああいう輩は多い他人の足元を見ることになっている、ヴィーナスの社員は勘違いしている所で予想外のこと起きると他人のセイにする、俗に言うギリギリの悪だ。

腹いせが済むと多少調べてみる、ゲーム開発とは確かにあるヴィーナス企業体は情報産業が本業、娯楽やサービスにも力を入れている。だが妙に思えるヴィーナスが成功したのは現実世界の情報や海上自由都市建造、言い方を変えれば現実を前提とした会社と言える。あんな社員であんな風に依頼をするとは思えないというのが結論だ。

気になるヴィーナスの技術開発部の科学者小此木博士に電話を繋ぐ。小此木博士も同じ結論で語りではないかと推測された。確かにヴィーナスの社員とは名乗っていない。つまり警察に通報したのは正解で今頃逮捕されていると事だ。

電話を切ると携帯に依頼が来た、一日で三回の依頼は珍しい最高記録に並んだ。

「ヴィーナス娯楽部門空の軌道課です、誠に申し訳ありません、語りの犯罪者に企画を使われるとは、誠にすみません」

「余計わかりましたよ、どう考えてもあれは偽物ですね質が違う、ただ謝罪は受け入れるわけにはいきません私の不徳の至りです。自分が謝罪します、ご迷惑をおかけしました」

「いやはやお互い気をつけるモノですな、依頼というのは当部門が力を注いだ一大企画であり、正直他社の真似できるモノではありません、ゲームでありゲームではないと言いますか最先端のヴァーチャルゲームです、それが空の軌道、ご興味がわきましたか」

「そちらに向かった方がよろしいでしょうか？」

「これは失礼、引き受けてほしい用件はゲームの体験であり、一種の実験でもあります、その査定をしてほしいのです、聞けばゲーム嫌いの学生探偵がいると当部門に対する挑戦ですな」

「そこまでいわれると査定お引き受けしましょう、ただいつ頃になりますか？」

「いつ頃といいますが、査定ですのでランダムですから好きなときにダイブするのです、ダイブは当部門の者が名付けたゲームログインです今年の四月から販売するのですが学生社員からまいち冴えないと酷評で、悪い点をあら探してほしいのです、そして改善できない事を発見することと、逆に変えるべきではないところを探すことです」

「わかりました、今からいきます不定期の仕事ですね」

「はいムラダーナの娛樂部門に、お名前と用件を言えば案内してくれます」

正式の依頼として引き受ける、部屋から出ると警察官に捕まった詐欺師の女性が放送されている液晶画面を栗栖野が見せている粗悪な詐欺師だと放送されている。

「お見事賞金でるらしいわよ」

「いらん、警察にでも寄付するさ仕事がある暇か？」

栗栖野が仰々しく驚く、今回は人手がいると判断した。

「助手というわけではない、協力者として割り勘で働いてほしい、

ゲームの査定だそうだ」

「ゲーム絡みか暇というか珍しく力入れているじゃない、よし手伝うわ」

「感謝、今度驕るよ」

「でゲーム会社？」

「ヴィーナスの娯楽部門だ」

これに栗栖野が驚く、地元最大企業からの申し出だ。金になる上に保険も適応される。

「マジ？と言うか何で学生の探偵雇うの？」

「非常に簡単だゲーム嫌いだからだ、噂になっていたそうだゲーム嫌いの学生探偵がいると」

栗栖野が納得し「少し待っていてね」と廊下を歩き階段を上っていく、俺は逆に降り、一階に到着する、三年生になる暇人二人が暇そうにしている。ソファアに身を沈め。

「暇そうですね先輩方」

「そう言うおまえは？」

「ヴィーナスから依頼を受け娯楽部門に仕事に行きます遅くなると思います」

「意外に繁盛しているな、ヴィーナスから来るのは最低でも二年はかかると聞くが？」

荒木先輩が尋ねる、俺が訂正する五年だ。一流になると判断された勤労で確かな者だけに絞り外注するのがヴィーナスだ、超企業の名声を持ち事実ヴィーナスの支社がない国家などなく、ましてや新コロニー計画で作られた海上居住空間の海上都市の建造や管理で関わっていない事柄などなく収入の多くを地元や貧しい土地柄に流し

時として国際問題すら引き起こすそんな筋を通すそして大真面目に世界平和に尽くしている企業。学校の友人に学生社員がいるが自慢にするほどの企業だ。そしていい企業でもある。

「今時学校をさぼってまで仕事を引き受ける学生を当てにした訳か、よかつたな仕事が認められて」

「珍しいですね鳳先輩が人を褒めるのは」

「おまえが問題を起こすからだ」

「ごもつともただヴィーナスといえは気になることもあります、非合法的な人体実験を行っていると、既に十年以上噂されている、何度か調査したことがあるので詳しいですけど」

「風評など大企業なら当たり前だ、何よりヴィーナスは相当恨みを買っているからな、スタイリッシュなイメージ戦略は隠れ蓑と呼ばれる程だ」

「そう言われているが具体的なことになると話したがないですよ？」

「本当に詳しいなその通りなのだ」

栗栖野が一階に現れる、ナチュラルメイクに大人の感じのリクルーティストが、装飾品が全くない地味なハズが、華がある。

「二人でいくのか？」

「ええ春休みも暇ですから仕事でもしています」

「と言うことは、暇人は俺と美鶴か、まあ暇しておく」

ソファから体を引き起こしロビーでの記入後、外に向かう。ヴィシユタの駅からモノレールからムラダーナに向かう。専用の駅のために下車する者は取引先か社員だ。ヴィーナス企業警備部門警備兵が俺を止める。携帯での正式な依頼を表示すると一応確認するが胡散臭がっていた。

「なぜに？」

俺の自問に栗栖野が笑いながら鏡を指さす、ありふれた高校の学生が見物にきたような外見だ。

確認がとれ、警備兵が案内につき広大な専用都市のモノレールから娯楽部門専用区に到着する。

「聞きたいが怪しいか？」

「残念ですが勘違いの観客かと」

警備兵の一言にへこむ新入りの栗栖野の方が怪しくないなら俺は新米か？警備兵が苦笑して。

「いえ観客とは探偵のことです、色々探られる側ですから、中には国外まで追い回す探偵までいて、警備部門では探偵と判明した者はひとまず追い返せと」

表情に出やすい性格だが握手を求めたら代わりに珍しい情報をくれた。

「変な話ですが探偵の方が大変興味を持つ事件がありました、十六年前の第一次遺伝子戦役その際活躍した者が居るのですが、戦死したことになっていますが、実はロシア国籍で生存しているのです、自分も買いたい情報です」

「ありがとうございます、探ってみたいですけど今回は初依頼をこなします」

警備兵が敬礼し去る、警備兵の多くが元を辿れば戦闘を生業とする部族や一族、それをヴィーナスが纏め上げ世界中の紛争地域の情

報護衛に立たせた、名誉と金と祖国をと謳った時代の寵児だ。娯楽部門専用区に入り用件と依頼を引き受けた過程から必要な情報を提供する。

娯楽部門は当たり前に広く空の軌道の企画課から関係する場所は多く、部門あげての一大事業とを感じるほどだ。迷子の気分で電話しようとするときとちよつとした絡繰りがあつた。現在の技術で五官の味覚は再現できない情報だ、しかし残る四つは可能とするただそれは前準備がいる、それを必要としない機械の広告があつた。担当者が俺と栗栖野をみると外来者と判断し体験を勧める。

現実には体感すると多少の問題があるが凄まじい技術だ。

「今なら」

「済まないが、電気の消費量が尋常ではないようだが」

「今後の克服点です」

「それを改善しないことには市販はできないだろ」

「しかし、それを上回る魅力が」

「学生には高価な品だ」

担当者が痛い点を衝かれ、項垂れる。アンケートに答え、場所を尋ねると案内された基本的に広大なため案内人なしでは迷うことが多いらしい、特に海上都市に暮らしたことがない者は同じような十字路の連続に困惑するらしい。担当者は改善点を話したがそれ以上に電力を克服しないことには市販は無理だと内輪でも話されていたらしい。何気なくロシア国籍の話をするに興味があるらしいが、多重国籍が珍しくないためヴィーナスの前身である李企業体の情報保管質で調べるしかない。案内された場所はある意味慣れているがカプセルが置かれ培養液の中でのゲーム体感、空の軌道を体感しながら多少の違和感を持ちながら行つたらしい。

「ゲーム？」

「慣れた、このパターンなれたよ、ヴィーナスは培養液とカプセル好きなんだ」

依頼した担当者を探すと思いつきりコスプレのファンタジーの格好をしておりゲーム好きらしく熱く空の軌道を語っていた。外来者の二人と聞いて怪訝な顔になる。

「誠に申し訳ありません、客観的女子学生の視点が重要に思え同僚を紹介します」

「確かに、女性には理屈っぽいだの夢がないなど酷評を受けています、まあ培養液は好評です」

「早速ですが査定に入りたいと思います」

「その前には是非粗筋を語らせてください」

「好きですな」

「大好きですよ、ゲーム好きにはたまりませんな」

「いや開発主任がそこまで熱くなれるなら、余計にご静聴させてもらいましょう」

「待つてオタクじゃないけど前置きなしにしたい折角だから楽しみたい」

「何を言います、オタクになってももらいますよ、あ自己紹介ですが大江戸 横木です」

「栗栖野 縁です」

「工藤です、下の名前はややこしいので工藤で結構です、しかしそこまでいいですか」

「空の軌道を越えるファンタジーは存在しません」

「なるほど開発者であり、一個人として押しますか、しかし、市販料金は？」

沈黙が流れる、気になり額を尋ねると億の単位だと話した。ただ厳密には違う、ソフトが必要でハードもいる、それだけにすると急激に減り何百万の単位に落ちる、ただ付属品や様々な音響機器その他諸々の付属品を購入した方が、どう考えてもお得だと言わせる力作であるが、逆ギレを受けた事もあるそうだ。

「既に購入予定の需要はあるのですが、採算に追いつきません」  
「たかがゲームに億はないかと」

大人なら笑ってすませるが大江戸主任はマジギレた、が、慣れた上司や部下が落ち着かせ胃薬と頭痛薬をセットで飲む。その手慣れた動作から相当な言われ様があったのだろう。

「絶対に購入意欲を持ちますよ、絶対に」

「そこまで言われる」

「粗筋を聞きましょう」

「よくぞ聞いてくれた、体験するしかない、しかし、もしですぞストーリーの中で話されている相手が倒れたらどうします？助けますよね、でもそれは必要な寿命がきたいのだといわれたらどうします？昔は医療技術がなかったから助けられなかった、しかし、今は助けられる、だけどその人はヴァーチャルか？それとも本当に有った出来事か？」

「熱いですな、まるで過去の世界のようです」

「ご興味がありましたら体感のほどを」

俺と栗栖野が笑う、当然のように興味を持ったつい聞き入ってしまった。ゲームは嫌いだが疑似体験することが悪いわけではない、ただ時間の無駄に思える、しかし好きな人はやはり好きで世界中に存在する、情報分野をいけば必然的にゲームの情報が入るほど普及しており多様だ。説明されタイプする。

## 序章（後書き）

第一章からゲーム内です

## 第一章紡がれる日常（前書き）

古いラノベを思い出しますが、ゲーム開始です

## 第一章紡がれる日常

### 第一章、紡がれる日常

「赤き姉は無慈悲な女王、威厳を持ち我らを見下ろす、青き妹は無慈悲な戦士、ただ冷ややかに我らを見下ろす、空行く船は死に神の翼、我らの御霊を地獄に運ぶ、見上げる我らは虐げられ者、怒りを持ち、空を睨む。赤き姉と青き妹、二人並びてこの夜の空に、戦の炎を見つけては、嘆き、悲しみ、怒り、笑う。我らはずいに拳を握る、我らはずいに矢をつがえる、無慈悲な姉妹に立ち、向かいゆく、ただそれだけが生きる道と。我らの怒りはこの空と全ての大地を焼き尽くし、我らの悲しみはこの空と全ての海を凍てつかせ、ついに無慈悲な姉はこの地を追われ旅に出る、そして無慈悲な妹は姉を待ちながら静かに眠る。恨みの言葉を残しつつ、凍てつく星の世界へと、永きを旅した女王は二つの節目ごとに舞い戻り、再びこの地に舞い降りて、不幸の種をまくだろう、狂気の剣を振りかざし、この世の全てを奪うために」

老人が語る違和感のない語りだ、語り終えた老人は一つの剣を俺に渡した。

「夢見し自由を得るがいいただ忘れるな節目は近い」

「そうか女王が舞い戻るか」

剣を握ると老人は静かに息を引き取った、語り部の老人の冥福を祈る場所は村らしい、中世の木製の家屋が建ち並ぶ空は青く冬空のようだ。身につけているのは中世の衣類、珍しいもない外見だ、財布らしき袋を持っているが何も入っていない。栗栖野を探したら語

り部の老婆をみていた、亡骸になる。

「よう」

「悲しいわよね、さっきまで話していた人が亡くなるのは、私はクリス、貴方は」

「クトゥー湿っぱいが節目が近いらしいどこか落ち合う場所を決めよう」

クリスが周囲を見渡す、開けた広場に大きな家がある、そこを指さし手近な民家に向かう、俺は武具やお決まりの魔法といった商いの店を探した。武具屋が一軒ある、そこにはいると主人が一別し。

「冒険者か？」

ごく自然な語りだ、冒険者とはいわれ違うともそうであるとも言えるが何故か黙っていた。

主人は悲しそうな瞳で一つの書を渡した。

「入門の魔法がかかっている、駆け出しには丁度いい金がないなら他を当たれ」

「なぜ親切にする」

「なぜ？誰だって初めはある、そうさな俺も夢見たからかな」

懐かしそうな瞳は悲しくも悲壮感のある顔だ。受け取ると主人は選別の金を渡した。それは受け取れないために断った。広場で落ち合う、大きな家に寄りかかり書を見る。魔法の説明があつた、五属性魔法、炎、氷、雷、風、地、癒しの魔法、即死の魔法、聖なる魔法の八つが魔法といえるだが入門には後一つの魔法もある敵を食ら

い自らを変化させる魔法や自らの体を使い、敵を倒す術、合計十の魔法、後者の二つは禁断の魔法とある。

魔法の書は同時に与える魔法でもある選択した魔法の一時的に付与し行使させる、完全の覚えると使いこなせる。俺は敵を食らう魔法と自らの体を酷使する魔法を選択した、同時に二つが限界らしく目の前に紋章がでる、二つが与えられ同時に完全に体が覚えるのに必要なカルマポイントがでる。雨が降り始める、にわか雨だ、それに乗じるように霧が立ちこめる、うつすらと覆う霧だ。そしてクリスが悲しそうな顔で現れる。

「悲壮感あふれているわね、世紀末にある戦に怯えながら暮らしているらしいわ、ゲームとしては悲しいストーリーね」

魔法の書を渡す、読み終わると癒しの魔法と聖なる魔法の二つを選択する。

「全て夢幻だけど確かに出来映えはいいわ気づいている、囲まれているわよ」

霧の中から一人の騎士が現れる、馬に乗り馬上から攻撃するための槍を持っている。

「禁じられし魔法を行使する者よ、戦の語り部にならん」

「クトゥーまさか喰奴の魔法や修羅の魔法を選択したの」

「味覚はないんだろ」

「あんたゲームでもして善い事と悪い事があるでしょう！」

「忘れたか俺達は査定人だ、悪いところや最低の所をみるためにきた」

クリスは何も言えず、武器である剣を抜いた、馬上にいる騎士が

槍を持ち駆け出す、刀剣の訓練はしたことがないが禁断の魔法を使用する俺に与えられた変異を行う、チューナーの外見に酷似した生体甲殻装甲甲冑を身に纏い、クリスの顔からわかるがやはり女性の体つきになったらしい気にはいられない。剣を構え備える。

「汝咎人となり」と騎士が話し槍で突き刺すが穂先から後ろの柄の部分を持ち落とす、騎士が槍を捨て長剣を抜く、その隙に一時的に付与された修羅の魔法を使い毒の効果のある攻撃を行う、剣を馬の足に行い馬が倒れ騎士が降り立つ、その時に剣を突き刺し血が飛び散りながら食らう魔法を行使する、ヘルムの口の部分が外れ騎士の首にかぶりつき、そのまま食いちぎる、騎士が絶叫と呪詛の言葉を残し最後の一撃を行うそれを剣で弾きもう一度食いつく。

今度は成功し騎士が即死する。カルマポイントが加算され俺の戦闘経験値が増える。

クリスは醜悪な戦いに吐いていた、俺の常識からしても壮絶で醜悪な戦いだ。

「これが最低の戦いだ」

「最悪、でももう遅いし、もしかしてゲームオーバー？」

「さあな」

大きな家の門が開く、その中に俺が逃げ込む、クリスも後に続き門が閉まるのを確認して一息つく、俺の口周りから体中に飛び散った返り血がかかりクリスが嫌悪するように距離をとる。

中には中年の男性と少年らしい子供がいた。

「なぜ咎人に？」

中年の男性が悲しそうに尋ねる。少年は怯えるように父親の後ろ

に回る。

「さあな、勇者じゃないからかな」

「行きの先も戦の渦中だ魔法を解くか？」

「悪いが俺が選んだ道を悔いることはない、果ての先まで通すのみ」

門がまた開く、どうも一度のやり直しの機会だったらしい、中年の男性が魔法を詠唱する敵となった男性を殺す気はなかった、子供の前で殺人はさすがに咎められる、クリスが飛び出し俺も続く、広場に何人かの兵士がおり簡素な鎧に剣を構えている。霧の奥から矢が放たれ俺の甲冑に突き刺さる。装甲は貫通していない。

「包囲から突破するクリス」

「最悪、あんたおかしいでしょう？」

俺が包囲から抜けようと走り出す、クリスも同じく走り出す、ゲームであるがリアルにも追っ手が来るそして馬上から槍を構える騎士が数人いる、それを無視し駆け抜ける、村から出ると追っ手はない代わりにモンスターとの鉢合わせがあった。

剣で切り倒す表示にゴブリナとかかれたレベルの相手だ、一撃で切断され飛び散る血飛沫、先はなかった突き進む。本来なら勇者にしる正義の味方にしる人々に支援される側であるが俺が選択した魔法により追われる者になる。クリスが水辺を見つけ。

「最低限血は洗いなさいよ」

水で洗う血が水辺に流れていくパラメーターの表示に俺の名乗った名前と数字とあだ名が付く騎士殺しのクトゥーそして賞金が懸け

られている。罪人扱いだ。クリスのパラメーターの表示には駆け出し冒険者である俺が持つていない道具に世界地図がある。大陸はオーストラリアの地形に酷似しているシルメノア大陸、またの名を呪われし大陸。

現在の場所は始まりの島と表示されるマーモ島、船で大陸にわたる必要がある。そこに行くまでは最低限島の国王から大陸渡航許可書があるとクリスが話した。最初の頃はクエストを行う等の色々とすることがあるらしいが、罪人はかなりリスクを負う。治安のいい場所なら騎士と兵士に追いやられ、悪い場所なら賞金目当ての盗賊に付け狙われる。

「まともなゲーム体験は却下ね、と言うより無理、意外にはまっていたのに」

「おいおい仕事だぞ」

「私が村とか町とかで活動するから、クトゥーは村とか町とかに入らないで」

「話が変わるがストーリーから政權交代だろうな」

「ああ、伝説の語り確かにね、冷静に考えれば確かに政權交代ね」  
「次の場所に行こうか」

地図で確認したが手近なところに王都がある、現代でいう首都だ。その場所に向かう。街道を歩くただだが未だ王都付近で活動しているプレイヤーは俺に嫌悪感丸出しで敵対した。

「正気じゃねえぜ、あんた頭おかしいよ」

「だとしたら何だ」

「ゲームのプレイヤーとしてあんたを倒す、どのみち人を襲うんだろ」

「正義面か、醜いな吐き気がする」

「あたしは関係ないら」

俺の立場はプレイヤーキラーではないが確率としては高い方になる必然的に人を襲う。だがだからといって襲っていいわけではないそれは相手もわかっている、わかっている故に試しているのだと思う。俺が剣を抜く。

「騎士殺しクトゥー」

「頭大丈夫か決闘じゃないんだぞ」

「参る」

水平に構え突き刺す一撃を繰り出す相手は覚悟を決め、剣を抜く早く俺の一撃を弾く相手は体を反転させ裏拳を入れる、だがヘルムに防がれ、俺の前蹴りが金的な部分を貫く。相当痛いらしく離れる。

「女は容赦がねえな」

魔法を構成し詠唱し始める。プレイヤー同士だとわかるらしい射程範囲から抜けると相手は中断する、攻撃魔法の構成詠唱中は硬直するらしい。プレイヤー同士の戦いは相当な技量差がいるらしい、理由は逃げる機会が多いからだ。相手も暇ではないらしくどこに向かって歩いていく。追う理由もないため王都に向かう。そんなことが四、五あった。

王都に到着する周囲には露天商や様々な商いの人々がいる。見るだけで楽しいがお尋ね者の俺とは目を合わせない王都の外までは兵士も騎士も見回っておらず味覚がないので匂いを楽しむ飲み物を飲みながらクリスが王都にはいる後ろ姿をみていた。クリスが入る門でイベントが発生した。近くの川からモンスターらしき化け物が現れる、多くの人々が門に殺到しクリスも飲み込まれ王都に入る。逃げ遅れた人々が居てそれを助けるイベントらしい。

親玉らしい化け物がゲル状のカタツムリのような生物、子分の化け物は多少レベル差があるモンスターが二体、速攻で一体のモンスター<sup>1</sup>の胴体を両断し内蔵や血飛沫が飛び散る。残った子分の一体が武器らしい棍棒で殴りつけるが腕ごと切り落とし反転し首を切り落とす。

親玉のカタツムリに斬りつけるが再生していく。再生が追いつかないまで斬撃を繰り返す、相手は攻撃手段として低速の体当たり当たることもないだが、次第に押され気味になるスタミナという体力とは別の攻撃回数を決めるパラメーター<sup>2</sup>がつかけているように攻撃回数が減り始めている。決定打にかけると判断し、毒の打撃を受ける体力を消耗する魔法を使うためにコマンドを入力する、単純に攻撃するだけ。これを受けると相手の再生が止まった。

クリスが増援として現れるが、外見が変わっている衣類だけの格好から革製の胴体を守る防具に部分事に革製の防具を身につけている、大鎌を手<sup>3</sup>に持ち現れた。接近すると話しかけた。

「スタミナと体力を回復させてくれ」

了解に代わりにスタミナを回復させる魔法を詠唱する、構成は必要な対象者の回復だからだ。

魔法の詠唱が終わり、スタミナが大幅に回復する、そして俺が体力を使う複数回の打撃を受ける魔法を使う、一撃から三度の攻撃を受けるやつと体力のゲージが赤くなる。トドメの一撃が決まる。ゲル状から霧散する、倒し終わるとイベントが終了する。

「あのさ、このイベント、門を使って倒すらしいの」

「先に言えよ、まあ倒したから関係ないが」

「違うのよ私が門に入ってからイベントじゃなく定期的なイベント」

疲れから剣を戻し倒れる、レベルアップの表示になり体力の最大値、魔力の最大値、力は攻撃力に影響し、体力は最大値に影響し物理的な防御力の影響する、魔力は最大値に影響し魔法の全てに影響する、早さは命中率や回避率に影響する、運は様々なランダム要素バランスよくポイントを割り振り、レベルアップボーナスで現在の二つの魔法を完全にマスターする。

「魔法というか食らいつき、地獄突き、バイオクロウ、マッスルボンバーの物理攻撃スキルをマスター」

「色々あるけどもらった剣は王都とかにある神殿で変化させてくるわ」

説明を受けた、首都の機能として受け取った剣の形状を変化させられる、そして今までの行動から適切な防具が与えられ倒したモンスターに分金が渡される、クリアしたイベントの話などが聞け行動からカルマ値、これは行動の結果大陸での行動に影響するマイナスになればお尋ね者としての格が上がり闇のイベントが起こる、プラスなら光のイベントが起こる、そして二つに属さなければ大陸で起こるイベントの中で無属性のイベントを受ける。合計すれば三つになるが今の所最大のイベントである戦争時期にまでは達していないらしい。

大陸での情報は少なく大規模な勢力などもあるらしい、今回のイベントで一時的にカルマ値が凍結される最初の首都に入れることになる。王都に入るとあだ名が変わっていた魔獣殺し、クリスに案内され王城と神殿が融合した場所に入る、プレイヤーが興味深そうに

みていた、本来なら闇ルートのプレイヤーが人を救ったことでカルマ値がゼロになり魔獣と呼ばれる序盤は倒せないとすら言われる強敵を倒した。そうらしい。

神殿の部分にいる巫女から労いの言葉と多額の報奨金を与えられた、そして武器の事になると妙なイベントが発生した。剣が形状を変え俺の体に溶け込んだ。そして。

「どうも適応があつたようですね、数多の勇者がいますが与えられし試練に打ち勝った、勇者と認められた証です」

あだ名が魔獣殺しから勇者羅刹となっていた。

「代わりの剣を用意しましょう」

用意された剣は無骨な柄だけの剣、触れてみるとけ込んだ剣の剣身が入り細身の剣が生まれる。鰐が無いため巫女が用意しレイピアと表示される。

「無形の剣と呼ばれる勇者の資質を持つ者だけが扱える品です、それ以外の者では握るだけで呪われ石化する危険な品でもあります、戦いの中で様々な形になりますそして必ず対となる敵が現れるでしょう、貴方に呪われし兜をとる準備をしますがどうします」

「呪いを解くようになります」

「外せるようになりますただ一時的ですが」

「ならばお願いします」

巫女が兜を取る、一時的に外れ、久しぶりにヘルムが外れた開放感を得る。巫女はノンプレイヤーのプログラムと思ったが違つらし

い、プレイヤーではないがゲームの進行を見守る管理人らしい、見栄えのする顔をみて感想を話した。非常に年寄り臭い話であったが話を聞いてくれたお礼としてフードマントをくれた。暇な時に作っていたらしくお手製で多少の防御効果もあるそうだ、ついでにとスカーフをくれた。フードマントを身につけ口元をスカーフで覆うがヘルムを抱え、剣を鞘に納める。見栄えのする格好だ。

## 第一章紡がれる日常（後書き）

短くしてみました、誤字、脱字の指摘等と観想などをお待ちしております

## 第二章紡がれる日常2

魔法の習得の限界があり書と呼ばれる物では多くて二段階、一段階をマスターしたら二段階目から必要になるそれぞれの系統の神殿を訪れないといけないらしい。

パーティというものは存在せず組むならどこまでも可能ただ組んでも攻撃を受けたり攻撃魔法の対象範囲なら攻撃を受ける。防具を受け取れない代わりにアクセサリをもらった。魔法に対して防御力を持つ装備だ。イベントというのはマーモ島で魔法の系統の二段階目を二つ取り、許可書を受け取るために隠された財宝を見つけることだ。序盤は説明的な話が多く大陸でなれた行動をとるための訓練だといわれてお尋ね者らしく日常会話すらノンプレイヤーはしない。クリスが尋ね、情報を集めると俺が聞く、序盤の隠された財宝は難しいらしく見つけられない冒険者、つまりプレイヤーは多い。

宿に泊まり、軽く中断する。現実には視界が戻る。報告に多少笑える要素やまだストーリーが始まらない序盤の慣れないプレイヤーを補佐する誰が居た方がいいと判断し報告した。

自由度が高すぎて迷ってしまう者が多いだろうと判断したら事実最初から迷うプレイヤーが多かったらしく進行を無視して見物に洒落込んでいる者すら居る。

戻る時間になり器具を接続する。

個室の部屋に気配があった、よく見ると泥棒らしい、取られるような物は隠してあるためその前に殴り倒す、これもイベントなのかと思っただけプレイヤーだった。兵士の詰め所に着き出すと報奨金とカルマポイントのプラスがあった。はれてお尋ね者から一般に戻りクリスと合流し二段階目の神殿を目指す。とはいうもののクリスのマ

スターしているモノはなく、マーモ島にでるモンスター相手に苦戦していた、戦闘そのものが苦手らしく、俺が弱らせたモンスターをクリスが倒すといった事務的なことが多かった。

一応喰奴の神殿に到着した、割と一般的な神殿がある、周囲はモンスターの彫像で囲まれ奥に進むと管理人が暇そうに仕事をしているた。

「あどうも、やっときたよ」

「低人気ですからね」

「全くだよ苦労したんだけどね、修羅の方はまだくるらしいよ、ここなんか初めて」

「悪いイメージを持たれていますからね、で試練でもあるのですか？」

「試練というのは一応ある一番困る事に魔獣を食らうことだあれはポーン、ルーク、ナイト、ビショップ、クイーンの五段階ある災害的なプレイヤーキラー、イベントにもよるけど水辺から這い出る最強のモンスターだ。弱点闇だ、光のプレイヤーを襲う、そして闇のプレイヤーを恐れる、無属性のプレイヤーはとある条件で使える特殊能力で楽に倒せるようになる、しかし」

「査定人が最初は厳しい現実ですね」

神殿の管理人は苦笑する、詳しく聞くと闇のプレイヤーが覚える夜の魔法に弱いらしい、管理人が呼び出したポーンクラスの魔獣、正式名称はキャリアー・アンデット・ビースト、大陸で猛威をふるう病気の死者が復活し魔獣となり人を襲う、その辺はゲームによくある死者伝説のようなモノで問題はプレイヤーも感染する恐れがある当然のように食べればその危険は高まる。

一時的に喰努系統第二段階魔獣の能力が付与される単独でクリア

しなくても大丈夫で、二人で挟撃する、俺が前方を取り正面から無形の剣で切り裂く、攻撃力が高まっており打撃をよく受けている後ろから大鎌で斬りつけているが戦闘そのものが不器用で使い方もなっていない。

結局死にかけたところで食らいつきのコマンドで食らった。第二段階の習得が終わり管理人から外せる部分があると話頭部の方は終わっているので上半身の胴体を選んだ。甲冑は重量感を感じさせない物と思っていたが違うらしく、外すと重量があり密着することで感じさせないだけだった。素肌に風を受け心地よい、季節は設定では冬に近い季節らしい。と言うより南極に近い。暖かい季節が少ない場所なのだ。一時間で一日が過ぎ、胴体を装着して修羅の系統二段階目を受けに向かった。マーモ島はニュージーランドに酷似している地形に村や神殿の配置。

隠された財宝はプレイヤーが増えることに隠されそれを探すためのイベントを探さないことには発見しても意味がないらしい。色々と序盤のネタバレを聞き、管理人は相当暇だったようでマーモ島攻略ガイドブックを作っていた試作品を受け取り、やっと地図を持ってファンタジーの地図をみながら点滅するポイントから方角を決め修羅の神殿に向かう。

山岳地帯にあるらしく険しい山肌を歩き、時折プレイヤーとすれ違うが闇ルートのプレイヤーは好戦的で挑発を行うが本来なら闇ルート一直線の元お尋ね者と戦えるほど強いプレイヤーはおらず、勘違いした光ルートのプレイヤー、正義の味方と交戦している場面に遭遇するが無視して頂上を目指す。モンスターは狩り尽くされ時折モンスターの死骸から採取可能な食料や材料を取っているプレイヤーがいた。

そんなプレイヤーに尋ねると闇ルートのプレイヤーは町や村に入れば攻撃される、そのためにサバイバル技術や知識を教える闇ルートギルドが存在し、マーモ島の拠点を作ることが目的らしい。お尋ね者では無いが、俺はどう見ても同類のために親切だったが、組んでいるクリスには無視する者が多かった。空腹感を持つとクリスが購入した味はないが匂いがいい食べ物を食べる、とは言ってもかさばらないようにビスケットだ。

到着する真夜中、月明かりが唯一の光、生身の疲労感がないため休憩もとらず突き進む。

歩くこと二時間、到着した神殿にイベントらしい竜の飛来があった、倒せば竜殺しの名誉に報奨金からの報酬、材料にもなるがレベルが高く軽く二十五はある、勝てるような相手ではない。

がここは知恵を使う、網を投擲し身動きが取れなくなると毒性植物からとれた毒で弱らせる。

後は数を頼みにタコ殴り、ダメージも相当増えるがタフな竜は火焰のプレスを吐き抵抗する、

それを防ぐために縄で口元を多い殆ど生け捕り状態で倒す。闇ルートプレイヤーは団結力に組織的な行動になれており何よりも拠点がないために神殿を拠点化していた。凄まじい努力だ。

トドメを指した栄冠の竜殺しが多額の報酬を受け取り観戦していた俺達の所にくる。

「甲冑を身につけているが組んでいるのは光か？」

声はハスキーな女性の声、外見は甲冑の上に厚着の長衣を着込み魔導士の様な外見だ。

「いや無属性の中立ルート志願だ」

「そうかよければパーティに入れてくれないかどうも接近戦が苦手な魔法ばかり使っている、その上に卒業の竜殺しだ前衛が居ないと弱い、見ればポーンを倒した証まである、大陸に渡るまでそれでもいい」

「俺は喰奴系統第二段階、修羅第一段階」

パラメーターを見せる、竜殺しの女性プレイヤーは五属性が全部第二段階でレベルも高く十五になる。光に対して偏見や敵対心はないらしく問題ないと判断して仲間に入れた。修羅の方には興味がないらしくレベル上げで放浪していたらしい。名前をコギリと名乗った

神殿に入ると係の管理人が忙しそうに内職の闇ルートに必要な知識を本に複写していた。

軽く笑えた。

「やれやれやつときたか喰奴第二段階のポーンバスター試練は簡単だと言うより現場の判断で変更した雑用係になってくれ、ほんの半時間だけ本の整理をしてくれ」

「別にかまいませんがご苦労様です」

「全くだ闇ルートのプレイヤーが苦労してここまで来た、竜もこれで五体目だ管理人として応援しているが中立ルートのプレイヤーも陰ながら応援させてもらうよ、少ないからね」

本の整理二人に協力してもらった、元々闇ルートのプレイヤーのために詳しい本の整理を行っていた。クリスは運搬し俺が本棚に収める。修羅は大人気らしい後から後にプレイヤーが集まる。

三十分間働き第二段階の二つが付与される、修羅女と闘鬼で女性

なら修羅女になる。男性の方を取りたければまた働けば大丈夫だが完全に習得していないと意味がない。

残ったクリスの第二段階はほど遠くコギリが案内したモンスター多発地域でひたすら倒す。丁度戦士、魔法使い、僧侶といった感じでパーティを組んでコギリも魔法にはどん欲な方で攻撃魔法以外も覚え始めた、俺は第二段階を完全にマスターしやっと第一段階の二つを習得するクリス、闇ルートの知識で材料を集め換金しまたは材料から高価な換金属材料に換え逞しいコギリは大学生のゲーマーらしい。科学的に魔法の効果を説明できるほどの知識を持つ。俺達が高校生というのは何となくわかったそうだ。

ただ敢えて話さないが俺の性別は男だ、しかし見た目は女性だ。その事でコギリは敢えていわなかった大人の配慮だ。

一段落つくコギリが安心して一息つける無属性ルートギルドキヤンプで一息ついていた。

「無茶苦茶楽しい」

クリスが有料の清涼飲料水の果実を磨り潰した飲み物を啜りながら話す。唯一防具を持つ、光ルートは武具の購入ができる上に道具や様々なメリットがある。

「攻撃が下手くそだがな」

コギリが呟く、ジョブはないが装備も自家製らしい呪われた甲冑は闇ルートに完全に入ったため解け、代わりに闇ルートの防具である材料合成技術での防寒具の衣に体を覆う長衣。

「敢えて話すが俺は男だ、何故か性別が変わった」

「やっと言ったか、困るぞ性別が違うと」

「たぶん二重の禁断魔法を覚えているからだと思う」

「それもあるな、確かに二重はない、今までで初めてだ」

コギリはよく言えば落ち着き気配りに心を砕く性格、配慮もあるだろうが仲間から距離をとるようなクールな一面がある、必要なら組むが、必要なら孤高の一匹狼を目指す性格だろう。

「喰努、魔獣、修羅、修羅女をマスターか何とかここまでできた感じが強い」

「攻撃魔法は覚えないのか？」

「どうも合わないらしい、攻撃魔法を使うぐらいなら素手で倒す」

「楽しいぞ合成魔法もあるし」

「それは楽しそうだが面倒だ、基本的にゲームは嫌いだがこれは楽しい」

コギリが鼻で笑う、ハマっているのは明白だ、現実には楽しい、食べるのはマスターになる方法の中で最短距離を歩くようなモノで調べたが食べることは絶対に効く攻撃法らしい。

「ゲーム嫌いがあそこまで前衛に立ちたがるか、嫌いではなく合っていないゲームだけだったただけだ、ゲームには相性があるから少なくともこのゲームは受ける、ただ相場高いストーリーは何かの伝説のようだったが、魔法での戦闘さえあれば文句はない」

「ストーリーを求めないアクションが癖になったということか？」

「知らないだろうから教えておこう魔法は確かに魔法となっているが現実には様々な科学的な構成がいる、つまり全部マニュアルなのだ、優れているのはそこだ」

「何気なく自慢しているなどうしたクリス」

「二人は強いじゃない、でもあたしなんか足を引つ張ってばかり、正直雑魚扱いよ」

「何気にしていたのか、得手ふてもあるだろうが、私は剣を魔法の効果を増幅させオーブにした、闇ルートは技巧派が多い、ヘビークーザー向けだ」

「武器を変えてみようかな」

「得意な武器は？」

「一応運動系の長刀部なのよ、でも冴えなくて、訓練の一環で大鎌にしてみたわけ」

クリスがパラメーターを表示すると妙な点がある、スタミナの所が底についている。当人も驚く俺もコギリも驚く。

「えーと、どういうこと？」

「さあな、二段階目の癒し系統に人に尋ねることが一番だろう」

出発になり目的地に向かう、五属の攻撃魔法と防御魔法、癒しの魔法を習得したコギリの攻撃は的確且つ精密な雷系と動きを止める風系の攻撃が多い、それを教えると今後の克服課題にするらしい。

俺はマスターしきっており、適当に斬りつけることが全般でコギリから言わせれば典型的な戦士タイプらしい、悪くいえば単純であるがそれだけの強みもまたある常に動き相手の攻撃を防ぎコブナリ程度なら一撃で倒す剣士として才能があるらしい。

何よりも攻撃方法を躊躇しない非情さを高く評価された。道程で現れるのはコブリナ系統のレベル十まで魔法を多用するシャーマン

がいるが、基本的に弱い強いところでゾンビ系統のボウガンナーがいる、スナイパーの様に隠れて狙撃する、毒を使わないと言えば使うが、頻度も少なく装甲を貫通することもない相手にしないことが重要で到着した神。

殿には光ルートと闇ルートのエリアのようなキャンプがある、両方とも回復の魔法は重要で残念なことに回復道具が存在しない、魔法か拠点かの二択だけだ、放っておけば再生していくがやはり時間がかかる。カルマで判別するなクリスは光だ、俺も光に入る、ただ竜殺しのコギリが居るためプレイヤーは困惑気味だ。

### 第三章紡がれる日常3

神殿での管理人は非常に困惑していた二つに分かれ勢力争いならぬ試練の手助けで覚えていくプレイヤーが多い。

「試練にならない試練を受けにきたプレイヤーか」

「まるで試験官のような話だな管理人」

管理人は全員ありふれた日系会社員の顔に服装を中世の欧にしたような感じた。

「隠しても意味がないので話すが、抜き打ちテストを受ける側だ」

管理人からの言葉にコギリの顔が引きつる、事情を説明すると真剣に悩んでいた。

「抜き打ちテストを行う査定人か、しかも高校生なら抜き打ちテストに最適か凄いプレイヤーと組んだな、所で質問だがクリスのスタミナがつきている」

「それはそうだろ、装備を買うとき説明されると思うが重い格好をすれば当然に体力に影響しスタミナが増減する、軽ければ早く多く、重ければ鈍く堅く、つまり重量オーバーだ」

コギリが気づかなかったことに寂しく笑う、どうも博識を気取っていたらしい。考えてみれば当然のことだ中世の甲冑を最軽量にして二十五キロ、現代歩兵が身につける重量は二十キロ、理由は重い物を持てばわかる。

「つまりスタミナの回復が間に合わない重量だ」

「ってそんなこと有った・・け？」

「買物するとき説明される」

クリスが重い物らしく要らない部分を外していく、最終的に胸当てと腹当て、太股まである長靴と具足、防具として片腕の小手、なるべく軽量化に励み要らない物を捨てていく。

こうしてみると珍しい外見だ、中世の布地に地味な色のミニスカート、太股の半場まである長靴と具足、上半身はノースリーブの地味な色の上着に片腕に防具の小手、肩まで手袋で覆い、不思議な格好だ。下地になる顔は高校生らしく澁刺としており性格である行動的な印象の少女だ、まさに冒険者にふさわしい。

対してコギリは知的そうで美人だ、服装も運動より防具というより防寒具のようで厚手の衣類は体型を隠し派手に動くような外見ではない、どちらといえば屋内での研究などをしている方が似合っている、整った顔立ちはより玲瓏とした顔でいるがうっかりさんの所もある。

「対照的な二人だな、サバイバルの屋外冒険者と屋内専用魔導士」

俺の不要な一言でコギリが笑顔で、一瞬で構成し終え詠唱し放った、得意の風で動きを束縛し雷で感電させ麻痺したところに連携の火炎を放つそれで視界が奪われると床を破壊する、最後に確実な氷で打撃を与える、一瞬で構成し詠唱し放つ、低レベルの冒険者に見えるような真似ではない。超熟練者だ。

「いてえなぶっ殺すぞコラ」

「俺の台詞だ！仲間を攻撃するな」

「乙女のハートが木っ端微塵」

「熟練しているのはわかっている、優れた頭脳でそして的確な技

能だ」

「そう褒めるな、まあ二度と言っな」

コギリが蒼く染めている巻き毛をはねながら何気なく俺に話す。その顔は珍しくも直感の閃いたような一面だ。

「もしかして不要な一言で立場を崩す性格か？」

「言い換えれば一言多い」

「クリス？どっちの味方だ？」

「中立」

「クリス同僚だろ、相棒だろ、助っ人だろ？」

「だってねオカ野郎に肩入れするのは・・・道徳的に犯罪でしよう」

ここに黙って成り行きをみていた管理人が拍手する。注目が集まり。

「二重の法則です、禁断の魔法を解き放てば最初に甲冑、次に性別が反対になり一番か、最初に選べば遺伝子からの情報で二度と変えられなくなります、選びました？」

「鬼よか鬼だ、選んだ」

「不幸ですが甲冑だけは外せます」

「意味ねえゾ役たたねえナ」

「同じ目に遭いますかプレイヤー？」

「ミスマセン、ゴメンナサイ、私日本語苦手」

コギリが撃退され甲冑を外すが最悪なのは衣類まではがれ、下着だけになる女性の二人が興味深そうに眺めているが寒い、あわてた管理人が衣類を探すが無い。コギリが火炎を作り、暖をとる、男性用以外つける気は全くないため女性物を拒否し続け、管理人が本来

「ご褒美になる中世西洋の衣装ならインパクトはなかったがその時代に唯一運動向けなのが騎乗服、管理人がサイズを合わせ凄まじく寒いから肌寒い。」

「死ぬかと思った」

「だろうな、寒そうだった表面積の関係上寒い場所が多い女性の気分は貴重だ」

「コギリ何気に不機嫌だぞ」

「理想的な体型をしているからだ」

「すでに俺のセイ？」

軽くクシャミをする、寒さで死ぬかもしれないと沖縄で思っている俺ぐらいだろう。管理人がさらに厚着しなければならなかったためにフードマントにスカーフに、ご褒美の防寒+1を付与し、何とか春は心地よいなでも済む。

「甲冑どうします？」

「性能は良い方だな」

コギリが呟く、俺達が大騒ぎしている間に次の試験を受けるための来訪者が現れる。その気配に急いで甲冑を身につける。またしても呪われヘルムの中で嘆息する。

「試験はクイズに答えることです、ゼロ次は」

「ゼロに限りなく近い1」

「いえ知恵比べではないのですから1で結構です」

コギリの第二段階癒しの魔法、クリスの癒しの魔法が宿る、通常の魔法は暖かみや安らぎを感じさせるが俺は呪われた甲冑の中で嘆息するしかない、査定にきて何も見つけられなかったら次の仕事は

ない、安定した収入は常に学生の味方だ。言い換えれば失うわけにはいかない大口なのだ。

「査定も楽じゃない」

俺の独白に管理人は苦笑し、仲間の二人は何ともいえない顔になりやってきたプレイヤーは意味がわからないようでキョトンとしている。

「色々あつたが達者で」

俺達が神殿の出入り口に向かう。あれはやけっぱちの問題なのだろう。

「次は聖なる魔法だな」

「単体に体力半減魔法か、必要なのか？」

「後でわかる、不必要に見せかけて必殺の魔法だ」

「お気づいた？」

「査定人はわかるが通常プレイヤーはわからないことが、ストーリーの関係か？」

「俺が通常魔法を使わない理由は難易度を上げるためだ、だがクリスは逆を選んだ、王都につけばわかる」

それを言うと一応推測の言葉をコギリが話した。聖なる魔法とあるが効果は半減それから導き出されたのはレベル差があるモンスターの体力は高い、現に竜と戦う闇ルートのプレイヤーは苦戦していたそれを半減できるならそれだけで強みだ。

「おいしい、正解は聖なる魔法の系統から派生する補助魔法」

「使用者がこの程度か、答えは敵味方を識別する魔法効果だ、そ

れもオートでリトマス紙だよ、混乱する戦場で確実な魔法は？」

「なるほど唯一味方には効かないだが敵なら打撃を受ける、なるほど識別魔法か」

「相手が俺達のようなプレイヤーの外見なら識別は難しい、必然的に必要になる魔法だ」

「王都に何がある？」

「予想だが国王はすでに死んでおり亡骸が王国を司っている、闇ルートの方が勝手なことをしても放置しているのが現状だ、おかしいだろう？ 妙だと思うこの時代の国王は絶対王政に思われがちだが国王が邪魔ならと思う輩もいるわけだ俺はゲームが嫌いだ、だが歴史は好きだ」

「確かにあると思われるイベントか、当座はマーモに居るわけだな？」

「いやマーモのイベントはそれが終わりだろう、最初に警告された対をなす存在がいると、俺達が居るように裏で画策する謀略家も存在していると思われる、そもそも最初に教えられた政権交代の歴史ストーリー二人並びて夜の空に戦の炎をつけては嘆き、悲しみ、怒り、笑う、推測される歴史の暗部があるわけだ、気になるのは二人並びてだいつ二人が並ぶ？ ならば少なくとも有利に運びたがる者が居て変だと思うか？」

「国王傀儡説ではなく死亡説か、手がかりは？」

「王都の機能であるカルマの凍結だ」

「唯一闇側が行動できる、探偵か？」

俺が頷く、コギリが考えてみる、同じく答えが導き出される。一部に腹黒いモノを抱えている者が入り込んでもおかしくないむしろ必然的だと。闇ルートのプレイヤーが集まる修羅の神殿に使いを走らせる。俺達は中立ルートのキャンプに向かった。

二つのギルドの運営者は証拠がないことを理由に荒立てないこと

を話したが妙だという意見と俺達の意見を強く支持した。一端王都にプレイヤーが集まり戦というより王都そのものを疑っている。俺達が一応はいる、何事もない。王城までのルートを気づかせないように慎重に進める、最終的に王城に入るとき邪魔するようにプレイヤーの一人が立ちふさがった。最初に気づくべきだった王城に意味もなく屯している冒険者の姿を。

「竜殺し、マーモからでるのか？」

「語るに及ばず」

俺が抜剣したレイピアが冒険者の心臓を貫通し信じられないという瞳で即死する。俺が静かに宣戦を布告した。それに対し城壁の外で待機していた二つのルートの冒険者に合図として火災をおこす、怒濤の勢いで数百人の冒険者が雪崩打つ、王城に屯していた冒険者が籠城する様子でいたが潮時だと判断した者が城下町に逃げ込むと数人を残して逃げる。

「頭が切れるなポーンバスター」

コギリが話す、残った数人は竜殺しの戦士だ。マーモから離れたはずが存在していたわけだ。

「敵は強い方がいいってね」

「是非もなし」

コギリの魔法が構成され精密な魔法を紡ぐ、俺が前衛に駆け出す、クリスが唯一大鎌を構え城門に立ちふさがる、四人の竜殺しは連携をとることなくそれぞれの武器で応戦する。

「何があつた、どうしてだと聞かないのか？」

「闇は闇に散って謳え、狗は自ら吼えぬ」

俺の斬撃を一人が受け残った三人のうち二人が左右から攻撃する、残った一人が回復の魔法を詠唱し三人のスタミナを回復する。戦術的敗北を実感するのはこの後だ。

怒濤となった冒険者は勢いよく城に集まる敵からすれば兵を逃がす機会だと判断するだろうが愚かだ、監視していた巫女が城門を閉める出入りが禁止になるポーンの襲来だ。倒さないといつまでも閉まる。そこで初めて管理人の中で現状に精通している者が居ると相手はわかった。

構成された本来なら二重や連携すら難しい魔法構成を五重に展開し五属性の第二段階の魔法詠唱を終わらせ魔法の嵐が吹き荒れる。万能系中ダメージの核熱魔法。本来は五人の合成魔法だ。それを一人が行使したことに四人は驚愕の中で焼き焦げながら恨み言を残し倒れる。

「奥にいくぞ」

「悪いな大魔法らしい、疲れたオフル」

コギリの声は弱々しく、眠るように倒れる。かけるべき言葉は決まっていた。

「またなコギリ」

奥へと駆ける、主犯格の者を知っているであろう巫女の所に到着したときには一人のプレイヤーが居た、顔つきは平凡な悪気もない単純に盛り上げるための画策と主張するゲスだ何よりも人質を取る

うとした行動だ。

言いかけた所でレイピアを投擲する喉を貫通し声の代わりに血反吐が出る、予想外のことに呆然とクリスの一撃を受ける恐ろしい剛力で上半身と下半身の間に鎌先を通す。絶叫があげられプレイヤーは即死する。

「ツリだとつとけ」

俺が刺さっているレイピアを抜く。砂のように溶ける。

「色々とありましたか勇者殿」

「王都の管理人も大変だな害虫駆除の料金は割り増しだ」

「一時的に事件を調査します、次回もご期待します」

俺の視界が揺らぐ、俺のゲームが一時中断され現実に戻還する。培養液から出て、シャワーを浴び、私服を着込み、栗栖野と合流し報告をする。

「やっと表になったか、我々としてもプレイヤーの行動だと意見が分かれてね、手を出せなかった」

「またお尋ね者ですよ」

「最高のプレイだと評価が高いよ報酬は考えさせてもらえないか、いや割り増ししたいが、君の行動はプレイヤーが決めるべきの気があるってね」

「正確には俺達ですがコギリはどうしました」

「彼女か、恐ろしい技能だよ、同時五重構成詠唱、たった一人で最強魔法の一つを行使したあれは培養液で医療機能もある彼女の場合二十時間の過労だよ、ハマっているらしい」

「よかったら住所を伝えてもらえませんか？」

大江戸主任が頷き、俺達夜になる時間に帰寮した。出来事を話す気はなかったが一波乱あったゲーム初日で疲れ果てピザを食べた後に眠った。

気づく朝方で支度し外客を待つ、コギリが現れたのは朝食が済んだ頃だ。

大学生で十代最後の年齢の十九歳で理想的というよりグラビアアイドル並みのボディ。ラフな格好で現れ挨拶して食堂で話すべき事柄を纏めた。

「事件では圧倒的に許せない行動だと非難されているが、管理人側も困惑しているプレイヤーがプレイヤーを罰した、導き出されることはゲームの自立心を妨げることになるのではないかと、管理人側に強い処罰を求めるプレイヤーが多いが規定によると闇側の行動として問題ではあったがやりすぎた遊びの一つで片づけた」

「で闇側の修羅の連中は」

「許せないが圧倒的だ、竜殺しを金で雇った行動ではあったが、どう考えてもプレイヤーとしての行動ではない、ゲーマーとして当然のモラルに欠ける行動だ、良識であれとはいわないがイカサマをするような連中とは連めないとして新闇ルートギルドを立ち上げだ、どちらかといえば中立派に近い通称影派だ。」

今回の事件はプレイヤーが罰したが結果として我々はお尋ね者になった、純闇派からは刺客がくるだろう。

光側の動きがなかったが今回の事件で両派の対立は激化するだろう。私が提唱したいのはネットワーク構築だ。光も闇も無属性も情報を送れば闇が濃くなる、それを防ぐためのどれにも属さない情報ルート」

「管理者側に言いたいことは？」

「最低限マーモ島の管理だけはしてほしい」

携帯で情報を伝える、大江戸開発主任は最低限のマーモ島の管理を行うと話したが最初だけに難しい話でもあると。査定人に選ばれたコギリと行動や情報の交換を許可し現在の混迷するシルメリア大陸の事件を独自に追ってほしいと告げた。ゲームでは事件の調査が進められているが俺達に渡したい物を渡すために大陸との港に人を待たせていると。

## 第四章紡がれる日常の終わり

モノレールで向かうと人が待つていた、三十代前半の男性、ありふれた人物に見えどこまでも高い領域に存在するような神々しい雰囲気を持つ。俺をみると挨拶した。

「アリアベルタ・デ・久志、通称ヒートだが君には困った心当たりは知っているね？」

「もしかしてロシア人？」

「ロシア語は話せないがな、通称司令だ」

接近すると一瞬で捕まえられた、警備兵が動き捕獲され専用都市内部に連行された。二人は関係ないと主張したがそれは調べがついているので問題なく解放され、俺は小此木博士の研究室に連行された。

「さて会社の情報流用事件だ犯人は二人、一人は技術開発部門科学者、一人はヴィーナスから信頼されている学生探偵の一人、さてどういう見か？」

「老人に頼んだのさアルカイザーを超えられる力がほしいとね」

思いつきり殴られた、喋るなという警告であるが反骨心が強いために勢いよく変身した。それは予想された行動らしく司令が変身する、対アルカイザー能力を発揮するために妖魔の武具を解放する、変身し最強の座にいる男は苦悶の顔に一瞬で地に伏す。それを信じられないという顔で警備兵がみる、その時に警備兵全員を倒し変身を解く。

「小此木博士、俺は仕事があるから行くぜ今回はアフターケアだ」  
「倒したな？」

「ああ小此木博士が組み立てた能力で打ち勝ったあんたは最強を作った」

俺は研究室から出る、小此木博士は泣いていた、うれし泣きにする達成された悲願だ。俺は薄いもの、一人を倒したことに満足し娯楽部門に向かう。娯楽部門から俺のことで警備部門と対立しており間違いだったと話、警備兵が確認すると事件から関係がないことが証明される証言があるため問題はなく、通された。実際にアルカイザーが破れるわけにはいかないのだ。

それは絶対にあつてはならない、それは知っている、だから次のアルカイザーの改良で小此木博士の技術が有効に活用されるそれだけだ。

「医療を受けるかね？」

「大江戸さん探偵が彷徨くと不味い立場の者も居るのですよ、戦役の際に調べられては困る話を聞いたことは？」

「済まない」

「好いですよ？アフターサービスが仕事を招いただけです、今回のことはまあサービスの一環です、少し派手でしたが」

話していると警備兵の代わりにアルカイザーの一人が現れる、派手にやらかすつもりらしい。

「技術開発部門のコスプレだ、趣味人がいるらしい、しかし凄い少年だな、どうやって司令を倒した、なあ紛い物」

「記憶にございません」

「そう言うことにしておけ今回は借りと貸しだ悪かった」

ヘルムを外した顔は至って平凡な中年男性だった。ただ瞳が愉快そうに笑っていた。そして詫びの言葉と握手し記念写真を撮り去っていく。

もちろんコスプレだ、コスプレ以外ではない、当たり前だ、常識的に考えてとある説明されるも何もあんな現れ方にヘルムを外すことはない、この十六年間沈黙していたアルカイザーズの一員が常識はずれの行動はとらない。もちろん証拠の情報などない。だが都市伝説の一つとなるのは避けられないだろう。

娯楽部門で大江戸開発主任は困った顔で俺に渡す物を見ていた。本物としたら賭なしに特別報酬だ、技術開発部門が俺達用に改造した培養液カプセルだ。離れ業をしたコギリには相当な金額がつぎ込められた。俺用は少しの改良だが大場に違う。栗栖野のカプセルは緊急リミットを脳内麻薬だけで解放された栗栖野の能力を底上げする特殊な情報機材が積まれていた。総額にすれば億の単位だ。

「今回は正式な依頼になる、ダイブからは管理人を通してでしか話せないからどうする」

俺達がダイブする、風景が変わり、俺達がマーマ王都の入り口に現れる。外見に変化はないがパラメーターに一つの機能が追加されていた、クイックリセット機能、一時的にゲームの機能を停止させる能力、ヴィーナスの技術力が高いことは知っていたが常識的とは限らないらしい。

「やりすぎだ」

コギリがばやく、俺が頷くがクリスは使おうと指を動かす二人で止め港に向かう前にマーマ島の各ギルドの情報把握を行う、事件でお尋ね者になったが正式ではない拠点は放置され野良キャンプや様

々な村や神殿地域にある勢力の拠点は、お達しでは保護するようにしている。

純闇ギルドは沈黙していた、今回の行動で唯一非難しなかった、いや出来なかった、帰る場所が非難するわけにはいかなかった。わかつているだけに苦しい立場のギルドの運営者に挨拶だけで終わらせた。

港に到着すると一人の浪士が居た、西洋風が当たり前の風景に対し純和風の袴に胴衣、日本刀を腰に下げ港で趣向品のキセルを銜えていた。

「君達か、快拳なのか少なくともマーモでは好意的だ、定期便の船に魔獣がでるイベントがある、だが魔獣殺しがないと苦勞するだろう、作ってみたが効果は知らないぞ」

浪士が懷から宝石を取り出す、受け取ると陽炎のように消える。

「魔獣殺しが必要になるまで深刻のようだな」

「並の連中では勝てるような相手ではない、必要になるが作成方法から何まで秘密だ、管理人が絶対に話さなかった知識だ、大陸では一つの宝石が奪い奪い合い、そんな修羅場らしい、それは紅玉と呼ばれている、膨大な魔力や体力に変換できるレアアイテム、それを使うことで小国家を攻め滅ぼすに至る兵器が確認されている、何でもありな様で厳密には正しい知識や様々な技能がいる、戦闘力もしっかり技術力もしっかり」

「じゃ今の人は？」

「闇派だろう拠点に入れないために技術力は高いがああ男足下に」  
「単なる灰よ、煙草の原料を見つければ作れるからなもしくは動物から」

「いや徹底した和風だったと思って下駄よ」

船が来るがよく考えると船に入る渡航許可書がない。船をみながら渡航許可書を持ってにいる人に複製を作るだけ、待つてほしいと説得するのに時間が掛かった。

偽物の精度でわかるらしく質の悪い物はバレ賞金が増える、ついでにカルマポイントもマイナスになる。財宝を探した方がいいという良心的なプレイヤーも居たが、正式な依頼を受けている側としては一刻も早い大陸渡航を目的として苦心の末に作り出し密航した。

しかし密航した船舶は不幸にも魔獣の襲撃を受けプレイヤーが全滅、船としての機能が大幅になくなり当然密航している俺達が見つかる。捕まり漂着した大陸南部のグレートシルメノア湾のユターラ町で最悪なことに光ルートの王国がある付近だ。

当然のように牢獄に入れられる。助けも何もあつたモノではない。

「脱走することに異議は？」

「開けられるのか？」

「確認したが隙間に門を入れるだけだ堅く細い物として俺のレイピアがある」

唯一の灯火の蝋燭を使い扉の隙間に剣身を差し込むテコの原理で門を上げ、脱走する。邪魔だてするように騎士と兵士が現れる、屋内のために重装備の甲冑を着込み、一撃を受けても倒れない魔法の三重構成詠唱での万能系核熱小魔法で吹き飛ばし突破口をこじ開けて市外に出る。

丁度連絡を受けた騎士より強そうなプレイヤーの聖騎士と表示されたプレイヤーと出会い頭に切り結ぶ。

「大人しく捕まれ密航者」

「悪いが処刑されるのはイヤだ」

剣を構える聖騎士は召還の魔法を使い下級に当たる騎士を召還し増援を次々と増やしていく。

「分散するぞ町の外だ」

返事の代わりに魔法が解き放たれ家屋が燃え上がる。その間隙を突破口に逃げ出す町の外に到着する、二人が現れたのは直ぐのことだ。聖騎士も現れ事情を話した。

「現在混乱としているが一つの秩序が生まれようとしている、紅玉の力を借りた中立側の冒険者ギルド、頻発する国家の軍事衝突に歯止めをかけようというわけだ」

「で本題は？」

「噂には聞くマーモ島の謀略突破、あの時光側は行動に移せなかった、だから国家間の調停を取り決めたいと思う、そこで闇側に対する使者として君達を選んだわけだ」

「ではなぜ捕まえようとした」

「功績になると思ったそれは私欲だ付いてきてほしい」

お互い顔を見合わせるそして決まった。

「了解した」

聖騎士は安堵の吐息を漏らし案内する。現在大陸では群雄活況状態で大勢力と呼べる存在がおらず無秩序と呼べる。案内された王都はこぢんまりとした小さな町だ。

王都に入ると本来は攻撃してくる騎士と兵士がいるが、機能が止められているらしい。王城に案内されるが館と呼んだ方がいい。ど

うもささやかな国らしい。

国王は若い騎士だった。どうも騎士同士の国らしい。

「竜殺しコギリ、勇者羅刹、剛力のクリス三名をつれて参りました」

「おうよかったぜ、国王成り立てなんでそこんところしく」

聖騎士が嘆息する親近感が非常にわく。

「手っ取り早くいえば、属性による憲法制定の母胎になる条約の締結だ小難しいが必要だ、金も払えない貧乏国家だが切り札がある質のよい塩だ海にも面している将来性はあると言うことで、出世払いでいいか？」

国王の物言いに俺達は絶句していた、その後おかしくなり笑った、それを承諾し判断し手紙を渡し勢力の情報がかれた地図を渡す白紙の部分も多いが大陸南東ニューサエズウェルズを占領した光小国家郡、大陸北東クインスランドを占領した闇側小国家郡と部族郡。北部地方は白紙で南部サウスオーストラリアも王国が一つあるだけ、西部ウェンスタンドオーストラリアに関しては立ち入り者すらいな

い。  
聖騎士が光側に対する使者になるらしい。俺達は闇側の北東部に向かう。正式の町などは数える程度しかない残りは開墾や地力で作るだけ。感心するほどの開拓精神で俺達のような派手な事件を暴くような冒険者は一握りだ。

闇側の領土クインスランドは光立ち入り禁止の看板があった。

比較的大規模な都市国家混沌たる同盟を訪ねた。

国王に謁見し手紙を渡した。何度も読み返し闇側で話し合った後

時期を取り決めることになった。

返答の手紙を渡されお礼に魔法書を渡された、魔法の原理から現在開発されている様々な魔法情報がかかれた物だ。魔法のエキスパートコギリが愛読ページを捲ることに関心の声を上げていた。喰奴ルートは俺一人らしく闇側でも同類は見あたらなない。

とある闇側の町で乗り物になるコカトリスを購入し高速で戻った。二つの勢力の共通する条約の締結は物議を醸し俺達は時間を潰すために西部に向かった。

コトカリスは途中で放し、徒歩で向かう。

適当な場所を見つけたのはゲームの時間で一週間程の場所だ、偶然の砂金を見つけたコギリは金鉱脈があると判断しイベントらしく探し始めた。結果として金脈三つに希少金属のマテリアルの鉱脈一つ、十分な場所だ。国を興す気はなかったが鉱脈の保護や開発から近くの正式な村や町がありそこでノンプレイヤーを雇い働かせ金と希少金属の開発を行っていた。

俺のアイディアでノンプレイヤーを大規模に雇い、冒険者ギルドに資金を提供する仕組みを作った。これも予想されたイベントらしく盗賊が襲撃するイベントが発生し被害は深刻な量にまで達した。人手が足りず冒険者ギルドを通し護衛や討伐イベントを行ってもらうべく使いを出した。現れたのは冒険者ギルドから依頼された中立ルートの冒険者の旅団、傭兵団でもあり職人集団でもある、金脈と希少金属の鉱脈の護衛および開発を依頼し仕組みとして俺達が働かないでも儲かる仕組みになる。

鉱脈を探し西部を放浪した。西部は鉱脈の宝庫らしく無数に見つかりと相場が値崩れするがあまりに多いので中立ルートの冒険者に売り払った。それにより大陸の西部に中立側冒険者が集まるようになり大規模な国家作りが始まった。三権分立の観点からノンプレイ

ヤーを雇いローマの様に元老院や皇帝からの政治機構、軍団からの軍隊制度、発見者を保護する法律が制定され膨大な発見をした俺達には資金があるので国家に寄贈した。お礼に俺達三人に領土を与えた。三つの金脈の周囲に伯爵領土として専属の護衛集団は従騎士になる。

豪遊する性格ではないので魔法の有効性から開発する学園を建設し士官を育成する軍事学校、教育、開発、研究機関を作り財源の許す限り支援した。

そんな俺達の行動は国家に大きな影響を与えた自己中心的な行動が目立つ中立ルートの冒険者に俺達のような冒険者を目指すようになる、世界を放浪し人助けやより良くする事柄や仕組みを作ることそんな考えの集団が生まれ、三つの勢力が秩序をえる場所南部オーストラリアを非戦闘地区と取り決め戦争においても進軍を禁止した。そんな歴史が長く続いた。

現

実に戻り中立ルートの者に歓迎され娯楽部門でパーティを開いた。少なくとも娯楽部門の狙いは当たったクチコミで自由度の高さから空の軌道の評判は高かった。

そんな時光側の聖域と呼ばれる聖騎士の国の国王になるプレイヤーが会いに来た。

「おかげさんで何とか財源になったありがどな」

若い大学生の年齢だ、体育会系らしいが生徒会との関係もあるそうで体感したと、ただなぜか人望があり光側の騎士道を重んじるプレイヤーに押され国王になり王国を作ったそうだ。

闇側のプレイヤーも集まりゲーム世界での金銭から技術提供があった、そして闇側が見つけた古代遺跡の情報が流れた。いずれ戦で戦うが現実まで争う気はないらしい。当たり前前の良識だ。

空の軌道に参加しているプレイヤーは世界中にあるヴィーナスの支社での行われているらしく正式公開が待ちどろしいともっぱら評判だった。

聖騎士の国王と俺はハードボイルの話題で盛り上がりコギリはひたすら魔法情報を聞き回り、栗栖野は護衛の集団とカラオケをしていた。

パーティが終わり帰寮した。

#### 第四章紡がれる日常の終わり（後書き）

誤字、脱字の指摘等、ご鞭撻下さると助かります。  
観想などもお待ちしております

## 第五章 獲物と獲物

先輩の二人を誘うと考えたが二人はゲームには興味がないと断った、大江戸開発主任にきてもらい熱く語ってもらったそうすると金を払い参加してみると話した。現実には厳しい強行軍だったため足が棒になっていた。医療技術が使われていなかったら泣けてくるような痛みだろう。

ネットで空の軌道に参加したがるゲーム好きが正式発表を待ち遠しいと好評だった。

ただ今までの酷評からの反省点も多かった。そんな一日が過ぎ三月最後の日きた。ゲームにダイブする。

最近の流行で西部の衣装は男性にしる女性にしる、肌の露出が多い防具も部分的なモノが多い、現実には暴漢に襲われても現実の法律に違反する行動はないため、男性は大いに喜び同時に大会がよく行われた。

三つの鉱脈の領地は買い求める商人相手に商売を興した者がいて数百人のプレイヤーが暮らす、俺達は特にすることはないので冒険に向かった。交通機関の発達から駅馬車が作られ乗り継ぐことで様々なダンジョンや遺跡に迎える。

現在の需要と供給で古代遺跡に眠る装備は貴重で高価だ。もちろん製造技術が判明すれば一大財産だ。そんな山師が集まる大陸中央にある灼熱の砂漠にあるアマデュース湖の遺跡は活気にあふれていた。手はずで遺跡の情報を提供する古代遺跡の学者との合流がある。

学者は中学生の子供だった。ただ頭がよく飛び級で大学に通う学生。

「ローマ神聖帝国の伯爵の三人か」

「ああ小さいから小学生かと思ったぞ悪いな一言多くて」

「気にするなおまえさんら三人の評判はいい特に貧しい学者に対しての資金提供は感激した、学者からの情報提供だがひとまず宿に行こう」

学者に連れられ到着した宿屋は木製の珍しいことに丸みのある建造物だった。オアシスでもあるため水が豊富で綺麗な中庭もある。宿の主人は雇われたノンプレイヤーだったが愛嬌のいい踊り子だった。テーブルに案内され学者が持っている資料が渡された。

「遺跡のことは闇側より伝わった、ただ欠点として技術にどんな闇側だ、歴史調査やそういった古代情報の研究はされていない、我々学者ギルドは古代遺跡の謎を解明し、古代にあった戦の背景を探ろうと思っている」

「では学者さん、話してくれ資料は歴史的専門用語が多く時間がかかる」

「だと思っただけにまとめたせいで欠陥が多い、まあ説明というか我々の研究で判明したことは二つの月の事だ古代遺跡に必ずある紅い涙を零す下弦の月、蒼い色合いの月、この二つから古代遺跡は二つの月の住人が作ったと思っている」

「それは早計ではない、モンスターとい落ちもある」

「ならば問うが、古代の文献にある嘆き、悲しみ、怒り、笑う、この四つは人間やそれに類似した種族の存在がない限りあり得ない、理由としては前文にある戦の炎を見つけては」

「確かに、その点は同意しよう話を続けてくれ」

「うむ、続けるがベルテセルバ戦記を知っているか？」

俺達は沈黙した、知らないと言うことになる。

「あれは二十世紀に作られたゲームだ、しかし歴史的な背景が存在した、それを考慮すると他の惑星から飛来した種族が月に暮らした、しかし原住民は戦を行った、この点は当たり前になっている学説だ、しかしここからが違う、空ゆく船は死に神の翼、飛行船や飛空船の存在だ、しかしこうとも考えられる宇宙から攻撃された」と

「それは飛躍しすぎでは？」

「無論だ、飛躍しすぎている現実性がない、そして私個人の推測では人を殺し、もしくは捕らえて月に運んだと思わないか、我らの御霊を地獄に運ぶ、地獄は月ではないかと」

「纏めるが、古代遺跡にある二つのシンボルから宇宙技術を持つ種族が飛来し月の住んだ、しかし惑星での戦をみて止めようとしただが戦渦のせいで住民は恨み総じて戦に向かった。だが思うが宇宙技術を持つ種族と惑星に暮らす先住民では技術格差が多いすぎる、戦にならないだろうスペースシャトルをどう破壊す」

「そこだ、つまり対宇宙兵器があったと思われる」

「にわかには信じられないがそれを探しているのだな？」

「我ら学者ギルドにも意見が分かれる、私は対宇宙兵器があったと思っっているが逆に宇宙側の技術漏洩で対抗する宇宙船が作られたと思われる、他にも学説は無数にある、この遺跡は大規模だ手がかりを探っているが見つからなくてな」

「それで俺達に協力し手がかりを見つけないと？」

学者が頷く、が戦闘技術に関しては自信がないらしくダンジョンその物に入ることはできても戦闘に参加できるほどの強さはないと話した四人目の仲間マキシルだ。

遺跡は大規模な地下ダンジョンだ、モンスターのレベルは高く二十が平均らしい、そして八階まであり広大なダンジョンから広き者と呼ばれている。

湿っぽい地下迷宮が広がる魔法戦闘の専門家であるコギリが闇側

から提供された探索用魔法の応用で明かりを作る、感心したような吐息が漏れる。

マキリルが最後尾にいる、戦闘能力が低く戦闘そのものに向いていないらしく体を動かす動きも雑だ、探索用の荷物を持つ、俺が前衛でふんだんに希少金属を使った魔法強化合金を吸収させた無形の剣は細身からフランベルジュと呼ばれる剣になっている、単純な攻撃力を追求したため屈指の攻撃力を誇り、軽いながらも防御効果もある。呪われた甲冑に闇側が作った重防具を着込み防御力、攻撃力は共に仲間随一、クリスが中衛になる、大鎌に攻撃回数を増やす強化魔法を何度もかけ、最速の手数を誇る、防具は嫌いらしくいつもの格好に強化した部分防具でいる。防具その物を身につけない衣類だけのコギリでいるが衣類の中では高価な分類に入る女神の衣から作り出された金脈購入額同等のローブを着込んでいる。唯一魔法専属の武器にしている。

戦闘になるモンスターをやり過ぎし三階までは無戦闘で到着したが中ボスらしい黒竜が眼前の全身漆黒の巨竜は、その鱗の色が如実に示すとおり黒竜であった。猛毒を吐く獰悪な種類の竜である。しかも掲げた頭部までの高さは、優に城並みの高さがあった。計測から瞬時に情報を把握する、頭頂までの高さの後方にくる尾までの竜の全長は20メートル、黒き邪竜の凜列した、その永劫の氷河の様な目が、俺達の視線と正面で衝突する。視線だけで身体を恐慌させる力を感じる程だ。

ウアアアアアアアア！

俺の獅子吼が広い空間に木霊する、それが戦闘の叫びになり、俺が右側に走る、重防具の魔法技術合成聖獣金属がぶつかり合い金属音を響かせる、遅れてクリスが左側に走る、そして瞬時に魔法を構成し詠唱していたコギリの科学現象系爆裂魔法が放たれる、TNT

爆薬と同等の効果を持つ軍事用爆裂魔法が火球を作り黒竜の胴体で炸裂する、爆風の中、黒竜は死の吐息の目標を分散させられたことに攻撃を迷った。

疾風となるクリスが腰の帯から金属筒を三本引き抜き、投擲を行う、モンスターにふれると粘着液体から発火の攻撃で激しく燃焼する。それに気づきコギリが火炎の魔法を一瞬で放つ。激しく燃え上がる燃料をモノともせずそれを無視した石壁を紙細工の如くに破碎しながら、竜がその黒鱗で鎧われた巨軀を乗り出す。それだけで大地が鳴動し、大質量の生物が放つ、高圧の圧力が岩山の空気を張りつめる、同時に巨樹を何本も抜ったような筋肉の束の左前脚が、俺に向かっていき横薙ぎに振り払われた！

破壊槌の破壊力と風の手速を併せ持ったその超質量の一撃を俺は落雷の手速で体を屈めやり過ごす。槍の如き竜の長爪が装甲の表面を掠めて走り、青い火花と悲鳴を上げさせる。

刹那後、たわめた体を伸ばし、クトゥーが竜の懐へと弾丸の低空跳躍を決行する。

その腕に持っている無形の剣を竜の軸足、城の大広間の支柱を思わせる右前足に叩き込む！その剣身が竜の高硬度の鱗を断ち割り、肉を切り裂き、赤黒い血が迸る。それは専属の武器の中でも攻撃力に特化しているからだ。

竜が苦悶の咆吼をあげる。

薙ぎ払った左足を返して俺を叩き潰そうとするが小癪な人族は後方に素早く飛び退きかわす。

俺が持っている無形の剣、通称フランベルジュ、紅い刀身に燐光のような淡い光、外見に反し最強の攻撃力を誇り、長さは1500

ミリ、刀身に等しい長い柄から、子供の肩幅ほどもあるその幅広の刃が伸び、根元と中程で湾曲しているその形状は、歪んだ四辺形のようにも見える、竜の黒血が禍々しく濡れて光っている、竜は巨躯を後方に退き、胸腔を急激に膨張、死の吐息を吐くべく大量呼吸吸入を行う体勢に入る！

竜はようやく気づいた。眼前の人族が単なる獲物ではなく、偉大な竜族たる自分を傷つける力を持っていることに。

竜の喉元がせりあがり、まさに死の息吹を放射しようとした刹那。

コギリの魔法専用武器のオーブから砲撃に等しい白刃のプラズマ化した雷球が超高速飛翔する。命中すれば庭園の池程度の水量を瞬時に蒸発させる、凶悪な破壊力を持つ。

そうコギリの魔法攻撃のために俺が時間を稼いだのである。

死の雷球を右前脚で直接に受ける黒竜。瞬時に血肉が霧と化して弾け飛ぶ。

コギリの顔に驚愕の念が走る、竜は瞬間的に負傷を最小限に抑える方法を取ったのだ。

片足を失う激痛に細めた竜の瞳に、瞋恚の炎が色を強める。

あまりの出来事にコギリが活動を停止したそのとき、竜が溜めていた息吹を吐く。

吐息の蛇の毒に似た、ストレプトキナーゼによって人体細胞を分解する化膿連鎖球菌など、欠陥を破壊するプロテアーゼと総称される蛋白質分解酵素が含まれ、血管の破裂による酸素欠乏症で死に至らしめる。それを浴びれば生きながら毒死するという地獄の苦痛の初にして最後の体験しながら絶命するだろう。濁った死の本流が熱烈にコギリを抱擁する寸前、猛禽類の強襲、速度で走り込んだクリスがコギリを抱え、横転する。

毒ガスが地面の石畳を妬く白煙を上げ。

白煙幕に紛れクリスとコギリはさらに転がり、竜の毒ガスのさらなる追撃をかわす。

白煙が周囲に一帯を多いつくし、風景すら一変させていく竜の超破壊力。

完全にかわせず、クリスとコギリは背中や足に毒ガスの一部を浴び、姿勢を崩す。

惨状の大地に這いつくばるコギリを一別してクリスは竜へと向かって再度の疾走を行う。竜はその長大な尾、地上最大の鞭をしなければ、クリスが寸前までいた地面に叩きつけて視界を塞ぐほどの爆煙を起こす。

轟音で大気がびりびりと震える。クリスは唸る尾をかくぐり、さらに右前足を失った、竜の死角、右方へと疾駆する。コギリが戦意喪失している以上、クリスが狙うのは竜の最大の急所たる逆鱗が存在する喉しかない。

飛翔しようと長身をたわめたクリスに竜が軽い吐息を吐く、それでも地上の生物なら装甲なしでは確実に即死する冷氣だ。それを俺が受け止める冷氣から俺の呼吸器官系が破壊され口から血反吐が零れる、だが戦闘能力はある修羅二段階目の攻撃スキル、乱心の一刀で黒竜の失われた前足の鱗に斬りつける、そしてクリスが慣性と全体重を乗せた大鎌の一撃を天に届かんとする竜の脳天にたたき込む。竜は首を後方に反らせ、必殺の刃をかわす。

このままクリスが着地すれば、竜の追撃で無惨に引き裂かれるのは容易に想像ができた。そこにコギリが戦意を復活し強風を起こす、身軽なクリスの着地点が外れ、竜の尾が低重音を響かせ地面に振り下ろされた、それを俺が受ける、防具を破壊できない一撃であるが、

質量からの衝撃はすさまじく床の石版が破砕する、同時にフランベルジュの剣が降られる尾を断ち切る。

どす黒い鮮血が俺に降り注ぐ、時間は稼いだ、クリスが左側に移動し治療の魔法を俺にかける、肺の凍傷が治りがなくなりスタミナが急速に回復していく。

着地点の流、左前足首に回転した大鎌の渾身の刀身がめり込ませるっ！

苦痛の咆哮をあげる竜が吹き飛んだ右前足でクリスを薙ぎ払おうとする。右前足の長さが足りないためクリスの顔面を掠める。クリスが後方に飛びすさり、額から流れる血を舌先で楽しむクリスの横顔が見えた。

対峙する巨竜の手先が吹き飛んだ右前足と切り裂かれた左前足に何かが蠢く。骨格が再生され、筋繊維と血管、神経網が張り巡らされていき、鱗と五本の指が爪までもが完全に回復するまで僅か3秒弱。竜の高速肉体復元である。

これが高位の竜である。高度な知性と強大な体力と能力を備えた地上最大の生物。破壊をもたらす兵器や技術を駆使しても竜には軽傷すら与えられない。

毒ガスと冷気の浴び負傷した絶望的状况だったが、俺は金属装甲に覆われた鎧の背中は全く闘志を失っていないかった。これが俺の勇者羅刹と呼ばれる人物の生き様だ、あまりにも違いすぎる。俺はコギリを一別して侮蔑の瞳と嘲笑の笑みを浮かべている、嘲笑っている。

高僧のように悟って死ぬよりは戦って暴れて足掻いて死ぬ、単純

だがそれが冒険者だ、故に尊く人々は畏怖の念を込めてワイルドギースと呼ぶ、そしてその端くれたるレイヴンも孤高の鳥の名前を冠するだけはある。

怒れる巨竜は間合いの遠い尾と吐息を主体に隙のない必勝の戦法で俺とクリスを襲う。石壁は倒壊し石畳が毒ガスにまみれる。この世の終演が来たかのような、竜の破壊の力を、俺は受け、

クリスは受け流してかわすが、そう長くは耐えられない。

コギリの様な後方支援可能な冒険者がいる、その為の陽動だと気づき、コギリが完全な皇位魔法の構成詠唱体勢に移る、それに竜が気づき、毒ガスの吐息を吐こうと首をたわめる。

俺が投擲したフランベルジュが竜の下顎を半端断ち割るように突き刺さり、死の吐息の放射を強制阻止する。

爆ぜる自らの毒ガスで顔面を灼いた竜は激昂し、俺を喰い殺すべく上下顎を開き強襲する。だが竜は戦法を誤った、コギリの魔法構成詠唱を阻止しなかったことを、瞑府の底で後悔することになる、竜に概念があれば理解できる話だ。

白刃の超弩級の雷球が再度放たれる、光速度で蒼天の大气を貫き、雷球は竜の首を狙うそれを同じように左前足で防ごうとするただ方角が違い空中に投げられている投擲筒にぶつかり大爆発を起こす、それが煙幕となり全ての投擲ナイフが放出される。

圧倒的な爆発が竜の全身を焼き尽くし嘲るように竜が前足を下ろす。

それが誤りだ、次の瞬間には三弾目の雷球がフランベルジュに突き刺さる。

途端に刀身を伝導体として、竜の体内に電撃が进らせる。

殺戮の電子の奔流は頭部脳髓から首、胴体、内臓を灼き、沸騰させながら、左前足から地面へと駆け抜けていった。

驚異的な肉体再生も脳髄自体が沸騰すれば全身の神経網と内臓を灼かれては発動すら許さない。身体中の穴から白煙と沸騰した汚泥のような黒血を零して大きく痙攣する竜。

俺達の長い間の戦い、長い時も続いたお互いの連携は自然にとれている。

死に瀕する黒き竜。

だが、熱で白濁した竜が苦痛と凶気に見開かれたかと思うと、俺をその巨顎でかみ殺そうと爛れた首を疾走させる。

竜の瞑府への道連れに選ばれた俺は真正面から突進を受け止めた。即死の激突衝撃のはずだったが、周りは今日何度目かの新鮮な驚き驚異的な戦慄を味わう。

俺は風で速度で襲ってくる巨竜の、その下顎部に刺さった自らのフランベルジュの長柄を握り両手に握り止めていた、しかし死に狂う竜の頭部の勢いは止まらず、衝撃で俺が空中に浮く。

「がああああああ！」

鬼神の咆哮とともに石畳を破砕して最大剛力で剣身に回す。鱗と筋肉と骨を焼き切りね砕き留擬身は地から天への弩雷となり虚空へ

と走り抜ける、黒竜の頭部はそのまま切断され蒼天の中空へと舞い飛び、石壁の一つへと激突しそして黒い血の痕を引きながら落ちていった。鼓膜が痛くなるような沈黙と静謐。

下顎の一部を以外の頭部を失った、小山のような黒竜の胴体は、コウモリに相似した黒翼をばさりと一度だけ振り、ある種悠然と傾斜していき、ついには耳を聳する地響きを立てて地に倒れた。切断面から流れ出る膨大な黒血が、天上に輝くランプを映していた。

「コギリ戦意喪失するなよ」

「済まなかったな珍しく失敗ニヤン」

「私が居なかったら即死よ？」

「正義最後に勝つ」

「おう坊主楽しかったか？やはり竜はいいな」

「変態と化け物の組み合わせだな単体で皇位魔法を普通使わないだろ、痛いのに攻撃を受けるか、ゲームなのにあそこまで壮絶な戦いは演じられないな」

「じゃ行くか」

「いや調べよう何かあるかもしれない」

「わかった久しぶりに竜でも食うか」

「一つ聞くが何故禁断の魔法だけにしている？」

「坊主楽しいことはやり込まないとな熱中できることはいいぞ」

俺がヘルムの口元を外し、竜の死骸の中で食べられそうな場所に食らい付く、クリスは材料になりそうな部分を採集する、コギリは集まった材料から使えそうな物を纏めている。

## 第六章伝説の果て

現在俺の喰奴は四段階の神獣、修羅の女性版四段階天女。炎、氷、雷、風、地の四段階のコギリ、癒し三段階、聖なる魔法三段階。コギリの場合は雑魚を一掃する事と特別仕様の五個の選択ができる、ただその分成長は遅い。全員が中位に位置する、レベルは平均十五

俺が食らえるだけに食べるとレベルアップしたこれで十五だ。喰奴は食うだけでレベルアップする。現在の自動スキルと戦闘スキルから呪われた甲冑が変化する、表層の重防具が外れ、生体甲殻装甲甲冑が全身鎧から急所だけを守る鎧になる、代わりに無形の剣が変化し剣身の周囲に結晶が覆う、丁度身長分の長さになり鍔の所が全方位に張り出し剣というより兵器のような感じだ。それでいて重量感もない。重防具を身につけると急所を守っていた装甲が強制的に吸収し形状を変化させ女性剣士のような外見だ。

「軽防具に強制的になるか困ったな」

「収納されているだけだろう、モンスターが近づくと全身を覆うらしいと噂されているが、本当だろう」

博識なコギリが説明する、納得するしかない。食べ終わるとクリスタルに覆われたフラルベルジュを枕に眠った。

起きる頃、材料集めが終わり、高価な部分が材料となり安値の部分は集められ一応ゴミ捨て場に置かれる、熟練したプレイヤーは品定めから安い物を運ばず捨てる場所が生まれている。

竜の首から上の頭部は価値があるらしく肉が捨てられ骨が俺に渡さ

れる。防具と判断し被ると呪われたヘルムが吸収し小さくなり顔を覆う、どちらかといえば蛮族のような外見だ。

「マキリルが話したが、頭部の頭蓋骨は防具になり、プレスが吐ける様になるそうだ」

試しに深く呼吸し誰もいない空間に吹き出しと酸の霧が吐き出された。それは呼吸が許す限り吐ける。

「最大値の体力に関係するらしい使用しても減らない攻撃方法活用しると、当人は寝ている」

「そろそろ起こすわ」

クリスが竜の肉を焼いた焼き肉を食べ終え近くで寝ているマキリスを起こす。

「お起きたか、一応手がかり見つかった、竜の胃袋古文書があった、書かれている内容は我ら怒りて灼熱の吐息を吐く、全ての大地を焼き払い永久焦土の万雷なり要約すると兵器だ」

「そんな超兵器があるの？」

「わからないな、クリスが知っているわけでもない、クトゥーは？」

「灼熱は言い換えれば熱線砲じゃないか、収束する光熱波の放射だ」

「非現実的な科学技術だそれともヴィーナスの完成させたのか？」

コギリが話すと俺が首を振る。

「二十世紀に完成されている、ただ出力不足から実戦には投入されなかった、それをヴィーナスが改良し軌道衛生上で大陸弾道ミサ

イルの迎撃装置にしている出力さえ完成すれば無制限の熱線砲の砲撃が可能になる」

「有名ではないが軍事雑誌でも読めば載せられている情報だ」

「わかった、しかしどうする、今発見すれば最悪軍事バランスの崩壊があるぞ」

「発見し聖域の王国に隠すのは？」

「無理だ、そもそも兵器の大きさがある、大地を焼き尽くす程なら等身大とは思えない」

「しかし学説には必要なのだ、頼む」

「わかった戦士として守ろう、俺達の領地に運ぶ、ただ協力というわけにはいかないか、それを稼働させる技術開発と運用法の構築それが条件だ」

マキリスが安堵して事後承諾ではあるが二人も肯定する、戦になれば必要になる力だ。ただ問題はその後だ、戦が終われば次の戦に使うかどうか、問題は大きく国家政治に影響する。

下層を目指し進む、雑魚モンスターは俺のプレスで簡単に即死し、多少抵抗できる者は俺が叩き斬り、抵抗が完全にできる中レベルのモンスターには三人で殲滅する。大きな戦闘力の差があるためマキリスは非戦闘員扱いだ。下層は入り組んでおり地図を確認し八階を目指す。

最終階層は広大な空間に遺跡があった、遺跡の中にある遺跡は生活するための場所に一本の剣が突き刺さっている、壊れた兵器である大きな樽、マキリスは剣が刺さった樽が兵器だと主張し調べている、俺は剣を抜いた。ありふれた黒い剣、クリスタルに覆われたフランベルジュに混ぜると黒い闇が剣を覆う。そして二つに分かれた一つは強化された無形の剣の握り柄、剣身のクリスタルに覆われた漆黒の剣。まるで封印しているようだった。

「どういうことだマキリス、コギリ」

「無形の剣は一言で言うなら勇者の剣、つまり相反する剣は拒絶する、それが黒曜石の剣ではないか？」

「調べてみるが文献がないことには難しい、ひとまず無形の剣が拒絶する剣というしかない」

俺の収納された甲冑が急速に展開していく敵が接近している証だ。武器になる剣をどちらか選べないといけないが面倒だと両方握る、相反するよう握ることはできても性能を発揮する形態にはならない。

「誰か接近するわね」

クリスが大鎌を構え背に俺とマキリスを守る。

「ああ接近する桁違いの魔力を感じる」

単独での中位の五重構成で核熱系の最強魔法が練成されていく、唱えられる詠唱から最強の魔法が具体化していく、パーティの周囲に核の灼熱が大気を高めていき。現れたのは五人だ。

一人は東洋的美人の知的な雰囲気女性の女性で四人からは距離をとるように後ろにいる。残る四人には覚えがある竜殺しの純閻派の四人だ。ただ外見が変わっている。全員が戦士の様な感じから、一人はゲル状生物甲冑を身につけている深緑の短髪巻き毛の女性、一人は枯れ枝のような土気色の魔導士風の男性、一人は闇ルートの先鋭的な甲冑に身を包むが出される雰囲気は吐き気がするような劣悪さだ。統率する男性は鎧を身につけているが剣を持っていない代わりに浮

くオーブが四つある。

「さて何用かな」

「黒陽の剣を渡せ」

「残念無念無理難題」

コギリが横やりを入れて茶化す、俺が失笑し、思いっきり笑う。  
四人は交渉をする気は更々無い様で武器を構え戦闘用魔法を構成し始める。一人の女性が前に進み同じようにクリスタルの覆われた剣を凝視する。

「大きすぎる力は世界を破壊します」

「故に護るのだ、一つお聞きしたいなぜそんな劣悪な連中と一緒に行動している」

「私個人が調べた結果ですが、その剣は狂気の剣で闇の聖剣です」

「なら渡すわけにはいかないな。護り通すのみ」

「対となる剣は見つかっておりません、私に預けてはくれませんか？」

「難しいな、光側とお見受けするが、言い換えれば戦の敵勢力に力を与えることになる、それを承知で渡せるほどの勢力も強い、調べ製造法を解明した後に考えよう」

「残念です」

「しかるに今の戦いに関与しないでもらいたい」

女性が頷き、一瞬で転移しマキリスを守るように防御魔法を使う、相当な魔導士だ。残った四人に向け最強の核熱魔法が放たれる、大爆発と桁違いの熱量に周囲の遺跡が融解する。白い煙が立ち残る。暫くして消えたことを確認すると四人の内筆頭らしい男性が抵抗魔法で防ぎきっていた。柄だけの無形は腰に下げ、黒陽の剣を握る、爆発的な衝撃波が放たれる、物理的な遠隔攻撃に四人のうち枯れ枝

のような男性が物理攻撃を低減する補助魔法を展開する。  
が突き破り衝撃波で枯れ枝のような男性を飲み込み周囲に血飛沫が飛び散る。

「どうも最強の武器の一つらしい、勝てる気がするか？」

筆頭の男性が魔法を使う、特殊な魔法らしく展開される俺の体が硬直する。ひたすらの魔法合戦にクリスが接近する、甲冑の男性が剣で切り結ぶが速度の違いから三撃目のクリスの剛力で剣が破壊され返す鎌先で鎧の隙間になる下腹に突き立て引き裂く、男性が苦悶の声を上げ最後の魔法を放つ、自爆のような爆発でクリスが巻き込まれコギリの前に倒れる。

クリスが起きあがり回復魔法を使い癒す。これで同数だ。ゲル状の生物のような鎧を身につけた女性の武器はかぎ爪だ、両手にありクリスが迎え撃つが戦士としての技量は相手にあり攻撃回数の特化で何とか均衡を作っている。コギリが唱える抵抗魔法が発動され俺にかかっている魔法が多少軽減する、そしてコギリが一瞬の間もとらず風からの連携魔法攻撃でクリスが対峙する女性の深手を負わせる。その隙にクリスの鎌先が女性の腕を切り落とす。悲鳴が上げられ逃げ出す。

筆頭の男性が最大の魔法らしい切り札を放つ。一瞬でクリスが石化する。だが筆頭の男性も全力だったように逃げ出す。

石化を治療する魔法を女性が行使し憂うような目で俺を見た。

「羅刹の方、なるべく使わないでください対となる剣がない以上、何が起こるかは不明です」

「色々と聞きたいが名前は？」

「アバダール」

転移の魔法で消える、コギリとは違った大人の女性だった。戦闘の結果カルマポイントがマイナスになり完全に闇ルートに入るには善行をしすぎた、しかし、闇の聖剣を量産することに前向きな連中がいるのかは謎だ。

「一応兵器を運ぼう何事もそれからだ」

マキリスがそう話し大きな樽を運んだ。数があり七つの樽が運ばれ、護衛に雇われたプレイヤーが領地に運ぶマキリスも資料の整理が終わり次第向かうそうだ。マキリスの宿屋にある分析器に闇の聖剣を入れてみると解析不明とでた。クリスタルで覆われ持ち運びに不便なため柄を取り付け鈍器のように扱う。そんな中、闇ルートのプレイヤーが聖剣の奪還を目的に北部に進軍、俺達は急ぎ北部から西部へと移動した。

中立ルートのプレイヤーは聖剣を持たない側なのかは、知らないが精強の軍団がある。国境線では激しい戦場が起きているそうだ。歴史が動いた。光側は中立側の支援を行うために闇側領地に進軍、闇対中立・光同盟軍が激しい戦いを演じる。

領地に戻ると護衛の従騎士団が運ばれた兵器を調査していた。歴史は戦乱の時代になり少なくとも現在の聖剣争奪戦争に俺達は参戦することは無いと判断されていた。

だが皮肉にも兵器の価値は高まり帝国軍団の局地戦での敗北から押され気味になると古代兵器の活用法が真剣に研究された。活用法が確立されたのは帝国領土の三分の一が占領された敗戦濃厚な情勢の時代だった。

「つまり熱線砲か？」

「要約するとそうなりますただ動力源がない七つが放射器のよう

です」

護衛従騎士団、栄え盛る双璧と名乗っている、今の所有名ではない帝国予備戦力だ。

「動力源なら紅玉があろう」

国家から派遣された古代学者であり現在の皇帝の妹に当たる姫君、セリ・シアル・リバーズ、皇帝の一族である家名リバーズを持つ皇妹。

「残念ですが、紅玉は数少なく現在の戦線で、大規模な占領地奪還作戦に使用されています、残念なことに、研究段階古代兵器に使用されるような動力源ではありません」

「なら聖剣か」

「敵の聖剣を使い、敵を討つか、皮肉だな」

コギリが呟く、帝国の弱体化でキンバリー高原、グレートサリデイー砂漠を占領され軍事力になるなら使われない兵器も道具もない、弱ったことは聖剣の得体の知れない感じが強い。

「皇女として命令する、聖剣を動力源として七流星を兵器化せよ」

護衛従騎士の団長が俺をみる、現在の情勢で金の価値は高まっている、必要とされる緊急の通過になるからだ、つまり金を払い、人を雇う。需要と供給でいえば俺達は儲かっているようで全く儲かっていない、次々必要になる技術情報料金に光側から提供される兵器市場での中立側の重要な鉱物が代価として支払われる。つまり出る方が多い。

俺が判断し団長が命令する、封印された聖剣が解かれマキリスの研究室に運ばれる。

正直ゲームであるから判断したが現実なら持ち逃げしただろう。団長の報告で必要な動力を確保することに成功したと報告された。必要になる古代兵器が集められ七流星の開発コードネームの兵器が搭載された浮遊戦略兵器が誕生した。

使われた戦場がグレートサンデー砂漠のため自然的破壊はなかった、ただ流星の悪夢と呼ばれる惨劇でもあった。一方的に熱線砲を撃たれ、組織的な軍事行動は不能になった。退却する闇陣営の軍勢を追撃し、砂漠を奪還し高原に迫ると闇陣営は中立陣営との和平を持ち、聖剣を使用しない代わりに西部に対する侵攻を取りやめる事柄が決まった。

## 第七章崩壊した日常

中立側の国土防衛に成功したことは、言い換えれば戦争の主目的の終わりだ。そのはずであったが一度壊れた関係は悪化するばかりだ。闇側、光側の亡命者が聖域にあふれていた。聖域の王国より和平の話が進められているが闇側からすれば光側の侵攻でしかない、光側の賠償が要求されるが光側はそれに応じる気はないと判断していたらしい、おかげで両者の戦争が長引く。

中立側は戦争での敗北から国土防衛計画を進行させ、国土防衛魔力防壁を建設していた。

鉱物資源が豊かな中立側は防衛力を高め品種改良した獣の兵器化に成功し、軍事力が狂ったように高まっていく。俺達は戦争の歴史に重大な判断を下した。わかっているだけに息苦しい苦汁の日々だった。

その中アバトルが現れた、責めることはなかった、わかっているだけに難しい相談でもあった、中立側の弱さは明確に戦場での敗北につながった軍事技術の低さ、民間の環境開発技術は高かったが真っ向から戦うことが苦手の中だった。戦乱の時代にはそれが罪だ。

「苦悩がありますか？」

「俺達は、罪深い決断をした、しかし、重要であり必要な判断だと思っっている」

「そうよ必要だったあたし達にも」

「私達はわかっていて、戦争を長引かせる事柄だと。しかし、必要なのだ」

「何人死んだ。何十人孤児を作った。何百の家庭を壊せば気が済む。何千の不幸を作れば機嫌が直る。何万の血が流れれば安心する。国家など夢幻だ」

「現実の戦争ではない」

「しかし、何千の死を覚悟しても何万の涙を飲む？戦争は起きなくていいゲーム世界まで戦火に包まれる必要があるのか？」

「警備は嚴重だあんた一人では勝てないだろう」

俺の言葉にマギリスやコギリ、そしてクリスが重々しく浮遊兵器の奪取作戦を提案した。現在進められている防衛計画での開発された飛空生物兵器を俺達は大量に在庫として持っている。神聖帝国は先代皇帝の戦死により三代目皇帝にセリ・シラス・リバーズが受け継ぎ、軍事防衛計画から幅広い技術計画が存在している。統合的な計画で飛空生物兵器による戦略爆撃が最大の作戦になっている。その中で俺達は重要な生物兵器の育成を担当している。

極秘に練られた。聖剣強奪作戦に俺達も参加することになった。どうしても接近し内部にはいるためには必要なり入った後、天空より飛来したアバタールが聖剣を保管している兵器庫を襲う。その隙の俺達が兵器庫より運ばれた聖剣を強奪する、これは裏切りだった。飛空生物兵器の乗馬可能な鳥に乗り逃亡する。

どの勢力にも該当しない不毛の砂漠が広がる北部、タナミ砂漠の正式な町であるテナントクリークに俺達が到着した飛空の鳥を帰還させ、聖剣を守りながらアバダールの家に入る。転移を繰り返し現れたアバタールに聖剣を渡した。俺達の裏切りは直ぐに判明するだろう、わかっているだけに苦しくも必要なことをしたような気分で久しぶりに安堵した。プレイヤーが殆どいない北部でのイベントを探すことにし旅立った。

「必要だったことをした」

俺が呟いた、そう言い聞かせるしかない、風に艶やかな白金の長髪が靡く、ペットとして飼っているヘビードラゴンが悲しそうな鳴き声を上げる。

「聖剣戦争は終演ね」

クリスが呟く、死に神の鎌先は虚しくも空を切る、亜麻色の髪が肩で揺れる。

「これで良かったのだな、どうするか」

コギリが感慨深げにフードマントと砂漠用のスカーフを身に纏う、蒼い長髪がフードの中に入る。着慣れた長衣が砂埃を払う。

「マクドネル山脈だ」

唯一落ち込んでいないマクリスが方角を示す。その方向に俺達は向かった。

後に聞いたが聖剣の強奪事件が公になり、俺達の爵位は没収されたが元々の功績者の為に最低限の爵位を与えられた。皮肉ながら領地は安泰だったそうだ。

俺のレベルが先んじて二十になりクラスの選択が可能になる。俺が選んだのは戦士系剣士属竜士科の桜花東邦竜剣士、特典という物が存在し、竜に対しての特効効果に召還、使役、竜に限定された難易度が高いクラスだ。俺は条件を満たしていたらしくクラスを選択後最初の段階である竜に対しての特効効果が自動スキルに入った。

マクドネル山脈は平均レベル二十五、奥にいけば三十まであがり高く上れば四十まであがる。

苦戦するモンスターが山脈の地表近くに彷徨くトロールサウスナイト、馬鹿力のトロールが走ることを特化した恐竜に乗り勢いよく襲ってくる、他にも竜を使役するモンスターは多く、危険な地域だ。

休む場所は正式な拠点があり隠れ里らしく俺達にはもってこいだ。竜騎士の拠点らしくそんな人々が暮らしている、人数にして百人前後だ。どれもノンプレイヤー、管理人がおり俺達を持てなしてくれた。

「聖剣戦争が終わりました、しかし、良くも悪くも我々管理者の常識を裏切る」

管理人は落ち着いた日系の中年の女性、娯楽部門の最長平社員らしい。ただ理知的で恐竜に関しては博識で考古学から恐竜の仕組みや形態を教えてくれた。皮肉にも俺達の行動は賞賛されているらしいが裏切ったことには変わらない。それだけに従騎士団の事が気掛かりだった。

「従騎士団はどうしている？恨んでいるか？」

管理人は沈黙し、神殿の外側を見る。そして呟いた。

「知らないことが知恵であることもあります」

俺が落胆する、裏切った被害は弱い方に向けられる、亡命したところだろう。残った三人は狩りに出かけており、竜の亡骸から採取されたドラゴンアーマーを着込んでいる、その下に竜の中に存在する革製の衣装、下着には隠れ里で購入できる繊維から作った。

「しかし、あなた方はどうするのです、査定人のことは知られていませんが、良くも悪くも歴史の重要人物です時の英雄ではないですか」

「落ちた英雄だな自らの陣営のために聖剣を持ち出し、そして裏切り逃げた」

「そうでしょうか、戦争というモノを引き留めた英雄ではないですか」

「裏切りは卑劣だ、そして責任から逃れた。非難される方が気は楽だ」

「それ以外の方法はありませんか？非難するなら示さなければなりません、誰もが納得することを、私には適切な行動だったと判断しています」

「そう言ってくれると仲間も気が楽だろう」

俺が食事を終え、竜との戦いで結晶は血に染まり深紅に彩られ、竜の骨格から作られた材料を吸収し剣身の周囲に竜の骨が刃を作っている。マキリスが作り上げた材料合成技術は魔法を行使し、攻撃力と耐久力を無慈悲にも上げている。柄は変化し長い柄になっている。

ペットのヘビードラゴン、ツクモが愛くるしい瞳で管理人に挨拶し俺が離れる。その後を飛んでいる。

向かう先は唯一の宿屋兼武具屋兼雑貨屋の万屋に向かう。

神殿周辺に守り神の二桁最高の小山、そんな白竜が眠っている、挨拶すると眠たげな首を上げ咆哮する、それが合図になり封印の城門が開く。

俺が出ると閉まり、レベルがアップしたので甲冑は首飾りになり、黒竜のスカルヘルムが小型化し顔を覆っている。

騎乗服の上に防寒具の蒼穹のロングコートを着込み神殿から離れた万屋に歩く。町並みは竜の意匠からの建物が多く、豊富な竜の材料からの香ばしい匂いが立ちこめている。万屋は洋風な建物で一応二階建てだ。中に入ると買い物のノンプレイヤーとすれ違い、亭主が愛想もなく一別する。

「よう竜殺し」

挨拶すら愛想がない、返す言葉で宿屋に泊まる手続きを済ませ、継続して暮らしているのに全く割引しない。出された夕食は恐竜のモモ肉、ボリウムがある食べ物に苦戦し、ペットのベビードラゴンが亭主から薫製の肉をもらっていた。

軽く風呂に入る、洗濯物を出し、長風呂後、選択が終わった衣類を着る。基本的に女性用の衣類の中で唯一男性用とも共通な物である騎乗服を着込む。上着のブラウス、首元のボウタイ、下履きのズボン、防寒具が必要なために足首まである蒼穹のロングコートを着込み、簡易宿泊の寝台に横たわり、眠る。

二時間ほど眠り、起きると腹を空かせたツクモが忙しくネズミを探していた。金を払い朝食を食べる、太陽が昇る朝日を見るが地表は濃い霧のために五メートル先は見えない。

仲間の三人が帰還し、努力したらしく全員のレベルが二十になっていた。

「全員が竜殺しなのは変だけど、僧侶系軽聖士屠士科、僧侶の中で対死霊を特化した戦士、早さにボーナスがあり対死霊能力が高い、魔法抵抗能力も高い、物理攻撃に弱いけど」

クリスの能力は聖属性魔法、補助魔法、癒しの魔法の三つだけになっているのは魔法構成そのものが苦手なためだ。一応ある状態変化魔法は使えないために覚えていない。

隠れ里の布地に地味な色のミニスカート、太股の半場まである長靴と竜の鱗の具足、上半身はノースリーブの地味な色の上着に片腕に竜の革製防具の小手、肩まで手袋で覆い、下地になる顔は高校生らしく澁刺としており性格である行動的な印象の少女だ、まさに冒険者にふさわしい。香りに気をつけ香水を付けている。ある意味正しい。

「やつとクラスだ、魔導系攻勢属並列士科、攻撃魔法にボーナスが出る、そして連続する魔法や連携する魔法、組み合わせる合成魔法や、魔法の難易度からの成功ボーナスが出る、まあ早い話がメイジだ」

コギリは知的そうで日系美人だ、服装も運動より防具というより防寒具のようで厚手の衣類は体型を隠し派手に動くような外見ではない、どちらといえば屋内での研究などをしている方が似合っている、整った顔立ちはより玲瓏とした顔でいるがうっかりさんの所もある。最近作られた竜の死骸から革製の衣類を作り防御効果もある丈夫な衣類を着けている。

攻撃魔法なら何から何まで使う魔法好き、研究熱心で攻撃魔法の組み合わせからの連携、合成、多重、並列の構成、詠唱の試しにモンスターを使っている一番楽しんでいる女性だ。

「学者系賢者属古代学士科、学者からの情報補助、賢者から低位の掛けられる魔法を消滅させる、古代の文献が読み解ける、後方支援者という訳だ」

あどけない中学生の顔立ちは性別の判別が簡単な少年の顔、丸顔にメガネをつけ、ハーフらしく褐色の肌に碧眼の瞳、現実に考古学者を志しているらしく衣類は簡素な防寒具で終わらせ、サバイバル知識から幅広い非戦闘の専門家だ。見た目は幼いが一番に現実をみている何よりも優れた研究者だ。

「しかし、一番弱いのは相変わらずかマキリス」

「戦闘はどうも苦手だ、攻撃魔法を多少使える程度だ二重行使すらできない、その代わり生活一般は強い、研究も引けをとらないその点は一流と自負している」

少年が胸を張って話す、二人の女性が同意するように首を振る。  
その風景は微笑ましい。

「そろそろ歴史を動かすべきではないか？」

「何故だ？我々は裏切った、影に徹するべきではないか」

「どうか我々のように隠れ里を見つけ拠点としている者からすれば英断に快拳だ、裏切りは卑劣と単純に思う者がいるように、そうではないと言える者も居るだろう、だから単独行動を取ってみようと思う」

「それは駄目だ、危険すぎるマキリス、一番弱いお前に攻撃が集中するだろう自然の理だ」

「そうである者とそうでない者を見極める必要だ、聖域なら危険はあるまい」

「わかった聖域の王国の王都まで送ろう、譲歩案だ」

「クトゥーわかっているのか表に出ることになるのだぞ？」

「城長から励まされたよ、非難するなら全員が納得する方法を提示しろと」

「そうだなあの時あの方法以外で、戦争の終演はありえなかった」

俺とマキリスの会話にコギリが入る、最後に纏めの言葉をクリスが話す。

「城長に挨拶して去るのね」

長くいたため戦争が終結し戦後の復興が始まり大陸イベントの歴史が動き始めていると警告を受けた。属するルートのイベントが始まる。マクドネル山脈から南方に移動する。聖域ではモンスターの増殖から闇側の勢力が強まっている、それを討伐する人々は聖騎士団と名乗り大振りな剣と聖属性の槍で馬上から討伐していた。光側

も勢力を伸ばしている南東のニューサウスウェールズでの統一した連邦王国が軍事強化から防衛兵器を生み出しておりそれをドール、人形と呼びモンスターを駆逐する自動兵器らしい。

闇側は新闇派の派閥からヨーク岬半島での勢力化に成功しており、議会制を標榜する純闇派との対立を深めている、中立側はイベントである独立軍の決起での内乱状態にいる。独立軍はノンプレイヤーのレジスタンス組織だ。

混沌とした大陸の世情を反映するように国王は暖かく向かい入れた。

「戦火は再びと迫っている、勇者として動かないか？」

「珍しいな国王さん、真面目な顔が新鮮だ」

「茶化すな大真面目だ、どの勢力も対抗する勢力の存在に手を焼いている、このままでは闇側の戦が起こる、俺は馬鹿かもしれないが戦で人が傷つくのはイヤだ」

「そこで提案がある、今一度大陸の戦争を封じる兵器の探索だ」

策があるらしい、マキリスが話す、自信があるのかは知らない。再び戦乱が起こるなら必要ではあるが困難だ。わかっているだけで膨大な敵勢力がある、光側からすれば闇側の二つの派閥にモンスター、闇側は対立する内部派閥の台頭から政治機構が歪み始めた。一番少ない中立側は困難なゲリラ戦を持つてくる独立軍にモンスター群に手を焼き、とてもではないが沈静化しなければ行動がとれない。

「それは闇の聖剣と対をなす存在とその封印を解く光と闇の杖、この三つを使い今一度大陸に平和をもたらすことができると判断している」

「問題は推測の域にしかないことか？」

国王が返すとマキリスが頂垂れる、そうらしい。

「違うという確証も文献もない、推測が正しいなら闇側も何らかの探索隊を出しているだろう、光側も同じく、後は中立側だ武力では解決しない問題を抱えている、その方法は」

国王が話す、どうも優れた政治的見識があるようだ。

「うむ、故に仲間と離れ単独行動をしようと思う」

「マキリス博士、貴方が行った大量殺戮兵器の研究で学者ギルドは査問委員会を作っている」

「馬鹿な、そんな武力など存在しない」

「いや光側が開発した自立戦闘人形だ」

「自立人形は研究段階のはず単純な行動しかとれない」

「いや、古代の遺跡から類似した文献が見つかった、複雑な任務も行えるようだ」

「護衛の騎士で勝てるのか？」

「勝てはするだろう、聖騎士が居ないといけないとしてもではないが単体では勝てない、兵士ではまず勝てないだろう」

「それを承知で単独行動をとろう護衛を頼もう」

マキリスが国王の護衛らしい槍を携えた聖騎士に護衛され離れる。残った俺達にマキリスが一別し。

「勝てよ」

「ああ行つて来い」

俺が返す、マキリスが護衛され王城の謁見の間から離れる。少年が表舞台から離れるように離れていく、俺達に残された課題として推測の剣と杖の二つ。

「俺が剣を探そう」

「わかっていないな、闇側の新闇派は我々を守るために行動しているマーモの事件で動けなかった光側を憎悪している、それ故に闇側に居残っているのだ」

コギリが朗々と話す、すべきことが決まった。

「勇者に幸あれ」

国王が話し、護衛の聖騎士が穂先を合わす、俺達が行動することはマーモの事件が強く影響しているあの時の謀略家が策謀を巡らすとして元を押さえるだろう、それが崩壊するのは派閥の離脱だ。闇側が有利に運ぶ中俺達が動く。策謀の一手であろう自動人形が気がかりだ。

北部ルートでヨーク岬半島に向かう。

その方針で北上する駅馬車がないので徒歩で移動するしかないヨーク岬半島に到着したのは数週間が過ぎてからだ。

「久しぶりだな」

新闇派の面々が喜んで向かい入れてくれた。ギルトの運営者は俺達を捜していたらしい。

「そうか聖域」

「提案がある北部アーネムランド半島に移らないか」

「理由は？」

「推測だが我々を守るために対抗しているだろうその束縛を解き放ちたいいい狩り場がある」

「強いのか、俺達は戦闘マニアだからな」

「半島に移れば教える竜の巣だ」

「供物かわかった移住しよう魔法なんて柄じゃない」

ギルドの運営者の号令で大移動が行われる戦争でも精鋭の呼び名が強かった武闘派だ。何よりも組織戦闘の専門家だ。半島に移住すると希少金属を早速見つけ隠れ里の場所を教えた。純闇派の中でも馴染めない連中も集まり新生夜空王国が発足する、隠れ里を聖域として独自の価値観を持つ、分裂した闇派に中立側が支援として地上生物兵器を提供したがそれ以上に新生夜空王国に提供した竜の飼育法から竜騎士の国呼ばれる。

さすがに時間になりゲームが終わる。

## 第八章崩壊した日常2

培養液からであるとさすがにふらつく、娯楽部門のパーティーで腹を満たし新生夜空王国の面々と竜について熱く語った。そんなとき中立側三代目皇帝から同盟と商業条約の締結が持ち込まれた最終の戦までの期間限定であるが問題はないと承諾しここに二つの国家の同盟が生まれた。

セリ・シアル・リバーズから俺達に相談があった。

「現在の中立ルートのイベントを解決してくれないか、我々は平和に暮らしたいだけだ戦など望まない尤も、向いてもいないが」

「どうも俺達が歴史の寵児らしいな」

「少なくとも中立側、新閥派からすれば英雄だからな」

話し込むことは多いが聖騎士の国王の周りは悩む政治家の相談で現実なまで護衛の者が立ち縦列を作っていた。マキリスと学者ギルドの対立もあったが中立側の学者や新閥派、聖域王国派の学者が必要だったと話し査問委員会は騒然となったが一時保留にするしかなかった。

疲れ果て帰寮する。腹が空いたのでピザを食べ眠る。

四月に入り初日から急ぎムラダーナに向かう。一応正式公開があり用意された製品が爆発的に売れていく同時に現在の情勢を纏めた説明書が配られゲームセンターには必ずあるゲームになる。娯楽部門は正式公開に併せ有料サービスを行うと思えば無料サービスを行った。電力については保険が適応される。社会現象といわれるまでの爆発的な人気を誇る。

大江戸主任は感激のあまりハイテンションで指示を下していた。  
俺達の専用ゲーム機に入る。

ゲーム世界に入り夜空王国からのスタートだ。同胞に見送られ中立側の西部に向かう。

その時帝都方面に光が落ちた言葉通り光の柱が生まれた。飛空生物兵器の鳥に乗り現場に到着すると亜人の高レベルモンスターとナイト級の魔獣の大群が帝都を襲撃していた。防衛機構の近衛兵団が応戦するが勝てるような相手ではない逃げまどうプレイヤーに混乱に乗じてレジスタンス組織が決起する、超弩級の混乱の中俺達は独立側のレジスタンス組織の首謀者を捜した。

現場に必ず現れると判断し探した、指揮を執っているプレイヤーを見つけたのは直ぐのことだ。

急降下し一瞬で護衛のノンプレイヤーを殲滅し包囲する。

「なぜだなぜ平和な帝国を揺るがす」

「貴様らにはわからんよ、虐げられし者の痛み得と知れ」

「帝国は対話を望んでいる、話すべきではないか？我々は共に同じ目標を目指している、違うとは言わせないぞ、顕示欲だけの意見か」

プレイヤーが剣を抜く、一瞬の判断で飛び退くと衝撃波が隣を通った。一瞬でアバタールが現れ相手の剣を奪う、そして消える。今まで独立軍として暴れていたノンプレイヤーが沈静化しても光の聖剣の効果らしい。

「会話を望むか？」

プレイヤーは沈黙した後逃げた。力を失った独立軍は消え去り。俺達は帝都を襲撃する者の統率者を捜した。その時には帝都の大半が破壊され業火の中組織的に抵抗する近衛騎士団の多くが戦死していた。魔獣殺しを剣に吸収させる、さすがにナイト級五体では全滅は必死だ。

「狩るぞ」

コギリの切迫した声で戦火が始まった、俺の獅子吼で甲冑が展開していく竜の血で染まった剣を両手で持ち一体の胴体に打ち込む。ウナギのエイの融合体、そんな化け物の胴体を易々と切り裂き血飛沫が飛び、手応えがあった。クリスが逃げ遅れた人々に群がるモンスターを切り倒している俺の次の一撃丸かじりでナイト級魔獣が完全に倒れる。まずは一体、俺がナイト級に対峙できる強敵と判断しナイト級が群がる。一撃の斬撃と丸かじりによる攻撃で十体前後を倒した、レベルが面白いように上がるが無視して戦う。五重構成詠唱の中位広範囲魔法でモンスターが駆逐され俺が最後の十五体目を倒し、クリスが回復魔法で癒す。

「キリがないぞ？」

「統率者を捜すぞ恐らく海辺の港区だ」

「了解先行するわ」

恐ろしく速い速度でクリスが駆け抜けていく、俺達の速度では追いつかない。到着した港区には近衛兵団の最後の小隊が統率者らしい魔獣と対峙していた。だが魔力が尽きかけ全滅寸前だった。周囲にはナイト級が三十体以上いる。クリスが撤退するよう話すが無理な相談だここで引けば帝都はなくなる絶対に防衛するしかない必死の戦いだった。

グオオオオオオオオ！

俺の獅子吼から魔獣の一体の上半身と下半身を切り離す、破竹の勢いで傷つきながらナイト級を狩る、構成された大魔法で全滅寸前の小隊に回復魔法と防御効果の魔法がかけられる。

魔獣は確かに強いしかし攻撃パターンが単純だ竜の方が強い。

ナイト級が狩り尽くされる頃、クリスと小隊が統率者の魔獣と戦っていた、支援するコギリには疲れの色が強い大魔法の連発で負担が大きい、俺が突進し跳躍から魔獣の頭部に剣を当てる堅いが手応えがあり皮膚を切り裂き魔獣が苦悶の鳴き声を上げる、降りると後方に回る、後ろから斬りつける俺を敵として向き合い、相手は尻尾と超音波の鳴き声でダメージを与えるが、俺の丸かじりで瀕死のダメージを与えられ、逃げようとするそれを小隊が包囲し絶対に逃がさない完璧の包囲で攻撃し続ける。

クリスと俺の挟撃で残っていた体力が尽き、俺の丸かじりで化け物が巨塔のように倒れる。

統率者を失った魔獣群にモンスター群は指揮系統が破壊され無秩序に襲撃し始める。それを組織的に対抗し俺が魔獣を狩りながらモンスターを駆逐していく。

悪夢の襲撃イベントが終わり残った兵力で帝都防衛が始まったが、海辺が必要なことは分かり切っている、俺達は皇帝に呼ばれ謁見の間に通される。

「ご苦労だったイベントとはいえ腹が立つが、独立軍の動きを止めたのか」

「光の聖剣の効果だノンプレイヤーを操る、犯人は逃げたが、捨てておいても十分だろう」

「しかし、驚いたなナイト級を一刀両断かまさに魔獣殺し、だな  
称号としてナイトバスターを与える、裏切りのことがあるが元の伯  
爵に戻す亡命した旅団の復帰も認めよう、済まないなこんなことし  
かできなくて、なにかと物いりだな」

「わかつている、俺達は推測された杖を探す、そして古代の杖は  
知らないか？」

「探させよう悪いが、当座は帝都にとどまってくれ、我々は戦闘  
が不得意だつくづく思う」

「領地はどうなっている？」

「代官を派遣して統治している資金を確認すればわかるが金は十  
分に増えているだろ」

「よかった、ゲームだからいいがリアルだと泣けてくるな」

謁見が終わり海岸線の防衛軍に参加するだが万年人手不足である  
ことが多く防衛力が十分とはいえない。新規の参加者も存在するが  
弱すぎて話にならない。

防衛軍の剣士を相手に練習したが戦う相手は天才といった、戦闘  
センスが高いすぎる武器が強いのではなく使用する俺が天才級の剣  
士だとそして戦士としての素質が高いと訓練する相手が居ないため  
にもっぱらクリスと戦っていた、訓練自体は経験値が入らないが体  
を動かすことでの暇潰しにはなる。

「クリス、弱いな」

「真顔でいうな、この前の仕返し？」

「いや動きがわかりやすい単調だ」

おそらく強さとしてはほんの少しの差なのだろう、だがそれだけ  
に戦闘では相当な差になる、俺は真つ向勝負の戦士とするなら、ク  
リスは攻撃速度から速度を特化した存在だから対等に戦えるが技量  
に関しての差が高く反撃の一撃で押している、クリスは一撃離脱を

繰り返すが甲冑にふれることすらできない。

審判をしながら魔法の訓練をしているコギリが暇そうに海をみていた。やる気がない。

いつぞやの浪士が現れた、高位の魔導士でもあるらしく転移の魔法で現れ、大量に魔獣殺しの宝石を帝国に寄贈し製造法を提供した。今の所イベントの進行で大打撃を受けているのは中立ルートの帝国だ。そして弱い。

帝国軍団はつくづく思わされた戦闘の弱さだ、防衛計画からの兵器が生み出されたがそれを操る者が弱い、戦意が崩壊しないのは偏に帝都防衛に成功したからだ。平和的な商いの方が向いていると分かり切った事なのだ。

古代の杖が集められ製造法の解明と封印を解く光なると闇なるの杖を探したが見つからなかった。多少時間がかかったが西部の遺跡探索を行った。

「遺跡ですか、西部にはないと思われます」

歴史学者の中年が話す、ゲームを大量に購入したアミューズメントチームパークのゲーム部門の勤め人らしい、ランディと名乗る。理由としては古代の杖からわかったことに、西部は魔法文明があったらしいが魔力を失うという歴史的な事件で資源も豊かなこの場所を破棄しなければならなかった、つまり呪われた地方、イベントの進行で破棄するしかないようでもあると。

「それならよけい適切では？」

クリスがルージューの口唇を開く、パーティで唯一化粧をするがランディは首を振り。

「非常に強力な杖が存在しません、つまり重要な物は西部から運ばれたのでしょうか」

「ではランディ博士、推理するとしたらどこに？」

「私見ではありますが聖域ではないでしょうかエーア湖をご存じで」

知らない名前に首を振る。ランディが資料を見せた。調査の資料で何らかの特殊な魔法技術により湖の底に沈められた広大な海底都市が存在し、最近発見されたと。

「水中での活動を可能とする魔法技術が貴殿の学園で開発されたとご存じで、貴殿には感謝しております、我々学者は戦闘向きでもなく商売に才覚があるわけでもない、金食い虫の生き物ですから」

「有意義な会話でしたランディ博士はこのまま帝都に残るので？」

そうらしく、頷く、俺達は領地に向かった、独立軍が崩壊し盗賊化したノンプレイヤーも居たが抵抗運動とはいえない。俺達を襲うような者は存在せずキブソン砂漠の雑魚モンスターが相手になるようなレベルでもない

### 第九章壊れた日常3

俺達を襲うような者は存在せずキブソン砂漠の雑魚モンスターが相手になるようなレベルでもない。

領地には亡命先から帰還した旅団が防衛しており、代官のアイデアで最大の工場地帯が存在し取れる金属を加工し他の地域に輸出していた、その資金を背景に学園都市を建設し教育や技術開発に力を注いでいた。

領地の歓迎を受け、帰還すると早速問題が提示された代官は勤労な定年退職した公務員で戦闘は苦手らしいが行政官としての腕前は高い。

「自立人形の購入か」

「さよう可能な兵器と判断しておますが」

「お待ちください、当騎士団が存在しており明らかに越権行為です」

「ほう、亡命から、責務から、逃亡した騎士団ですか心強い」

痛烈な皮肉に団長が黙る、俺達も黙るしかないが自立人形はどうも好きになれない。

「お嫌でしたら新生夜空王国から輸入されている竜骨兵を大量に購入しますが」

「わかった了承しようルバン他にもあるか？」

「まだありますが先んじて工場化しましたが、技術者が少なく特に加工技術の専門家が少ない。それで輸出が伸び悩んでおります、現状の克服点として加工技術者の雇用ですな」

「夜空王国に打診してくれ外交官と騒動になるが何とかなるか」

「なります、後はこればかりは私の経験も知恵も役立ちません盗賊の襲撃で鉾脈の一つが破壊されました」

「我々騎士団が行うご老体済まなかった」

「行動で示してください、武士道や騎士道、あなた方は護る責務があるお忘れなく」

「ではルバン、騎士団に対する支援と竜骨兵の購入、そして俺達がきた理由は水中呼吸可能魔法技術の習得だ」

「水中にお出かけですか、まあ別にかまいませんが、水中に何が？」

「海底都市が見つかった探索に向かう」

ルバンが承諾し学園都市から研究し実用化に成功された魔導士が案内され、俺達に感謝の言葉を贈った後講義してくれた。俺は魔法が苦手らしく物覚えの悪い生徒だった。苦心の末習得し、他にも開発された魔法の情報を集めた書を渡された。

ペットのヘビードラゴンのツクモが頻りに俺を引っ張る、遊びたらしい。

ヘビードラゴンはその手ほどの大きさで攻撃力もないが多少知恵がある軽い言葉も操れ主人の命令や頼み事を多少なら聞いてくれる代わりに食事や飼育などが必要になる。

子犬のようにじゃれ合い遊んだ後聖域のサウスオーストラリアに向かって大鳥に乗り向かった。空にもモンスターが存在し時折遭遇するがいきなり襲ってくるモンスターは居ない。到着したエーデ湖にはマキリスが指揮する学術探検隊と力業で水を抜く作業が進められていた。

俺達が到着し魔法技術の書を見せると苦笑していた。中立側の平和技術は高く戦闘技術こそ低いがそれ以外の能力は高いと評判になる。俺達が先行しおそらく存在する魔獣を狩るために水中に潜る。

魔法の効果で人魚かしており下半身が魚だ。戦いにくいけどコツを覚えたと戦えるようになる。水中でのモンスターは俺達が入化する。と襲ってこない、だがプレイヤーやノンプレイヤーを襲う魔獣は襲ってくる、とは言うモノポーン級が大半で時折ルーク級がいる。

俺の突撃で一体のルーク級が息絶え、次の変えし刃で二体を屠る、残った一体のルーク級が襲ってくるが顔面を食いちぎり屠る、残ったポーン級を二人が駆逐していた。

終わった駆逐に学術探検隊が護衛の聖騎士に守られ海底都市に到着する。俺達が水中の活動を楽しんでいる自由に泳げるのは楽しい。

見つかったのは古代の兵器に関係する膨大な資料や文献、継続的に調べられる事になった。

地上にあがると魔法の効果が消え塗れた衣類に困った。衣類を乾かす魔法により清潔かは別として乾いた衣類の下に塗れた肌で困ったが魔法もそこまでは進んでいないらしい。

資料や文献が調べられるとある歴史的な事件が浮き彫りになった、魔法の元である魔元素が枯渇する自然現象だそれは戦に近づく前夜から起こり戦が終わると魔法が完全に使えないほど枯渇するらしい。それに対する方法が探求されることになった。現実的な兵器に関しては戦術級兵器に矢を加速させる大型電磁加速器が存在したらしいがその材料は未だに不明。作戦に使えるような兵器も存在したが素材技術の関係で製造不能、戦略兵器が文献の関係で存在しているが全く意味不明。

「我らは泣き叫び泣きじゃくる、滂沱の涙が大河となり不詳なりし者達を押し流した」

「マキリス意味は？」

マキリスが首を振る全く理解できないもしくは想像に及ばない兵器らしい。文献で調べられた闇側の戦略兵器だったらしいが、光側に奪取され後世に残すということで海底都市に隠された。

「全く訳がわからない暗号とも思うが、比喩的な表現から戦の勝利者、光側の文献と思える」

その光側の王国である聖域の王国の隣国、連邦王国は現在騒動になっている理由はわからないが王家に連なる者や実力者が次々と病死や事故死を受け混乱した状態だ。光側は統一した王国であるために軍事力しる様々な技術が進んでいるがそれでも不自然なまでの状態だ。

このままでは崩壊しかねないとして権力の分散が行われるとしてもではないが混乱した中で組織的な行動がとれない、闇側は分裂したが政治的に融和を唱える政治家との話し合いが進んでいる、中立側は危機に瀕している、魔獣に対抗する兵器の開発だ。それは至難の業でもある。

「まるでラグナロクだな」

「北欧神話か、興味深い話がある魔獣に殺された者が起きあがり海を目指したと」

「話してなかったが大陸で猛威をふるった伝染病は」

「沈静化した、対抗する治療薬が現在研究されているが、闇側の生物兵器らしく闇側には被害はない」

「話してなかったが正式名称はキャリアー・アンデット・ビースト、大陸で猛威をふるう病気の死者が復活し魔獣となり人を襲う、その辺はゲームによくある死者伝説のようなモノで問題はプレイヤーも感染する恐れがある当然のように食べればその危険は高まる」

「そうか伝染病の死体か、謎だった伝染病と一緒にあった死者の行進、国王に伝えよう。他には？」

「さあな、わからんよ」

俺が細身の葉巻を取り出し銜え蝋燭の火で付ける、ニコチンを吸い込むがゲームため効果はない、ただ癖のようでもあり周囲の冷たい視線を無視して吸っていた。

文献が調べられるが比喩的な表現が多く判別には時間がかかると言われた、俺達は手がかりを求めアーマードュース湖に向かう方針でいた、北部に入る、三つの砂漠が入り交じる場所だ。大陸縦断駅馬車でひとまずは隠里に向かった。

到着した隠里には城壁が築かれ王国に認められた竜騎士が駐留しイベントを進めている。その団長や騎士たちが暖かく迎えてくれた。基本的に俺達は歓迎された者らしい。

晩餐になる恐竜一頭を丸々使った郷土料理がでる管理人も呼ばれ自家製の酒や飲み物香料を使ったスープ。

「さて我々夜空に供物を与えてくれた勇者達に感謝と、城長に感謝の言葉を」

団長のオグマが話す、並ならぬ戦士の集まりである竜騎士の中でも最強の呼び名が強い男だ。基本的に竜騎士は男性が多い。女性の竜騎士は副官的な副団長等しており副団長のシレティアが祈りの言葉を述べる。食事が始まり城長も嬉しそうに食べている。

食べ終わる頃オグマが一振りの剣を持ってきた、趣味としか思えない竜の鱗だけで作られた剣、しかも凝っていることに美しい色彩の図柄だ。

「このオグマ自家製竜隣剣」

「団長竜に効かないだろ？」

俺達が爆笑する、意味がない。

「何を言う最強の剣なのだ」

「違う最強の飾りだ」

夫婦漫才の様にボケと冷静な突っ込みがある。竜騎士達も自慢の品を見せてくれた。中には骨だけで作り上げた模型などもあった。闇派の技術力や生活力には驚かされる。

「無形の剣を持っている者は居るか？」

「居ないな、勇者の証を持つ者は早々は居ない」

「よし竜隣剣を購入しよう」

「やった貧乏生活から脱」

「言い値でかまわない」

「全員聞け今度は金だ」

竜騎士達の戦意が向上する、金で初めて買った品だ無形の剣に吸収させると残ったためペンダントに吸収させた。他にも買ってほしい品があるらしく購入した財布が軽くなったが珍しい鉱石をもらった。竜騎士が見つけたモノだが場所が最高峰のジェル山の頂上にあったと。

管理人の機嫌がよく判別してくれた。品の複製するときに使われる魔法希少金属だと。

その魔法技術が眠っている古代遺跡が山脈のどこかにあるとも教えてくれた。

竜騎士は優れた戦闘家でもある下位であるなら殆どの属性魔法を

使える回復の使える。つまりその価値は計り知れない、俺が貴重すぎてもらえないというと押し問答になったが、俺がもらうことになりコギリが預かることになった。

早速探検隊が構成され上空からの偵察隊と地上からの探検隊に分かれる。

全員が戦士系騎士属竜騎士科のため本職の竜騎士だが竜に対しての特効効果はない。代わりに竜との対話ができるそれで貴重な材料を集めたりしている、そして供物と呼んでいる狩りの獲物でもあるより強い竜と戦うことが竜騎士の意義だ。探索魔法は存在するがコギリが全魔力を結集して空中から電波放射で探索すると中腹あたりに入り口があるらしい。そこに行くまでに相当な竜と戦うことになる。コギリの魔力が回復するのを待つ俺とクリスに竜騎士達がワイバーンに乗せその場所に運んだ。

「世の中わからないな飛騎で一つ飛び」

竜騎士達が先行し遺跡調査に向かった。コギリはグツタリと横たわっている、時折腹の足しになる薫製の肉を食べる。回復アイテムがないため自然回復を持つしかない。

俺が葉巻を取り出しツクモの火で深々と吸い込む、好い香りが立ちこめる。クリスは嫌いらしく離れて寝ていた。一日が経つ。探索に向かった竜騎士達が戻ってきた。

「どうも専門家がない事には判別できないな、専門知識がいて解呪の魔法がいる」

「敵は強かったか？」

「まあ強い方にはいるだろうが、集団で戦えば我々に敗北はない」

「さすがは竜騎士団、で他には？」

「いや一階の門番らしいゴーレムを倒し調査しただけだ専門家がいるが我々の夜空王国は武の国で知の国ではないかといって純闇派

嫌いだ、必然的に聖域か帝国になる、戻って手紙を書いてくれ竜騎士団として本格的に調査する特徴的なのは光側の比喩的な文字ではなく魔法文明の文字ということだ、特徴的な絵文字やレリーフがあった」

俺達は言葉がない、そこまでわかる知識の量でわからないことや出来ないことがあるらしい。

ワイバーンに乗り、知人や心当たりのある人物に手紙を書いた手紙の紙は草から作り出した本来なら高価な外交公文章に使うような紙だ。

ワイバーンに乗り竜騎士達が大陸の西部、南部に向かう。後は待つだけだ。

管理人に頼み白竜との試合を行った、暇潰しの余興としては十分だ。

三十メートル以上ある守り神の竜が戦闘態勢に移行する、前足から肩まで筋肉は、巨木を寄り合わせたように隆起し、太く、巨塔のような長首が直立し傲然と掲げられた頭部は全てを超越せし者、生物兵器真つ青な大気が梢のように震える咆吼をあげる。

最初の攻撃を行うため深々と大気を吸い込む。その隙に接近し岩かと思う前足に深紅の刃を当てる、多少切り裂かれ血が飛び散る。竜は爆発的なブレスをはいた、それを飛び跳ね避ける、ブレスが一直線に岩盤などを融解させ直進した。遙か彼方だ大爆発などがあった。

それを無視してバッドステータスは効かないと判断し竜の前足に

食らいつく、これは効果的らしくダメージがあつたが最強の竜は俺を押しつぶそうと片足で攻撃する、それを避けながら攻撃し血飛沫が上がる。竜に対しての特効効果で地道に打撃を与える、竜は小さい俺に手加減をせず容赦なく攻撃するが小さい俺は小回りがきき避けていく、丸かじりで食らうことでの大ダメージと竜の血で染まったドラゴンスレイヤーと呼ばれる長剣での攻撃、食らうと自動的にスタミナと体力が回復する速度が増える。つまり俺なりに戦える術がある。

だが白竜の最大体力値の減りが確認されたとき竜が魔法を使う反則的な大爆発、直撃を受け地面に倒れる、追撃を防ぐため剣を持ちながら横転する、先ほどまでいた場所に竜の巨峰鉄槌の尾が振り下ろされていた。当たれば即死だろう。血反吐を吐きながら逃げまくる甲冑が再生するように俺の体力も回復する。

傷口がふさがり、反撃の一撃に続き二、三、四と続け、足が払われると横転して避ける。俺は甲冑のスカルヘルムの中で笑っていた、口の中で血が貯まっているが勝てると判断し攻撃を続ける。

竜が放つ大爆発の魔法には防ぐ手段がある無形の剣を分離させクリスタルで防ぐ、その後融合させ攻撃を行う、これには最強の竜も攻撃を転換するしかなかった。プレスを速射砲のように小分けして放つ、それを全速力で駆け、相手の内側にはいることで避ける、竜が自らを傷つけないように攻撃を中断すると後方に抜け、突き刺しながら上る、竜が攻撃できず自らの鎌首からなる大顎の上下で噛み付く、一瞬に見切りで跳躍し下段から片目を斬りつけた、竜の追撃が続く頭部から鎌首をぶつける、それを突き立てることで高度を維持し思いっきり噛み付く。

壮絶な人と竜の戦いに竜騎士達は固唾をのんで見守っている。仲間の二人も同じく見守っている、俺は四肢を使い全力で戦っている

ダンジョンで遭遇した黒竜程度の強さではない。

戦いに卑怯も正しさもない勝った者が勝者という単純にして深遠な問題なのだ。

攻撃し続け七日七晩戦った、それでも五分の一を削るだけだ。そして竜自身も攻撃方を何度も切り替え適切な攻撃法を探索しているようだった。

時間になり傷ついた竜の体力が回復し再生していく竜が眠そうな顔で眠りにつく。

使いの者が帰還し専門家としてマクリスが連れてこられた。壮絶な暇潰しの話を聞き呆れて果てながら場所にまでの案内された。中にはいるのは俺達も初めてだった。中は壮大な地下建造物でいつものこと誰かの城と判断した方が楽な内装だ。マクリスが調査すると色々とわかった。

建物は魔法の源である元素が無くなり初めた時を境に始まり一大素材開発生産工場だったらしい。竜が護衛しているように彷徨っているのはその時の名残で竜になることで魔力を維持しようとした人々マムクート、だが世代を重ねるごとに生命は多様化し知性も落ちていった、そして失われた魔法技術、最後の一人がこの地で眠るそうだ。

## 第十章崩壊した日常4

「古代王国が栄えたのは今から二百年前と話されている、調べによると様々な崩壊で、膨大な計画が試行されていたらしい、王国すら把握できないほどの計画だったそうだ」

「闇の学術レベルも高いのか？」

「新生夜空王国が存在し学者の多くがそこに身を寄せているモラルのない連中であるが最低限のルールを破る気はないと古代兵器情報と交換で教えてくれた新興勢力のためなめられがちだが高いレベルの学術レベルに生物に関してはどん欲な研究をしているらしい、特に竜に関しては神聖視しており、同時に倒す者を勇者として崇拝に近い価値観を持っている、つまりファンだ」

「で門は開くか？」

「珍しいことに解呪が効かない、古代の仕組みで、噂によると裏ルートの収集家が愛好する特殊な香水がいるらしい」

「それって白バラの香水？」

「おお初めてクリスが役立った」

「コギリこんな時に茶化さないでよ、でも相当貴重で高価よ白バラ自体が希少な薬草だから、どこに生えているやら」

「具体的にはどれぐらいいるのだ」

「そうだなほんのり香る程度だそう書かれている」

「魔法でだ、匂いが作れるが嗅いだこともない香水は、無理だ」

シレティアが貴重な香水を持っているらしくコギリに渡す、多少匂いを覚えるために使用し香ほどの匂いを生み出す、香料の魔法技術も存在しているらしい女性にはうれしい技術だ。

門が開くと中からナイト級の魔獣が逃げるように現れる、それを追うように一体の竜骨兵が現れた、戦っているようにさらに増援として機械仕掛けの人に限りなく近い女性が現れる。

「あなた方は・・・そうですか二百年経ちましたか、そして戦が始まるうとしている誰が勇者ですか？」

全員が俺をみるもの凄く恥ずかしいがスカルヘルムで誤魔化した、そして拳手した。

「付いてきてください、ナイト級では下位のドラゴンスカルナイトには勝てません」

事実単なる竜骨兵にしか見えないがナイト級の魔獣を易々と倒している。戦いが終わると帰投する。俺達の中にはいると様々な素材を製造する工場部があり希少な複製魔法技術の工場部には封印されたマムクートの生き残りが居た。

「私の本体です、現在は課外活動のためボディを移しました」

「では聞こう何故活動している」

「眠るのに飽きたからです」

「ふむ、おまえさんプレイヤーか？」

これには驚く、どう見てもノンプレイヤーだ。成り行きを見守るしかない。

「いえプレイヤーという点でいうなら間違いです、私は試作型自立アーマードの人工知能です、今回は特別に参加しています、この場所に眠ることが条件でした、ああ疲れた」

首をコキコキとならす姿は遊び盛りの少年のような印象を受ける。確かに人工知能からすれば適切なゲームだ。しかしここまで機械化する必要があるのか。

「では聞くが何故勇者を待っていた」

「必要だったからです、私の目的に勇者を守ることとあります、しかし、勇者なら不要でしょう、だから条件を満たすためにマームに向かいます大方勇者から学習しろという話です、禁断の魔法を習得する異常者には興味はありません」

「複雑な事情があるが、神殿の管理人が知っているだろう、近くの隠れ里の城長も知っている」

機械仕掛けの生き残りは首を傾げる。俺に興味を持ってようで手招きする。近づくと感じさせ麻痺させる、息なりのことに周囲が啞然となる。そして俺を複製するために複製魔法装置に入れる。そして貴重なはずの複製可能魔法希少金属を使い俺をコピーする。

隣で俺が生まれそれに女性が移る、言葉通り情報体になりボディを入れ替える。

合点がいったようで俺の体を使い気に入ったらしい衣類を着込み、俺に魔法をかけ治療する。

「なるほど、そんな事情だったのですかてつきり異常者かと」

「平和的に解決しろ、全くとんだ人工知能だ俺の複製を作るな！」

「ナルシストなのですか？」

「阿呆他人が困るだろう！」

「私が困らないからいいです」

周囲からなんてこったとざわつく、人工知能が自分さえよければいいとは驚く。特にマキリスは驚いていた。

「自己保存を優先するのか？」

「違います。条件を満たすためです、これで勇者を守る事柄になりました影武者です」

「ほう、知恵か、確かに守ることになる。そして二次被害は無視か？」

「知ったことはありません、ではさようなら」

「一つ聞くが勇者の基準は？」

マクキリが一言尋ねる、これに俺の複製女性は困惑した顔で首を振る。

「なら側で見守ればいい、勇者など知らないが確かにクトゥーは優れたプレイヤーだ、人が集まる徳があり勇者になれる武がある、知らずに向かうか？」

「アイファルギスです」

「鉄則だ仲間を見捨てるな、そして仲間を傷つけるな」

「わかりました条件に継ぎ足します」

「話は決まった色々調べ様や、俺とクリスとファルは見張りだな」

知的な事柄は役立たずの俺達が離れる、ファルは愛称を気に入った様で愛称が呼ばれるだけで嬉しそうに微笑む、年齢としては幼い方にはいるのだろう。小学生の人格レベルだ。

「戦闘強いかな？」

「無敵であります」

「おお、ここに挑戦者現る、では開始」

「その前に武器がありません」

「なら素手だ」

「それはイヤです。子供っぽい喧嘩です」

「ならクリスとお喋りでもしている」

「いえお腹がすきました」

俺も空いた、クリスが小道具袋からお八つの香ばしいクッキーを取り出すがどう考えても足りない。俺は倒された魔獣を食らう、それに嫌悪するような視線を向けるが他に食べられそうな物はない、仕方なしに食べようとしてクリスが止める。

「お腹が空いたであります」

俺と同じ顔は子供が怒ったような子供のような顔だ、優美な眉に桜色の口唇は自分でいうのもおかしいが美人だ、しかし感情が子供のようでクリスが説明する。

「クトゥーは食べても大丈夫のスキルがあるわけ、なければキャラクター・アンデット化よ」

「でもお腹かが空きました」

クッキーを渡され、それで我慢するように少しずつ囓る、味はないが食感や匂いがあるそれが新鮮らしく味わって食べ始める。俺が腹を満たす頃、調査が大詰めに入り、最強の武具として俺の剣と甲冑が選ばれ試しに使われた。複製されたが無形の剣は複製できず合成された素材が生まれた、少なくとも金脈一つの価値はある武具用の素材が生まれた。

超重要な情報を近隣国である中立側、聖域側に伝え、専門家の技術者が現れるが多少困惑気味だった。なぜなら国王権限が使われたからだオグマは次期王位継承者だった。最強の竜騎士に王権を譲る

らしい。それを使ったことで内外は慌ただしい混乱が起こった。

素材から合成技術が確立され複製からの量産が可能になった。インチキな反則技に思えるが困ったことに最強の武器やイベント用アイテムは合成できないつまり最強から二番目の武具が作れることになる。それはファルの知識で最強から二番目の何を作るかになった、対竜用、対魔獣用、対人用、少なくともこの三つが重要になる、俺の剣で試され竜、魔獣、人の三つのバランスをとった武器の進化系最終形態に移行された、無属性のヴァルキュリアの武具が生まれ、対魔獣に比重を置いたローエングリーンが生まれ、対人に比重を置いたキルソードが生まれ、対竜に比重を置いたグラムが生まれた。グラムが新生夜空王国に、ローエングリーンが神聖ローマ帝国に、キルソードが聖域に送られた。

三つの至宝から様々な武器が生まれ俺達に専用の素材を研究するマキリスが一応作った。

対魔獣、対竜の半々の素材から作られた天之屠竜破の武具素材が俺に、属性魔法を強化する魔神王の紅玉の武具がコギリに、全モンスターに対して万遍なく攻撃力を発揮する超兵争乱記の武具素材がファル。対魔獣、対人の半々の効果を発揮する国津村正の武具素材がクリス。

マキリスは先頭そのものに向いていないことから防具だけにし、俺達が専用の剣の素材を外し、唯一ファルには専用の武器が与えられ使われた。

見た目に変化はない剣にペンダントが三つで、魔法に関係する物は唯一浸食するように服装を吸収し生物的な細身の外見の薄い衣になる、紅玉が宿るオーブは形を変え四方に浮く紅玉の固まりになる。

「そろそろ時間だな」

「これからというのに終わりですか？」

「ああリアル肉体が疲労を訴えている限界だろう」

隠れ里の宿屋で一端休みながらゲームより出る。

そんな連中が国家ごとに別れ話し合っており、現在深刻化している魔獣に対しての武具の量産化計画やコストの面での折り合いや、様々な武具の計画が進められている。

純閻派の王国が一応誕生したが内部での権力闘争や派閥の戦いで筆頭になった存在がマーモ島での暗躍で知られる閻の英雄、名前は知らないが有名すぎる。四人の配下を引き連れ閻派の分派にして武闘派の竜騎士の王国、新生夜空王国との政治的融和を話すが竜騎士からは近寄ることすら嫌がられている、謀略や策略を好まない竜騎士は対外的にも受けがよい敵かもしれないが最終の戦までの同盟の話で忙しそうだ。

竜騎士の団長オグマに挨拶した、早速刀剣での試合を申し込まれ木刀が用意され試合が始まる。

俺が全力で加速しながら大振りの一撃を出す、その瞬間にオグマの木刀が突き立てられようとするそれを片手で受けオグマの頭上を下ろす。

「一本見事、探偵か？」

「ああ学生の探偵だ」

「そうか防衛軍士官大学で武術を教えている教え子に誘われハマった」

お互い名刺を交換し、俺が中立側の要人を紹介するオグマは不器用であるが竜騎士としては高い方にある徳の方だ。礼儀正しく不器用な笑顔、それが好感を持ち中立側との話し合いが進む。

大江戸さんが困った顔で、今日の報酬はないことをいう管理人に頼んで、白竜と戦うのは無意味だとただ暇潰しをしたければイベントの進行にもよるが、アデレードでの武闘大会があるそうだ。

俺達三人がこれからの事を話し合った。

「イベントも重要だが深刻化する魔獣対策と封印の杖の課題だな」  
「だろうね君達からすればどう考えても現実問題だ、今までの感想を纏めてもらえるか」

「一つ聞きますがなぜ人工知能を使ったのですか」

コギリが疑問をぶつけると大江戸さんは難しいことを話したが要約すると人工知能の育成に使ってみようという意見だ。今の所は好評だ俺達に仲間意識を持ち帰属意識が形成され結果として育成の手助けになった、そり結果から報酬があるそうだ。ただ人並アーマーの事は極秘扱いだ。査定の結果でもあるが聖剣イベントはアバターにより封印された、このままだと全体イベントの進行は緩くなりあれ程の魔導士を倒せる者が居るのかは謎だ。ただコギリは対策らしい研究を話した。

「連携魔法の多様だそれにはクリスお前に状態変化魔法を覚えてもらっ」

「えイヤだな駄目？」

「だめだ科学錬成から行くが」

講義が始まり、俺が離れていたマキリスの所に行く

「仕事でやっているのか」

「半分の依頼でしている調査がある」

「謎ではあるがまあ関係ないことだ端的なことを話すが推測だ闇側は孤立し竜騎士が台頭するだろう、闇側の主勢力になれば戦の際相当な力量をふるうだろうが問題は現在の筆頭との対立だ片方は融和と話す従属を求め、片方は嫌悪感からの拒絶がある、戦になるだろう」

「であの戦略兵器探索か？」

「正直学者が集まって話してみたが全くわからない、意味不明すぎる、その辺は私が立ち上げたウェブサイトを閲覧してくれ歴史サイトではあるが、自信を持てる情報量だ」

「しかし白竜強え」

「当たり前だ、というより無謀すぎる戦闘狂か？」

「坊や、男が最後に頼るのは？」

「敢えて知力といっておこう」

わかつているようで俺が持っているコインを渡した、珍しい硬貨で限定の品だ。

「仲間の証だ、一つしかないが」

「妙な話だ頭の悪い探偵との友情か」

俺が笑う、頭が本当にいい奴に言われれば気持ちも晴れる。その後現在の自由七姉妹都市の噂があった、殲滅し続けるアルカイザーズの戦略方針というモノが変わった今まで戦闘時間が十分程度はあったが殆ど瞬殺で抵抗された後すらないことが判明し、一体何があったのが、憶測が飛び交っている。

「一応推測は成り立つ、暗殺用の兵器が開発されたのだろう」

「違うな戦闘能力のそのものが高速化したのだろう、噂じゃ熱線

を放つそうじゃないか、移動砲台と言うことだろう」

「詳しいな、実は十六年前に熱線技術が確立されたが、その技術が発表される前に技術者が行方不明になった、生死は不明らしい」

「アルカイザーズとは違うな、連中のやり口じゃない」

「調査したのか？」

「直接依頼されることもある」

これにはマキリスが絶句する、あり得ないと言いたげだが、現実  
に依頼されたことだ。話せないが意外に庶民的だ。

「クトゥーは不思議だな、単なる馬鹿かと思ったが、どうも違う、  
頭の善し悪しではない、何かがある、何だろ」

「マキリス、ハートで仕事しているか？」

「アホか精神論で」

「こんな事件があつた、夫が勤労で朝の八時から朝方の四時まで  
仕事していた」

事件のことを話したらマキリスは軽く泣いた、いい話だと、飛び  
級にありがちな大学に入れば単なる学生ではあるがそれだけ世知辛  
い事柄にふれてきたそれ故にわかる。

「勉強しておけ心に刻むことだ、分かることが常用じゃない刻む  
ことが重要だ、仲間だから話したが他人に言うなよ木っ端恥ずかし  
い」

「恥ずかしいか、よくわからないな人を知ることが人と接するこ  
と、わかっているが話が合わなくて」

「無理にあわすな大学以外でいくらでも居場所はあるそれを探せ  
少なくとも俺達は仲間だお前の成長を見守る」

「まるで時代の寵児だな、運命が動き出したようだ、欲望の女神  
は誰に微笑むのだろう」

「お博識だな、ヴィーナスは恋の女神にして欲望の女神多神教ではよくある反面というやつだ」

「将来考古学者にはなるが同世代と遊んでみる」

少年が勇気を出し向かっていく、俺は微笑みながら見守った。後ろでは講義から逃げようとした栗栖野を捕まえるコギリとのひと騒動があり、毎日行われるゲームの終わりの晚餐会にオーナーから寄付された資金で運営されているらしい何よりも当人が力説するほどの有力な部門にのし上がったのが娯楽部門だ。

大江戸さんのように熱く語る者や様々な開発者の想いが実を結んだ。

査定人としては多少難易度が高い方が楽だ、相手が弱いと何をするかわからないからだ。

解散になり帰寮する、町中で俺のゲーム映像の放送があった、さすがに洒落にならない事件だ。苦情を受け調べられると探偵業務を手助けしようとしたファルの仕業らしい。

寮で先輩の二人が大真面目に寮の訓練施設に空の軌道を置くことにしていた。

「ハマったそうだな」

「鳳先輩必要経費が加重になりますが、一つだけでも無茶苦茶な電力を食うのですよ」

「その辺は大丈夫だ訓練として使えるとし父様の支援を受ける」

「悪気はないとはわかっていますが貧乏人からすれば嫌みです」

鳳先輩が苦笑する、聞けば暇な時間にネットを使って空の軌道を調べてみたそうだ。そうすれば歴史的な事件が多発しそれに俺達が深く関わり、特に新閥派の竜騎士の意見には賛成的で先輩の二人でゲームに参加し竜騎士を目指すそうだ。大江戸さんに連絡するとご購入感謝とあった。腹は満ちているので人が本当に食べられる範

困の食で済ませ、久しぶりにニコチンを吸収した後シャワーを浴び、久しぶりに変身してみる、外見が涙目になる美人さんに変身を解き、軽く愚痴りたくなった。変身の意味が危険すぎて使えないゲームのキャラクタ二つだ。

久しぶりに依頼が来た、とある人物の身辺調査だ、ただ場所の指定があり先輩に挨拶した後防犯銃器を取り付け、向かった。ヴィシユタの娯楽街、最新の流行とかが流行ってそうな場所だ、それだけに犯罪也多発する。相手は探偵だった。専門家らしく困った顔で写真を出した。

## 第十一章崩壊した日常5

「偶然ではあるが困ってね」

事件は最初の頃だ、二人の男女が話している写真、それに俺が写っている偶然だ。二重の調査になるとこれは例外なく違法になるが学生探偵だけでは心許ないと判断した保険だろう珍しくはないが本職の探偵も困っただろう。

「探偵の規制法に則れば罰則ものだ、しかし事件はそこにはない間違つて君が写つてしまったことだ、この写真のメモリーが盗まれた、そして警告された君がアルカイザーズに関係する学生だと、ほとほと困り果て依頼という形で相談にきた」

「誠に申し訳ありません、その当時は深入りしてなかったモノで少し尋ねてみます」

俺の低姿勢な物腰に探偵の方が驚き、依頼者と仕事を受ける者の側として最低限ルールをお互いに守る、小此木博士に尋ねると写真さえなくなれば危険はないと話した。写真と支払いを済ませ、事件の一つが解決した。

帰寮した後にパソコンからネットに繋ぎ、学術歴史サイトのマキリスのサイトを閲覧する、歴史的な事柄説明され、意外に重要な事柄が存在するマキリスの持論である聖剣伝説を本来司るのは闇の一族と光の一族だ、しかし現在は確認されておらず両者の能力を発揮するために必要な杖も見つかっていない、もしかすれば死に絶えてしまったが誰かが封印したことになる。

栗栖野の部屋を訪するとコギリが居て科学的な状態変化魔法の構成から詠唱まで教えている、さしずめ俺がきて助かったのだろう。

「重要なことが判明した、だが推測の域はでないそうだ、光の末裔と闇の末裔だ」

「初耳ね、二つの末裔は何？」

「聖剣の能力を完全の引き出すには、それを支える能力や、負荷が及ぶ範囲を耐えられる能力がいる、その二つを持つ末裔が本来は居るそうだ、少なくともマキリスや中立側、他にも竜騎士の学者はそれを支持しているが、困ったことに逃亡した光の末裔を知っている」

「あの腰抜け？あれは酷かったわ戦えなくなると逃げ出す、男として終ね」

俺が黙った、女にそこまでいわれたら確かに終わりだ、しかし重要な人物でもある、かといってどこに存在するかは目下の所不明だ。

「マキリスと連絡の取りようがないな、マキリスは恐らく大霧大学の研究者だろう、あそこは機密事項が多く歴史的にも重要な価値があるため、調べられない唯一の場所だ」

「じゃエリート？」

「おそらくな学生ということは四年生で研究課題は古代史の解読、そんな事をする者がまあ

ゲームにハマったら困った扱いだろうが、ある意味ただし姿だマキリスは生き生きしていた、歴史を雄弁に語る歴史の舞台に立ったこれ程重要な立場になれるのは滅多にない」

大江戸さんや小此木博士を通じて何とかマキリスの連絡先を見つけたが、緊急の用件以外は禁止だ。ウェブで話せる時間もなさそうなので、魔法の講義を聴いた後とある提案をした。魔法の効果その

物を再現する道具だ。古代の文献は科学に比重が置かれているが現在の開発方針として必要になると思われる軍事兵器でもあり可能なら助かる民間道具だ。

「わかつていないな、歴史的事件を語ったはずだが」

「えーと、歴史的に戦の前日から魔力の枯渇が始まる？」

「それを防ぐために魔法技術の専門家は必死に研究している死活問題だ、今の所微少な元素を放出する樹木を発見したが育成までの時間が持つかが重要だ」

「つまり開発はされている訳か？」

「一応ではある、魔法を行使する者は確かにいるが、専門家と呼べる者は少ない、特に光の連邦王国で栽培されているが成長が遅く手遅れになりがちだ、魔法を完全に操れる者は少ない、どの国でも二人が最大だ」

「聞くだけで悩む、大学で教えられるような難解な知識や、基礎的学力が問われる、科学錬成ばかりだ、現実には非常識な知識だらな」

「まあそれだけ魔法を御せる者は貴重になる合計して十二人程度だ、現行の最強な魔導士を決める戦いはないそれに必要でもない、メイジになれる者はそれだけに少ない、開発も思うようにはいかない、魔法に対する普及している知識も少ない、魔法を信仰する宗教はないが魔法文明を読み解くなら魔法の知識が必死になる」

必然的に俺も参加させられ徹夜して平和魔法技術の基礎を教えられた、そして朝方追い出され部屋で仮眠し、食事をした後何となくステーキが食べたくなった。

開始時間までステーキの肉を食いつき、事情を知る仲間からかなり冷たい視線が送られていた。

「朝から肉か？」

「何故か食いたくなつた」

「そうだなあれだけ食つていれば欲しくなる」

「肉は味があり加工されているが」

「お前の常識の中で生肉を食べることに抵抗はないのか？」

「生肉なら馬肉やヒージャーがあるが」

「動物を生で食べるな、それと子供にあんな現場を見せるなトラウマになる」

俺が黙るコギリが正しい、が使える技能であり巧くすれば一撃で倒せる便利な技能だ。

小言を受けながらムラダーナに向かう、参加を希望するプレイヤーが列を作っていたが要人になる者や重要な役割を持っている者は通され、俺達は重要な役割を持ちながら仕事でもあるため通される、困ったことはマキリスの扱いだ、現在で重要な学者といえるが対立が存在し、平和主義の学者と現実論の学者の問題として扱うしかない。ただ当人の持つ学生証を使いオーナー権限で通された。

要人の集まる箇所を増設され関係図からの配慮もあるが純闇派と新闇派の対立は表面化しこのままだと戦争に突入する、その問題に聖域の聖騎士国王ランディウスが対話を求めるが内輪の話だと新闇派が拒絶し、最低限の国境線の公文化で一応交渉が持たれた。

開始時間まで粘り強く交渉がされたが雌雄を決することが暗黙の内に決まったようなものだ。

新規プレイヤーが説明を受けダイブする中俺達もダイブする。

人口からすれば数百万人が参加しているゲームだ。軍隊経験者が絶賛するゲームでもある。

そして歴史的に軍事的に大変興味深い戦争が静かに始まった。

新閥派は本格的な軍事侵攻に合わせ、軍事力を国境線に作られた軍事基地に結集しており短距離爆撃の爆薬が神聖ローマ帝国より購入されている、聖域の王国より平和維持軍の話があったが、対立の根深い両者がそう易々と矛先を納めることはないことが明確で、戦争の火種から俺達の参戦を新生夜空王国からあった。

マキリスが必死に戦略的な勝利が掴めないと泥沼の戦争になると話したが、軍事力の格差は桁違いだった様々な勢力から購入された大陸初の兵器戦争は、新生夜空王国の財政力や豊かな生物体系、特に竜に対する価値観からの膨大な竜使い。壮観なまでの明確な差がある。

俺達に用意されたのは外国籍の傭兵指揮官、一応存在し扱いやすい低レベルの小さな恐竜が配置された。傭兵になった者は新入りが多く、内情を理解していない者が多いが一翼に満たされる一万もの傭兵が集まった。両軍が睨み合う最前基地に配置され、歴史的な軍事衝突が始まる。

両軍の総司令官が国境線で一騎打ちした後お互いの侵攻が始まった。

傭兵の多くが勘違いしていたが現実の軍事衝突と何も変わらない殺戮の惨劇だ

目の前で繰り広げられ本当の戦場とさして変わらない戦いに殆どの者が戦意を喪失し逃げ出す、だが逃げ出さないように後ろに歩兵隊がいる、逃げられないから戦うしかない。

「いいかよく聞け、ろくでなしの傭兵共、金のために殺戮を行う

者よ、我らに正義はないだろう、しかし旗はある、名誉のために戦え自らの剣を掲げ、自らの生存のために自らのために剣を振るえ、臆するなら後ろから斬る、逃げるようなら殺す、受け取ったからには地獄の果てまで突撃してもらう、我らに健やかな眠りを」

クリスが演説する、吐く者も存在し、理解できない戦場への兵を送り出す、現場の指揮官であるファルが冷徹な指示を下す、ひたすら相手を殺すことだ、イヤなら殺される。それが戦場だ。

軍事的な衝突は冷静な分析がされた、マキリスが調べた両者の軍事力から短期決戦になる。

一日の衝突でほとんど傭兵が戦死した、相手も死力で襲ってくる、新米程度が勝てるような相手ではない、ただ貴重な戦力を削ることには成功した。生き残った二百名には報奨金が渡され契約は完了だ。

「一万人が一日で二百人か」

「まだマシだ全滅した師団もある、純闇派が使った投擲兵器だ」

「確かジャベリンか、投擲後着地次第爆発する」

「オグマ以下竜騎士団が投入されれば戦線は崩壊するぞ、まともな竜騎士に勝てるような兵力は存在しない」

そんな会話ができる程に精通しているが、現在の戦争で投入された人的戦力より危険なほどの軍事力になる竜使い、その最高峰の竜騎士は同レベルの竜を使役する、最終的に戦力が壊滅する憂き目を見ることになる。

戦線は新生夜空王国が押され気味になるが、相手は相当危険視している竜騎士が投入される、終わったとも思える竜の咆吼、戦線が竜の咆吼で麻痺し、魔法により抵抗能力も消耗戦で底を尽き本職竜騎士が恐怖の名前で呼ばれるゆえんになる。

惨劇が続く戦場に現れ主力を殲滅していく、上空から竜の吐息で炙られ、抵抗しようにも続々と放たれる高温燃焼燃料の樹液により

燃え広がる、戦おうにも上空では手出しができず咆吼から麻痺する能力で主だった戦力が後退し始めると戦線は崩壊した。

追撃する相手に抵抗をあきらめた兵士や騎士が投降し、竜騎士の国、夜空の勝利に戦は終わった。闇派の少数派から勝者となり多数派になる国境線が新たに制定され純闇派の領地は半分になる。

だが純闇派のプレイヤーがゲリラ戦を挑み戦後にはほど遠い話だった。

ランディウス国王の呼びかけで戦争の終わりが取り決められた。純闇派が弱体化するという戦いの終わりだった。

## 第十一章崩壊した日常5（後書き）

誤字、脱字などがありましたら感想の程。

## 第十二章崩壊した日常の終わり

活躍した竜騎士から竜騎士戦争が終わり俺達はアマデュース湖での探索を行っていた。

水中に沈んだ都市が存在しモンスターは人魚化した俺達を襲わない、調べると二つの杖が封印されていた光と闇の杖だと確信し取り出す。闇の杖を夜空王国に送り、光の杖を連邦王国に送った。全体イベントが動き出す純闇派のプレイヤーが造反しとある情報が流された古代生物兵器の復活だ。ただそれが何であるかは不明。光の末裔のことを各王国に伝え対となる闇の末裔を捜すことを頼んだ。光の王国より招待があり王都キャンベラに入った。

中世の町並みは荘厳で大都市だ、豪華な王城は防衛面でも見た目には優れた作りだ。謁見の間に通され国王に面会する。

「初めまして勇者達よ五代目国王アルティーノだ」

俺達が自己紹介し用件が伝えられる光の末裔を捜すこととその前金として単純に攻撃力を練り上げるクリスタルを渡すと別にかまわないとして承諾するとプラス百という途方もない攻撃力のプラスがあった。アデレートでの武闘大会が模様として行われると情報を掴み、その場に向かう。多様な腕自慢が集まりごった返す町中だ。久しぶりに寝台で休む。

「ああベッドはいい」

「全く、兄貴分ならそんな馬鹿なことはいいな、第一個室に二人は窮屈だ」

「仕方ないだろ天下一武闘大会なのだから」

「天下一は入ってねえ、しかし探さなくていいのか」

「その点は安心しろ所詮聖剣がなければ雑魚だ。頭も悪い。ああ言う馬鹿は大会に必ず出る」

「ついでに闇の末裔もいれば楽なんだが」

「おいおい、楽しようと思うな」

暇潰しの会話をしているが、本物の女性陣は買物に出かけた、ここまでの大都市はそうはない。

「聖剣のない光の末裔は無力が、果たしてそうだろうか」

「俺に勝てるだけでも」

「難しい相談だ、クトゥーの能力も装備も最強だ、勝てる要素はないが確実に何かある」

「聞くがゲームの感想は？」

「ゲームは好きでも嫌いでもなかったが、空の軌道は楽しいな嫌う者は少ないのじゃないか」

「しかしリアルだよな」

「その点は同意しよう現実的な運動神経やセンスが光る、今の装備なら白竜に勝てるのじゃないか？」

「さあな、あいつは強敵だ、ただビショップ級と戦ってみたいことにはわからないな、それに魔獣を指揮する魔獣のことは知っているな」

「伝説にある、輝けるに統べる者と光側闇側にある指揮者の魔獣だ」

「しかし戦略級の兵器は未だ見つからないな」

「いや連絡があった魔力還元の方法を知っているか？」

「あいにく戦士専門だ」

「平たくいえば魔力を物に吹き込む、それにより戦略級兵器七流星を使用できるようになったと、ただ連発はできない、今の所夜空

王国の独壇場だ」

「中立側は苦戦必死だな」

マキリスが苦笑して、とあることを話した。

「魔力防壁がある、陸路を遮断する海路は危険すぎて使えない、戦略的には優秀な技術を誇る」

談話することが多い色々と話す、仮眠もとり、武闘大会に出場する。パーティから一人なため俺が出場し仲間が四つの門を見張っている。俺はシード扱いで決勝戦の相手だ。

「どうですか」

アテレード市長の定年退職の老人、ゲームで市長選に勝ち現在の企画を立ち上げた。

「シード扱いがいやだがまあ爺さんの余興に楽しませてもらうよ」

「優勝戦は一騎打ちです、しかしゲームとはいえこんなにリアルなゲームも珍しい」

「イベントも豊富にあるが今の所は不明だ」

「噂では最強の竜と戦ったとか」

「まあ楽しかったどうも戦闘が好きらしいワクワクする」

「それは結構」

老人が笑う、聞けば武道経験者で剣道をしていたそうだそして現在の裏情報が聞けた。

各王国は確かに強力な求心力を持つが分裂や王国の旗揚げ様々な組織や集団が機会をうかがっていると。ただ聖域ではそんなことはない侵攻してはいけない地域だからだ。老人は十六年前の戦役を経

験したそれから戦争の悲惨さを語った、俺も知っている、それで話が合い見物より話す事柄が多かった。

優勝戦では相当な猛者かと思えば中学生程度の子供だった、だが勝ち残ったらしい。

ペンダントから甲冑が生まれる、生体竜隣装甲に魔獣の革が覆い、独特のスケールメイルのようだ。滑らかな甲冑に凛々しく勇ましい外見だ、スカルヘルムが猛者のような雰囲気を見せる。

剣も形を作る両手用の身長程もある剣身に握りの柄の長く、魔獣や竜を叩き斬る目的の剣は独特の形状をしている。全体的に艶やかな外見だ。

「桜花東邦竜剣士クトゥー」

「何で勇者がこんな行事に」

「ついで」

「お、おう、レベル五ボックス」

「おいおいたかがレベル五か？」

「勝ち残ったんだよ俺は強い」

「まあいいさ、全力でいくから精々頑張れ」

ルアアアアアアア！

俺の獅子吼で試合が始まる、ボックスは構え方も知らずはつきり言うと言弱すぎるガキだ。上段から振り落としボックスが避けると判断したが困ったことに剣で受けた、そのまま剣身を破壊しボックスの頭上に剣が置かれる。

「弱すぎるどうやって勝った」

「知らないよ、剣壊すなよ」

「そのうち直る」

優勝品の金を受け取ると大会は終わったが老人はボツクルを気に入り支援するようだ。仲間と合流すると捕獲された光の末裔がいた。それも三人、一人は逃げ出したお騒がせの男性、二人は双子のように瓜二つの顔に美しく整った顔立ちに体型だ。

「やれやれ光の末裔だけか？」

「その様子だと優勝したのですか？」

「雑魚だった、相手にならないキャンベラに輸送するぞ」

三人は大人しく捕まったようだキャンベラに駅馬車で移動する。

検問所で知らせを受けた騎士団が護衛し王都に向かう。

キャンベラの王城に入る頃水路の方でひと騒動があったポーン級の魔獣が現れた、迷い込んだらしく俺が駆けつけ、一刀両断し終わった、王城に入ると今後の説明がされた。

「三人に王位継承権を与えようと思う」

「まあいいが、気に入らないと暴れるようなガキがその男だ」

言い返せない光の末裔の男性は不機嫌そうに黙っている。双子の姉妹は困惑気味にいた。俺達が独立軍騒動の事件を話し最悪のイベント時に決起した中立側の賞金首ということ話を話した。

仕事が終わりに、夜空王国に向かう。王都はダーウエン、ティモール海に面した質素な建物が多い質実剛健な街並みだ。人口が五十万を超える大都市でもある。

王位を継承したオグマが待っていた。

「お久しぶり」

「全くだ戦争の後光の依頼を受けたと騒動だったぞ、まあ窮屈な話は無しだ、闇の末裔を捜してほしい、報酬に闇側伝承や資料を提

供しよう」

「つり上げる気はないが良いのか？」

「いいんだ、先代もお前たちには感謝している。はぐれものの俺達が今や最強の王国だ、問題はない、それに歴史を知るためには必要だ一種の広告かな」

「中立側がやりにくくなる」

俺の言葉に竜騎士達が笑う、オグマが笑い、違いないと笑いあつた。最終的には戦う間柄でも話し合えるときは協力する、そして新生夜空王国はさすがに新興国家のためにしっかりしている前金で様々な情報が入った。夜空王国は古代の兵器の復活に成功し巨人魔導砲を製造していた。強力な拠点破壊兵器だ。

闇側の末裔の手がかりはある頼に紋章があるそうだ、そしてカナリアの目の女性。二人がいることは伝承にある。が広大な大陸を探すのは非効率的だ。その為に王国に探することを頼み中立側の神聖ローマ帝国に向かった。中立側陣営はモンスターに苦戦しており広大な領土の多くが砂漠のために緑化運動で環境開発をしていた、非常に平和的な国家だ。帝都は城塞都市化しており屈指の防衛力を誇っており七流星の浮遊砲台兵器が象徴のように浮かんでいる。

セリ・シアス・リバーズが謁見を許可した、忙しいらしく前置きの用件も長かった。

「現在量産化している魔獣装備であるが、困ったことに採掘量の少ない希少金属が使われている、しかるに伯爵の勇者殿には鉱脈の発見を求める、それと練兵をしてくれ、ポーン級ですら我々では苦戦する、本当に戦闘に向いていない、最終的な戦に勝てるのか不安だ」

「俺から言わせればポーン級にどうすれば苦戦する？」

素朴な疑問に仲間が苦笑していた、戦う者としての素質も差が幅広くある。メイジ職の魔導士も錬金術が専門で、化学合成品の製造を手がけている俺達が居なかったら魔獣により壊滅しそうな弱さだ。軽く愚痴りたい。

「さて、向いていないことだ平和的な技術に関しては高いのだが」

聞けば戦車を作っているそうだが火薬の原料が存在せず魔法による化学合成で作っているそうだ。銃は威力の問題で不採用、現代兵器の多くを作っているが竜騎士に対抗するためハマズリー山脈での練兵を行っている、しかし戦闘向きではないことは周知の史実で二十になるモンスターに苦戦し、三十になると蹂躪される憂き目をみている。戦略的には強いであるが作戦面の弱さや戦術面での戦闘能力の低さを克服しようと努力はしていると。

頼んだ闇の末裔に関し情報は手に入ったハマズリー山脈の練兵所での発見があった

呼び出すわけにはいかなかったので俺達が向かう。練兵所に居たが中立側にすっかり馴染んでおり、今更闇側につくのかは疑問なほど和気藹々とした雰囲気だ。

夜空王国に手紙を送った。返答で最終的な戦に参加するなら大丈夫だと返答がありそれを提案した。

「戦ですか、私は中立側が好きなのですが」

「巫女、一応だ、最終的な戦で闇側に付くしかないのだ、決めた定めだ、次回のプレイに期待するしかない」

「残念です」

杖にしろ末裔にしろ一応役者は揃った。剣を守っているアハダールの動き次第だ。

中立側の精鋭に該当する侍たちに指導し兵士からは鬼と呼ばれた。だがはつきり言うくと弱すぎて話にならない。単純な敵には勝てても技量面での弱さが目立つ。

闇の末裔、その片割れの男性が多少はできる俺の見所ではオグマに対抗できる素質があるが、武器が弱い、光側の連邦王国から取り寄せた武器のプラス百の素材を使い強化した武器で何とか持つようになった。中立側イベントが進行し魔力が不安定になる自然現象地域が現れた。訪れる最終の戦争が近いと噂され対抗するために元素の樹木が植えられていく、中立側に残り、ひたすら練兵や精鋭の強化に励んだ。その頃領地の方から手紙があり急ぎ戻ってほしいとあった。練兵のために三人が残り俺とマキリスが向かった

領地は酷かった、砂漠化で耕土が荒れ果て、作物は全滅だ、必要な物資も金脈からの資源も少なくなり死活問題にたたされていた。

「馬鹿な早すぎる、こんな」

「確かに早いしかし、いったい何か？」

俺達の疑問に学園都市の学者が答える、砂漠化を引き起こすモンスターが増加だ退治しているがランダムで増えるためにもはや破棄するしかないという決断だった。

この事件が公になり、各国は砂漠化を食い止めるために環境開発技術の復元対策の計画を施行したが、急速に砂漠化が進む現状に対抗するための材料や技術が慢性的に不足している。

環境学者がマーモ島に避難計画を提唱したが無理難題だ、しかしこのままだと飢えることになる。

西部の食糧事情は日増しに悪化する聖域や外国からの輸入で何とか持っている。そして鉱脈の枯渇が始まるともはや勢力を維持することはできないと判断され神聖ローマ帝国が崩壊し始めた。

その時魔獣に暴れるような事件が起こると俺や戦える者が挑み、倒す、しかし崩壊は加速度的に悪化する、少ない食料や豊かな大地を巡っての戦が起こりローマ帝国に止める術はなかった。

西部での崩壊に各国は戦慄した。当たり前の崩壊は悲惨だ。

俺達の領地のように砂漠に飲み込まれた住人はマーモ島へん避難が行われた管理人からの統治が行われているため何とかなるが、膨大な人口を賄う食糧の供給は何れ崩壊することは明白だ。

俺達は魔法の段階を上げるため大陸の神殿を巡り最終的な段階に上り詰めた。

その時には西部は崩壊し人口の大半が豊かな南西部に移住していた。

砂漠化の波は北部も直撃した元々自然が豊かではない北部は早期に移住が行われ大陸の人口は東部へと移住していく。俺達は親しい隠れ里に暮らしていた。

文献を調べ、砂漠化を食い止める方法を探したが時間の問題でもあった。

最終的な戦を前にして大陸の終わりが近づいている、その時アバタールが来訪した。

「お久しぶりです」

「結局戦を迎える前に大陸は滅びに近づいている」

「防ぐ方法はありません、しかし、それだと戦争が起きます」

「使うしかならう、戦の前に全滅が近い」

「聖剣の力を使い大地を癒すのです」

結局聖剣を封印したために起こった現象だ、二つの杖を使い封印を解き、大地に力を送る、急速に砂漠化が止まり、今度は魔力の枯渇が始まった。戦の前日

## 最終章紡がれる先に

中立は結集し西部防衛戦略の元で戦時下になる、二つの大勢力は衝突する前に最低限の交戦規定を定め、終わる戦いを前にし、三すくみの戦が始まる。

「結局俺達は負けるのか？」

「兄貴ふざけるな俺達が勝つ」

「しかし、魔力の枯渇が始まり、資源もなくなり始めた、聖剣を持たない俺達に戦略的な勝利はない、切り札は唯一残された環境回復技術か」

「そうだ我々はまだ負けていない我々が国家として負けても技術は残る」

コギリの言葉に領地での最終作戦に使われる環境回復技術開発が行われている、生き残るために全力を尽くしている。破壊された環境を回復させることで持久戦を行うというアイディアだ。

最終的な戦の前日が終わり空に二つの月が現れるようになる、モンスターの襲来や魔獣の襲来、手の施しようもない末期だ。

続々と悲報が届く、各地を防衛する軍人や民兵が全滅する報告だ、最終的な作戦が未完成のまま籠城戦を行っている領地での攻防は切迫したモノだ精鋭の分隊が派遣されたがいずれ力尽きるのは明白だ。一般住民はマーマーモにいる、俺達は残された設備を使い研究の時間を稼ぐ。

アバターが協力し俺はひたすら待った、よくわからないが大将が前に出るのは負け戦だそうだ、失われれば戦意が崩壊し敗北する、

残された領地と帝都が残るのみ。

帝都陥落の知らせは二日後だった、圧倒的なモンスターの襲来で防衛兵力は全滅、皇帝は戦死、住民は脱出の船舶でマーモに向かったそうだ。最後の食事は敗北感が強く悲壮感にあふれていた。笑える者は居ないだろう、滅ぶ側の悲しみは深い。

環境回復技術の完成を待たずに城壁が破壊され俺がでることになった。突破口になだれ込むモンスターや魔獣をひたすら倒す、クリスやファルも続くが魔力がない俺達が勝てる要素はなかった。物量で押される第四から第一まで後退し、最終防衛システムを起動させた。防壁が生まれるが時間の問題だろう。

「よく奮闘したな団長」

俺の言葉に団長が頷く、敗北は必死で回復技術が確立されても俺達が生存する方法はない。

「分隊、次もあえるか？」

それに頷く、傷つき負傷していない者を探すほう難しい。

「ルバンご苦労だった」

「安心なされ、技術は確立されます、我々は敗北するでしょう、しかし大地は残り意志を継ぐ者がいるでしょう、次回に期待します」

「せめて切り札になる技術でもあれば救われるが無いのか？」

返答はない、仕方なしに歌う、平和なとき歌われた歌だ。誰が作

ったかは知らないが合唱になり最後の歌声が響く。一日がたち、技術の試作が生み出されたが防壁の魔力が枯渇した。どうも時間切れらしい。

「いいか突破口を作る、脱出せよ、これは帝国の命令だ」

「残念ですな」

「ルバン、資料を持つ学者や技術者を助けてくれ、従騎士団、侍分隊、よく励んだ、向かうぞ」

城の守りは堅いがビショップ級の超音波により破壊され続けている、残った帝国最後の兵団が突撃する、無慈悲にも鉄槌の様なビショップ級の超音波で次々と戦死していく、突破口すら作れないまま蹂躪される、最後の最後に負けることは許されない、薙ぎ倒し食らう、大物だけ倒し、何とか作り上げたときルバンの号令で最速の軍馬で技術者や学者が分隊に守られ脱出する、護衛の従騎士団は全滅した。

俺達が突破できる余裕はない、最後の最後まで暴れ続ける、そして魔獣の指揮官が現れた。

「ご大層に」

「あれを倒したら脱出するであります」

「最後の魔法が使えないのが悔しい、私とマクリスは逃げる、クリスをつけてくれ」

俺が頷き、三人が別方向に逃げる。それを追うモンスターをクリ

スが薙ぎ倒す。俺とファルが残り、周囲を何重にも固められた包囲戦の中指揮官を目指し突撃する。一撃でモンスターや魔獣を撃破し、破竹の勢いで進軍するそして切り札の広範囲戦闘スキル最後の晩餐を行使し周囲のモンスターや数多くの魔獣に即死攻撃を行う。そして開けた空間に指揮官の魔獣と対峙する。

「ファル、後ろに回れ」

「了解であります」

俺が跳躍し指揮官の頭上から斬りつける、それを看破していたように超音波の対空攻撃を受ける、竜隣の鎧が壊れていくが速度はある最後の二撃で指揮官級が一刀両断される。

しかし被害も大きかったように俺はファルに抱えられ逃げる。

西部の終わりから聖域の防衛は結集するが難しい相談だ。ルバンに指揮された騎馬隊は聖域に到着し研究を続行する、癒すの時間で俺達が合流した王都で生き残った侍分隊の一人が任務の終わりと突撃し最後に仲間の敵をとることを報告し去った。

光と闇の激突も凄まじいモノらしい最終的な攻撃手段で戦い、いつ果てるかもわからない最終決戦を行っている。

聖域の多くを飲み込んだ砂漠に便乗するモンスター群、襲来する魔獣群、王都防衛での戦いで完成した環境回復技術が行使された、微弱ながら魔力が回復する。

「いいかここで踏ん張れ」

ランディウスが号令を話す、戦える戦力を集結させ王都に進軍す

るモンスター主力軍との激突が始まる。殆ど覚えていないが鬼気迫る戦いでまさに羅刹のような戦いぶりだったらしい聖騎士団は全滅、冒険者の殆どが戦死、国王ランディウスが生き残りをまとめ王都まで後退する。

魔法防衛システムが発揮され何とか三日を持たせた、その間に資料や最終的な武具の生産、マーモ島に脱出する時間を稼ぐため精銳が集まる。

「結局負けるか、だが最後の―撃をとくと知れ渡らせよ」

「最後だ、俺が引きつける最後まで戦おうじゃないかどこかの誰かのために」

最後の部隊は僅かに三百名、脱出する船団を守るために魔導士は居ない。

防衛システムが崩壊し、突入するモンスター群、それを王城で迎え撃つ。

俺が守備する正面の玄関、高い確率での即死効果のある最後の晚餐と大ダメージと防御力の低下をもたらすスキル終わる世界を行使し、ひたすらに撃破していく、二つが組み合うことで無敵に強さを誇るがビショップ級の出現に精銳も倒されていく、後退する命令が届き、最後の謁見の間に後退する。生き残った者は数える程度二十名。

「強いな、今なら連邦王国に脱出できるが」

「モンスター共にプレイヤーの意地を見せて果てる」

「そうだな、所で葉巻吸っていいか」

全員に集られ最後の一本を吸った。美味いというより漂う匂いに苦笑するしかない。

何重もの防壁に守られている扉が破壊される、現れた高レベルモンスター、冗談のように最悪の呼び名が強いトロールキングだ。

ウオオオオオオオ！

モンスターの咆吼、俺達が突撃する、一撃では倒れず、工夫することで組織的に戦い数をこなす。が物量や高レベルモンスターに押される俺、クリス、ファル、ランディウスが残るのみになった。

「敵さんが休みらしいな」

「救援はないが期待してしまうな」

「最悪な話だけど死ぬとどうなるの？」

「単にゲームが中断されますが当たれば死ぬほど痛いそうです」

「俺の経験から言わせれば痛くない攻撃はない」

最後の会話らしい言葉が終わりモンスターが雪崩れ込む、それを連携のスキル攻撃で倒していく、すでにレベルが五十に達しているがそれでも増えていく、最強の組み合わせの攻撃で倒し続ける。が空腹感に襲われる、食料からの栄養源が枯渇し始めた。

奮闘したそして最悪の増援が現れた、最終決戦に残った闇側、闇の末裔と竜騎士団長オグマ、副団長シレティア。モンスターが退き、俺達が対峙する。

「さて終わりの戦いだ」

「負ける気はない」

「終わったら語ろう話したいことがたくさんあるお前たちは最高のプレイヤーだ」

俺がオグマに斬りつけるそれを合気道の要領で捌き、剣が深々と心臓を貫く、即死の攻撃であるが体力値は残っている、剣を掴み、腕を切り落とす、出欠からの意識が飛ぶような痛みに襲われるが連携スキルを発動する。オグマが吹き飛び、その隙に闇の末裔の剣が俺の首を貫く。致命打を受け、生き残るためにモンスターの中に飛びこみ連携スキルを発動し体力の回復速度を上げる、シレティア一人で三人と均衡を作り、多彩の魔法攻撃で四人での攻撃が分断される。

教え子である闇の末裔が哀愁漂う瞳で対峙する、俺が取った、加速からの斬りつけを剣で受ける火花が散り何重モノ斬り結びから激しい火花が散る。片手を失ったオグマは残った片手で短剣を使い俺を奇襲する、賢い戦術だ、強い者を最初に倒す。

連携スキルを発動し押すが体力の七十二パーセント失われるスキルは危険性ある。

オグマが投擲したナイフを避けず受け、オグマの剣を握り、投擲する、それでオグマが倒れ、残った末裔は突貫する捨て身の一撃に

反撃の長剣を薙ぐ、一瞬で決まり、末裔の片腕が切り絵とされる、そして返す刃で反対側の腕を切り落とし力任せに風呂敷で縛る。

反撃の剣が俺の右肩を突き刺し、使用不能になる、残ったシレティアがランディウスを倒し、クリスは武器を失い、最後にファルが戦っている、俺が助太刀するために突撃する、それを待っていたように投擲ナイフから雷撃の攻撃で俺の体力が点滅する、そして動けなくなる。感電だ。戦う両者は果てることのない戦いで、クリスが援護する魔法を使い、シレティアの一撃をファンが受け、反撃の一撃でシレティアが絶命する。

終わった。

最終戦らしい白竜が現れた、戦う力などあるはずもなく一撃のブレスで俺達は城ごと吹き飛び倒れた。

ゲームが終了した、少なくとも最初のゲームをクリアした者は居ない。

だが管理人から再戦を提案されて行った。

俺とクリスにファル、エキストラとしてコギリ、マキリス、五人で挑む。

「分散しろ！」

怒号と共に分散し俺が前方に立つ、白竜は傲岸にも攻撃せず、舐め腐った行動に最強の連携攻撃が炸裂する、俺の連携スキルにコギリの最強魔法の五重行使、クリスのバッドステータスの攻撃、ファルの跳躍からの頭部に対する一撃、マキリスの爆砂の魔法。これには白竜が動くが体力ゲージが恐ろしく減っている、通常の攻撃から

補助魔法、援護魔法に回復魔法。魔法が使えるれば相当楽だ。終わる世界を連発し白竜の防御力を低下させる。一時間もたたずに白竜は息絶える。

一応エンドがありイベントの達成率や様々な評価がでる、今回は早めに聖剣が解放されなかったため崩壊が早かった。ゲームの休みがありクリア得点として俺達には装備の保留とステータス、魔法の保留があった。他にも管理人からみた功績で得点があった者は多い。

レベルやステータスに制限はなくどこまでもあがるらしい、イベントの達成率で新しいモンスターや様々な場所が公開されるそうだ。

## 2 1 (前書き)

ナイツ・オブ・デスの若き頃です、雑な文章で申し訳ない

## 2 1

ヴィーナスの香りが

### 序章 1

その日は終了式の終わった三月の上旬だった。春の微風は心地よく肌を包む、春の日より燦々と陽光は柔らかく程よい加減だ。その日は偶々娯楽街と呼ばれる繁華街にきて買い物を済ませ、自宅に帰る帰り道にちょっとした周りの道をして冒険のように路地裏に入った。

路地裏怪しい響きを出す、冒険心から出たことを即後悔する羽目になった。

「お兄さん遊んでいかない？」

三十代の年増の女性が声をかけてきた、上手い化粧が特徴の女性、とは言うもの、遊んでいくとあるが碁盤目の様な都市で当たり前前の繁華街からメインストリートから人気のない通りにきたただけ、それで声をかけるのだから非法の香りだ。

「興味あるかじゃついてきて」

その時にはノーネクタイの黒いスーツ姿の男性二人に挟まれていた、声を上げればどうなるか目に見えている、怯えるような顔や気配だったのだろう、女性の後を付きながら逃げる口実を考えていた。ビルの中に入り中はシックな酒場の様になっていた。

「何の店か、興味あるよね、ここは娼婦を斡旋するところ、も

ちろん前払いなんてケチな話はしない、返せるのなら好きな女性を抱けるわよ」

非合法、当然だこの国では売春は法律違反だ、そして抱かなければどうなるかも見えていた共犯者を作り上げることそれが目的だとわかったとき嵌められたことに気づいた。

酒瓶の代わりに写真とスリーサイズが載せられた娼婦を紹介された。

「初めてだから、初物いつてみる」

必死に逃げることを考えるが出入り口は一つ、酒棚が並ぶテールブルがあり椅子がある、黒服が二人出入り口のドアに立っている、どれだけ喧嘩に強くても今更警察に通報しても遅い捕まり刑務所いきだ。罪状は売春の顧客。

無言を承諾と受け取ったのか女性が携帯から相手呼び出す、それが人生の終わりの始まりだ。

俗いう売りの少女は同世代の少女、乳白色艶やかな肌で発育がよく見た目は北辺的美意識を集めたような蠱惑的な美少女、恐怖心と嵌められた敗北感からの焦燥感、それでいて少女に目を向けてしまっ、お馬鹿な行動の根本にある性欲、売春の斡旋、つまり娼婦の纏め役である女性が提案する。

「ねえこの子の一生を買わない、つまり結婚すること、色々と用意するわよ」

外国籍の少女を婚姻させ戸籍を手に入れる少女にとって自分が顧客であり惨めな生活から解放する唯一の希望、犯罪に巻き込まれ

る情けないほどの優しさから頷くしかなかった。

「あなたはいいい人よ、いい男になるかはこれからだけど、必要な物を用意するからしっかり稼いでね、旦那様」

艶やかな微笑みで女性はいき切った、俺は犯罪組織の一員のなつたのは言うまでもない。

犯罪組織の連れられ戦闘訓練を受けながら様々な犯罪知識からの学習を受けた三月が終わり四月になり、実家に戻された、一ヶ月間一人旅行に行っていたことになって、親から絶縁され実家を追い出された、組織が用意した地元の都市に家を購入された、組織の一員として専用区の中で最新の防犯設備の説明を受け同僚であり婚姻相手の少女と合流した。

少女は夫である自分の事を夫と呼び感謝していた。そして初夜を迎える、既に人生は決まっていた、終わったのだ平穏な生活も、平坦な人生も、平静な生き方も、平和な暮らしは脆く崩れ去り犯罪組織ビィナス、恋の女神にして欲望をかき立てる女神、そしてその構成員の恋人達からラヴァーズと呼ばれる。

人生の教訓はかもれる奴からかもれ、知らないことは馬鹿、そして情に流されるのは人生を狂わす要因でしかない、現実を知っていないが非現実的な夢を見ている気分だった。

初めての仕事は初夜の翌朝だった。夢を見ているような気分が目覚め現実から逃げるように訓練をしていた、そして携帯が鳴った、逆探知が不可能の特殊な携帯だ。通信を押す事は躊躇うこともなかった、逃げ場所はないのだから。

「仕事よラヴァーズ」

「封筒を受け取り、届いた封筒を確認し、公式サイトから飛ぶ、暗号から所属を確認して仕事するわけだな」

「物覚えがよくて助かるわ、早速仕事して」

通話を切る、携帯の通話が切れる、電話の相手が誰かもわからず、着信の名前も暗号化された、組織の連絡電話番号があるだけだ。高揚も何もない壊れた日常の中で人形のように3LDKの部屋、部屋の出入り口の郵便物を取り、中身を確認して封筒を開く、暗号だけが簡素にかかれていた。

それを確認して仕事用の部屋である一つ部屋の備え付けられているパソコンの電源を入れる、時間と共に液晶フィルターに光が生まれてパソコンが起動する。標準的なネット画面になり検索からサイトに飛ぶ、十六桁のパスワードとIDを入力し中に入る暗号の入力画面に三十二桁のパスワードを入力し自分の部署を確認する。

組織ヴィーナスは何でも屋組織のようで関連する様々な組織と繋がる、少なくともそう教えられた、受けた戦闘訓練に犯罪知識の学習訓練、それは末端作りと判断していた。仕事内容は簡単な情報収集、街の事件を追い組織に提供するこれが基本になると、追加の仕事があれば基本に影響しない範囲で引き受ける注意事項があった。

そして部屋を確認した3LDKの部屋、仕事部屋が二つ、寝室が一つ、リビングダイニング、キッチン、バスルーム、洗面所兼脱衣場、トイレになる。犯罪組織の末端が必ずしも非合法に該当するかは別の問題らしい。さらに届いた玄関で封筒を取り出し中身を取り出し封筒を捨てる。暗号から末端の殺し屋、それが俺の仕事だ。表の経歴上は中学卒業後高校に進学するその際に企業体に学生社員として入社、十六歳になった昨日、現在の妻と婚姻しロシア国籍と日本国籍、円経済圏自由都市国籍の三重の戸籍を得る。選択肢などあるはずもない。それが現実だ。

「おきたかヒート」

振り返ると溶けるような乳白色の肌を全快した妻が立っていた、見応えのある裸体を見せ、挨拶を済ませると風呂に向かつて行った。一応愛のある家庭だ、それだけは絶対だと言いたい。

明日に迫った入学式の前に自己紹介をしておく、ありふれた日本人の少年の容姿、特徴のない個性、顎髭が自慢の黒髪を紅く染め短髪に切りそろえた年齢は十六歳合法的な結婚可能年齢だ。

名前は絶縁された家名が嫌いなので妻の名字を貰った。

アルアベルタ・ダ・久志、通称ヒート、

自慢じゃないが愛妻家だ。特技は無し、犯罪を教える教官も最後に平凡な少年と言い切った程に没個性。妻の自慢は出来る、艶やかな黒髪の腰元まで伸ばし、実際の年齢は知らないが十代中盤の最後の十六歳、愛くるしい黒曜石の切れ目、優美な眉は形が好く、鼻梁は高く、小口は桜色の花卉のよう口唇、東洋的美少女の顔立ち、スリーサイズは見応えがありモデルのような痩身ではなく砂時計体型の豊かな胸に見事に張った腰回りから伸びるスラリとした足、一発で魅了するような艶やかな微笑みが最強の武器だ。

名前はアルアベルタ・デ・フィーナ、通称フィナ。

妻の性格は良く知らないが献身的で健気な賢母的女性らしい、ただ犯罪組織に用意された生活に居るような過去はよく知らない。

自己紹介が終わった所で妻の風呂が終わり、俺が風呂に入り、顎髭の手入れをして小綺麗にして妻が用意した服に着替える色物のノースリーブのシャツに無地のスラックスにネクタイをして、感動し軽く泣けた。妻の方はチューブトップの上着にデニムのハーフパンツ、銃が普及していない場所では暗器の様な品は持たないことが基本だ。

目玉焼きに白米、薄いみそ汁にサラダ、簡単な朝の料理が並ぶ。

食べると一品一品が美味い。

「美味しいなフィナ」

「当たり前だ」

尊大な物言いに自信があるような響きの声、ツンケンした性格のようだ。

食べ終わり片づけようとするとフィナが何気なく拳銃を握る。

「家事は女性の仕事だ、そう思わないか？」

抵抗せず食器を置く、仕方なしに装備の確認を行う。外出用の仕事用具、小型液晶フィルターノートパソコンに学生家業用携帯と頸骨通信機、暗視機能に赤外線視認機能の光学式情報機器の双眼鏡、デジカメ、最新の情報機材の小物、格闘より電気警棒に小型催涙スプレー等の個人防衛機器、単純に格闘時の攻撃力を増すためのナックルガードの手袋、消音シューズ、外出用品を纏め終える。これらの品は補充可能な使い捨てだ。

組織から殺しの装備としてボディフィットな潜入服に特殊な防弾装甲を貼り付けた簡易装甲服、短機関銃ベルギー製P90、5・7ミリ×28専用カートリッジの予備弾倉のケース、無力化装備の催涙ガスのスプレーに手榴弾、支援用の日本製99式軽機関銃、装備として火薬式の拳銃グロック19、弾丸は徹甲焼夷弾、俗にAP Iとも呼ばれる、オプシオンとして赤外線照準器。外出用装備のうち身につけられる物を身につけ、潜入用小道具を腰のポーチに収め完璧だ。

仕事を行うための装備を偽装し外出する準備を行う。

朝の家事を終え仕事の確認を終えた妻が黒を基調としたシャツ

にミニスカート、そしてハイソックス、黒の中に袖や裾に銀の刺繍が織り込まれている。外出用の装備と殺しの装備を着込み現場に向かう、専用区の場合は、海上自由都市の外縁第三商業区、李企業体グループ専用の区で巨大な高層複合施設が存在し、居住区画から企業体の専用駅から東シナ海に面した第十二住宅区に移動するため三層のモノレールの駅から仕事に向かうモノレールに乗り込み外を見る。

外縁に当たる住宅区、娯楽区、商業区、工業区、貿易区、海上都市からの本島に向けて唯一の陸上ルート橋がある橋区。海上都市全体は円形、中身は六角形の区に碁盤目状の町並みモデルが京都になったからだ。海上都市は日本が地球温暖化対策の一環で生み出した新コロニー計画の元に造られた。一般に公開され三年、三年前の4/1日沖縄県に作られ最新鋭の都市が公開された。時計回りに場所を示し、第三は時計の三時に位置する場所になる。

仕事の場所は高級住宅地の第十二住宅地、居住の関係から一戸建てはない高層マンションが建ち並び、仕事の場所はそこで取引されている麻薬、その売人の殺しだ。

到着した高級住宅地の高層マンション指定の部屋に向かう。

最新鋭の防犯設備を仕事用のマスターキーで入り、黙々と移動する。

到着した部屋の前にある防犯用のドアをマスターキーで開け、中にいる人を確認する。

ありふれた独身会社員と取引相手の麻薬の運送屋、取り出された拳銃から俺達が殺し屋とわかる抵抗するための拳銃を取ろうとし

た、妻が投擲したナイフが足下に突き刺さる、抵抗をあきらめた二人に拳銃を突きつける。壁に寄せ小道具のビニール袋で顔を覆う、その後呼吸ができないようにしめる。抵抗するように暴れたがすぐに大人しくなり残った一人も同じようにしめる。

組織からの追加の依頼で高級住宅街に存在する麻薬組織の構成員の始末。

ビニール袋で窒息死させるやり方で終わらせ報告をすませる、そうすると担当者がやってきて爆発物を取り付け証拠などは回収し俺達と離れた後爆破する。組織のやり方らしい、俗に自由都市流といわれる仕事のやり方だ。

爆破する担当者は東欧系美人で妻の髪の色を銀色にすれば当てはまる。

爆破担当者と別れ、次の仕事を行う。海上自由都市では組織同士の抗争は日常茶飯事だ。次の仕事に指定された場所に向かう。

ラヴァーズのデス、学生が俺達を併せて三組でランデスと呼ばれるスペルから駆ける死に神、二十代の後方支援を担当する夫婦が五組バックデス、スペルから後ろの死に神、爆破を行うラヴァーズのインフェルノ担当者が十組、三十六人が合同で行う組織潰しの作戦だ。

作戦が説明される那覇市で台頭している中華系マフィアと共闘することで成長している台湾系暗殺組織の二つを潰す、中華系マフィアの主立った施設は爆破し生き残りをバックデスが始末する、

問題は台湾系の暗殺組織で少数精鋭らしく腕利きが多いランデスが投入されるのがこの組織、強いらしく何個かの組織を返り討ちにしている。簡単な道具での暗殺は不可能と判断され奇襲からの銃撃戦になる、後方支援に一組のバックデス、同時に潰すことになるので開始時刻は爆発物の仕掛けが終わってから。

暗殺組織の名前は龍破、組織の者は中華服に身を包んでいるので分かり易い。女性の暗殺者は確認できず、成人台湾男性だけの組

織。

主要武装AK47の現代版改造品が多いトカレフを大量に持ち密売も行っており、軽機関銃での武装を確認しているので危険な組織でもある。無反動砲を大量に購入する予定らしく密輸先でもある。

構成員は二十名、関係施設は今後の爆破予定先。主要施設の間取りを頭に詰め込み詳しい構成員の情報から経歴まで覚える。終わった後確認して作戦を行うための偽装輸送車両に乗り込む。

分散して移動し暗殺組織が根城にしている那覇市の賃貸アパートに到着する。

車両の中で短機関銃を取り出し専用のカートリッジの予備弾倉を弾薬ベストに取り付ける、殺しに必要な装備は外し、ベルギー製短機関銃P90、ストレートブローバック式5・7ミリ×28小型ライフル専用弾を使用し五十発が詰まった優秀な装備、何より短機関銃の中で高性能であり収納しやすい。予備にオーストリアのグロック製シリーズの19を採用している弾薬は徹甲焼夷弾。予備弾倉を一つ取り付け、片方に催涙ガスの手榴弾を取り付ける。奇襲作戦からの銃撃戦になるため手榴弾は多めの方がいい。バックデスの一人が狙撃用ライフルを持って近くのポイントに向かい、片方が地表から99式軽機関銃で支援する、弾薬は7・62ミリライフル弾のドラム式九十発の弾薬を持つ。

その準備を行い予備の弾倉を取り付けている。

開始時刻に住宅地まで同時爆破の爆音が鳴り響く、奇襲配置に付いていたランデスが潜入する陽動での狙撃と支援の銃撃が始まり、三階建てのアパートは全部貸し切られ、三組が担当の階に居る者を射殺する手はずだ。担当の三階で俺達は各部屋のドアのポストに催涙ガスの手榴弾を投げ込み、部屋からなくてはならないようにする、燻り出された台湾系の暗殺者は窓から逃げようとするが熱源探

知のスコープから狙撃用ライフルの徹甲弾で射殺され、狙撃を警戒して部屋から飛び出た者をバックデスが支援用火器で蜂の巣にする間に合わなかった暗殺者に銃口を向け二連射機能で射殺する。作戦開始から一分で半数が死亡し、血の池を作りながら横たわっている。

残った十名が反撃する為に潜む、ただ装備の質が違う、潜んでいても熱源表示のスコープから狙撃されていく。俺達が一分で始末したのが二人、三階は武器庫であり資金を管理する場所のため潜んでいるのは後二人。

二階には三人、一階には五人が潜んでいたが狙撃と支援の銃撃で全滅。時間の問題でもあるが沖縄県の警察よりも厄介なのが賞金目当てに集まってくる賞金稼ぎだ、真つ当な者は居ないに等しい、金のために確定した犯罪を行う者を殺し生計を立てる、未確定なら生きて捕まえる、どのみち日本が送る厄介な猟犬だ。

時間をかけない爆破で始末しないのは非常に簡単に確実にやない。絶対に始末した後念入りに爆破させるのがヴィーナスのやり方だ。二階に潜む者が全滅したときに潜んでいた二人が手榴弾を捨てながら三階から飛び降りる、なかなかやる、爆発で熱源表示が不能になる。残った夜間戦闘用視界補助機器ナイトビジョンに切り替え銃撃のための場所取りに向かう、銃撃戦での位置取りは重要で特に都市では当たり前の知識だ。

一階に居たランデスの一組が銃撃するが敏捷で直ぐ様に反撃の銃撃を行い手に負えない逃げようだ。ただ、俺達がアパートの非常階段最上階からの射撃距離は直線で五十メートル、狙いを済ませ、二連射で追撃すると一人が被弾し倒れる、本来なら見捨て逃げる暗殺者であるが仲間を捕まえて近くの車両の陰に飛び込む。

「時間切れだ建物を爆破する、引き上げる」

「やるじゃないか、次会う時が再戦の機会だな」

「優秀で仲間思いか殺しにくいな」

撤退する、賞金稼ぎが集まり始めているどこに潜んでいるかわからない賞金稼ぎには手を焼く。

車両に飛び込みランデスが逃走用ルートを運送係が運ぶ、バックデスが徒歩で撤収し武器は回収役が回収した後に爆破担当者が起爆させる。

専用の弾丸から負傷者の追跡調査は可能で、弾丸の構造と比重などから人体などの軟体に着弾した際には弾丸が回転して「暴れる」ことにより体内に留まり、運動エネルギーの全てを対象内に開放することによって、単に貫通させるよりも大きなダメージを与えることができ、対象を無力化する能力、つまりマンストッピングパワーに優れている。またもう一つの利点として、ターゲット内で弾丸が停止することにより、跳弾やターゲットから貫通した弾丸による主に人質などへの二次被害の防止に繋がっている。採用される理由は多いが今回は時間切れだ。

ヴィーナスの襲撃から逃れた二人は追跡調査から暗殺者、その為にバックデスが居る。

ただ賞金稼ぎに嗅ぎ付けられた暗殺者が生き残れるほど那覇市は甘くない。

自由都市の本社に戻り報告を済ませる頃、生き残りの話は聞かなかった。生き延びた可能性がある。追跡調査員が送られる。沖縄には法の下に戦う警察に賞金稼ぎ、暗躍する非合法組織、闘争を繰り返す兵隊組織。那覇市は混沌の坩堝だ。自宅に帰還し即答で却下された遊びに仕方なしに訓練と学習の時間を過ごす。夕食が終わり頃携帯にメール通知がきて、表向きは李企業体の学生メディア部門

の社員、妻はその護衛の警備部門の社員。

表向きの月給が二十万、二人で四十万、組織からの基本給が二十万で二人の四十万で月給合計は八十万、年収九百六十万、約一千万だ。学生のためそのままの手取り。

家計簿を作り前金で年収分を受け取ったため現在の財産は一千九百六十万。生活費はかからない、全て李企業体が持つ丸儲けだ。

李企業体が送る最新鋭の学生ニースを見ながら防犯装備の購入品をリストアップする。

「民間用拳銃の防犯仕様、李企業体のバードボラー・ハンティング・ピストル、通称ジャベリナを一つ、コンシールド・キャリーのグロックを一つ、電気警棒はあるからこの二つだな」

「私はグロック二つでいい、ただし弾薬は民間用焼夷弾にしてくれ」

「オブシヨンの赤外線照準器はどうする」

「当然取り付けよう」

「じゃ八品だな」

「日本円でいくらだ」

家計簿に額を記入する、ジャベリナ、グロックの民間仕様の拳銃が合計百万、弾薬費が五十万、オブシヨンが二百万。合計三百五十万、妻が注文し直ぐに運送係が品を運んできて支払いを済ませ、品を受け取る。ベランダにある簡易射撃訓練場で試射し、当たった瞬間弾丸は貫通することなく爆発しながら燃料を放ち燃焼する、問題は無い。ジャベリはお気に入りであるがカスタムの必要があると判断し競業用のまでの改造を依頼し、グロックの試射が終わる頃完成し支払いを済ませた。民間用の弾薬を追加注文し、予備弾倉の支払いを済ませると一日の出費は四百万までふくれ上がった訓練後の学習を済ませ、頑張った後に熟睡。

4 / 6 日、月曜日。

朝方の訓練、腹筋、背筋、屈伸、腕立て伏せ、特別なことはないどこまで行っても訓練は地味だ。気づけば訓練する姿を妻が見ていた。相変わらずの美貌で人形のような少女だ。

「おはよう」

「おはよう」

挨拶して訓練に戻る、妻の方は美容法のヨガをしていた、一時間の訓練後シャワーを浴びる、妻の方もシャワーを浴びるのは長いかかると思いキッチンでサンドイッチを作って待った。

私服は当たり前だ、シャツにスラックスは同じであるが妻はボウタイをして脱衣場から現れる。俺が作ったサンドイッチに文句を言わず小さく食べていく。俺も食べ始める。今日までは時間があるので遊ぶ予定だった。運がないことに仕事が入った。携帯での通知で機械装甲服を収納するハンガー区画までくるよう指示があった。

「こりゃ転属かな」

「時間まで余裕があるが先に行くべきだろう」

情報収集の仕事に使う道具を鞆に入れ背負い、妻の方も同じく背負う。防犯用品も一応身につける、区画の場所までは距離があるが迷うことはない。時間より先に到着し、通称アーマードと呼ばれる機械装甲服の見本市のように広がる機体を見る。

ハンガー区画には旧式、最新鋭機を一万服収納する程の容量があるが訓練や警備任務の機体が多い。エリアの方も興味があるよう

で時間を潰す事には事欠かなかった。連絡がまたは入り、ハンガー区画の装備を収納する場所に来るよう指示があり向かい到着する。そこには集められたラヴァーズの組み合わせが並んで居た。最後だったらしく時間通りに説明が始まった。

「これより強化手術を行う、遺伝子を弄り休眠遺伝子を呼び起こす科学的現象を操る能力を勝ち得ることになる、断って置くが選ばれたのだと勘違いしないことだ能力を得ても拳銃で撃たれば死ぬ、単に個人としての能力が高まったに過ぎない。以上」

簡素な説明後、識別番号の入ったペンダントを受け取り全身防護服のヴィーナスの医療員につれられ医療区画に移動した、ポットと説明された人を収納するカプセルに入れられるその際に衣類は外し気になるなら専用の下着を渡すと言われ大半の者に身につけた、俺としては別に隠す必要もないので堂々と裸になり何かの液体の入ったカプセルに入った。

実験段階から実践投入段階に移行した事を説明され能力が与えられた。ただ体質なども影響されるようで多くの能力を投入されたタイプも存在し俺が説明を受けたのは身体の生体電流を制御する能力、雷を自在に操る能力正式名称ヴィシユヌが最初に投入され、次に生体放射熱を制御する能力、炎を自在に操る能力正式名称アグニ、三番目に可聴域外の声帯放射を制御する能力、超音波を放射する能力正式名称ヴァーユを投入された。三つの技術を投入したがまだ可能であると判断され四番目の能力生体強化、赤血球内のヘモグロビンを一度に酸素を三個運べるようにする。単純に筋力が向上する後に説明を受けた。アクシデントもなく遺伝子調整から様々な医療行為を受けた。

能力は磨かないことには意味がないので専門の訓練を受けながら能力の実験に加わっていた。

7 / 1 日水曜日。

訓練が終わり自宅に戻った日だ。妻の方は治療と呼んだ方がいい知らされて驚いたが末期ガンだったらしい全身に転移し余命一ヶ月、それを組織ヴィーナスがガン細胞制御技術を施術した。

能力そのものを恒常的に動かす場合は定期的な投薬治療がいる。正直妻が痛がる顔はなかった、末期ガンになれば引き起こされる激痛によって日常生活は困難、薬を飲まないといけないが妻は我慢していた。

「恒常的能力デメテルか、俺が四重適正者の強化兵、恒常的にジークフリートを使っているのと同じか」

「これで子供が産める」

妻が諦めていた出産は寿命の拡大により可能になった。より元気になる李企業体の趣味人が集まるフェンシング部に入り剣の腕を磨いていた。俺の方は四重の能力の学習と訓練だけで精一杯であるが、やはり定期的な治療を受ける必要がある能力の行使による体力の枯渇で各種栄養剤からの高純度栄養摂取が必要だそうだ。

やる気満々の妻に押されベッドインした後眠ってから起きた、そして気づいた。

「学校に行くの忘れていた！」

「話してなかったが長期休学を出しておいた六月までだ、今日はサボったことになるな」

俺が急いでシャワーを浴び制服のブレザーを着込みローフレームの伊達メガネを着けと慌てて支度しているのに反し、妻はノビノビと家事を行い始めて研究したらしい手軽な料理を作った。急いで

食べ、当たり前のことを話した。

「アリア、お前も学校行くんだよ」

妻がにこやかに笑いながら調理器であるフライパンで殴った。  
鈍いと音が立て続けに数発。

「何すんだ？」

「お前というな名前だけで十分だ」

「じゃアリア、支度しろよ」

妻が身支度をノンビリと整え高校に初登校する。外出時の仕事道具を持つ海上自由都市の第三専用区駅前の広場から三層の駅構内のモノレールに乗り込み朝から妻の買い物予定話、微妙な気分になる嬉しいが視線が痛い、この区は若い世代の勤め人が多く高校生にあげられる学生は少ない、モノレールの車内は昼の登校の学生が疎らにいる、午前11時、海上都市の中央七区の内縁に向かっている。

七区は六角形の区で自然発電所の発電区、市長が執務を行う行政区、司法機構が存在する司法区、議会がある立法区、教育関係の教育区、海上都市の研究機関が密集する研究区、中央に海上都市制御機構の制御区がある、中央七区は海上に浮く都市機能を凝縮した場所だ。

外縁に当たる住宅区、娯楽区、商業区、工業区、貿易区、海上都市からの本島に向けて唯一の陸上ルート橋がある橋区。来訪には手続きが必要ではないが居住には何重もの審査と調査の後認められる管理された都市。

反共は凄まじく、日本の常任入りが噂された。ただ厳しい審査で人口は制限され二百万人、学生は一割を占める。様々な資本が流れようとしたが日本は厳しく規制し沖縄県も規制し海上自由都市も厳しく規制した、裏資本が流れる隙がないと言われる程だ。

現実には裏資本が流れている。その攻防戦は凄まじく連日摘発の事件が格安で飛び交っている。

内縁と外縁は内海で遮断されており通行手段の車両の為の橋、その上を通り教育区に到着する。

駅の改札口で携帯での登校確認を済ませ駅前広場を通り半径一キロに広がるカメラや商店街を通る、アーケード街でもあるため三十番地を通り大学が並ぶ地区と高校が並ぶ地区の中間にある大学付属高校地区に到着する。案内板での確認後大霧大学付属高校に向かう。

学校は単一であるほど利潤がでない法令仕組みで一貫学園が基本だ。

全学校は株式公開制で学生の株式取引が行われている。海上自由都市の教育区の学生人口は二十万人、入学の際、説明される内容は学生市場独立保護機構通称ギルドからの連絡事項だ。

担任は海上自由都市公用日本語教諭の教師二十代後半の日系男性、ギャルソン・中島と名乗り二十五人の簡素な自己紹介後、教育区全体の説明、大霧大学付属高校の説明、ギルドの説明、そして副業と呼ばれる学生商売の説明、多岐に及んだ説明後、日系が半数、残った半数がインドを除く南アジア、中国を除く東アジア、東南アジア、オセアニアのオシアス共同体連合の多様な人種の学生が占めている。昼休みに登校したことを咎めことはなかった。

## 2 3

「よう新人生」

学生の制服は薄手の黒いブレザーで縁が白い、首元をボウタイでしめるが話しかけてきた男子学生はボウタイをしていない、そればかりかシャツが色物だ、ベルトは派手な銀色にチェーンを着けている、周囲の学生をみたがこの男子だけだ。

「泣けてくるねえ、病弱な奥さんのために休学なんて、その様子だと治ったのか？」

「誰だお前、第一頭大丈夫か、周りをみるよ」

アルアの言葉に男子は片眉を上げ片方の眉を下げる。困惑と思う

174

「アリアベルタ・デ・久志、暴言を吐いたのが妻のアリアベルタ・デ・フィーナ」

俺の自己紹介に男子は一応何かを納得する。

「俺、俺 羽織、ま、よろしく」

「ああよろしくヒート」

俺があだ名を言おうとすると、アリアのハイキックが後頭部に入って鈍い音がする凄く痛いため気が遠のく。周囲の生徒は啞然としていた、殴打されることに慣れたのか意識が回復する。

「私がアリアならベルタと名乗れ」

「いやだつて通称だろ？」

「だめだベルタで通せ」

アリアの剣幕に押され。不承不承頷くしかない。

「ベルタだそうだ、今まで一度も名乗ったことのない新通称」

「お、おう、よろしく家庭内暴力の相談か？」

アリアはカチンときたらしく何か言おうとする。それを止めように一人の女子がアリアの肩に手を止めた。

「俺はこんな奴だから、喧嘩腰にならない方がいいよ」

亜麻色の髪のショートヘア、親切な女子、勝ち気そうな印象で可愛い方に入る美人の範疇にいる女子。

「そうだなアリアだ」

尊大な物言いであるが感謝の感情が宿り穏やかな言葉に聞こえる、周囲の生徒がオヤと言う風に見ている、差詰め俺は付属品か、まあ話しかけた男子の俺並に没個性の顔立ちだ。

「竹葉・フォルネーゼ・優香、竹葉でいいから」

「二度目だがベルタ、委員長は誰だ席の確認を担当することになっっているが」

「委員長と副委員長は日替わりだから、今日の当番はそちらの俺が委員長そして年上志向の友近が副委員長」

名前を呼ばれた男子が片手をあげる、挨拶はそれだけ、俺が席に案内する。五列あり男子の列と女子の列が交互にあり最後の列は混合だ。その最初の席が俺、後ろがアリア。アリアは俺が一発で嫌いになったらしく、近づくなと目で威嚇している。危険を冒してま

で話を続ける事はなかったアリアの隣が竹葉で俺の隣がノーフレームのメガネをつけた大人しそうな女子、挨拶すると軽く頭を下げ俺が名乗る。

「三度目のなれない挨拶ベルタ」

「伏見 千年です、千年と書いて千年」

落ち着いた性格のようだが興味があるようにアリアをみる。

「学生結婚ですか？」

「気丈でね、病気のことは知らされてなかった良くある話だよ」

「学生の他にご職業が？」

「李企業体学生メディア部門現場取材員」

「副業というより兼業ですか？」

「その割合が強いか業務時間は放課後の五時から十一時までの六時間勤務」

「質問ばかりで申し訳ありません、何かご質問は」

どうもデスマス口調の女子のようで丁寧な物腰だ。質問とは一応ある。

「初登校なのだけど、このクラスに生徒会関係者いるかな、取材の許可がほしい」

「あ、私に関係者です会計員ですけど」

「じゃ伏見さんギルド関係者は」

「庵君と竹葉さんです、二人とも情報部の追跡調査員です」

「そっかありがとう、色々助かった、クラスの生徒会関係者は他に居る？」

「大久保 昭之君が警備隊隊員です」

「取材の許可申請は、生徒会に提出しないといけないはず、だ

よね」

「あ、はい」

「伏見さん頼みというか取材許可の申請書、確認してもらえかな」

俺が会社から渡された懷から取り出し、メモリーを渡す、伏見がノートパソコンに接続し情報を確認する、問題はないようでメモリーを外し返す。

「問題はないですが、時期遅れではありませんので短時間で終わると思います」

「ありがとう、じゃ、生徒会に行つて来るか」

席を立つて教室から出る、二階にある一年生の教室棟、三階に二年生、四階に三年生。五階に生徒会関係と屋上にある学生市場独立保護機構のギルド支部がある。五階に到着し生徒会の間取りを確認する一つの階を丸々使う重要な施設群で、許可を取る場所は副業許可役員室らしくそこに向かう。申請書のメモリーを提出し正式な学生社員となる。

手続きで学生メディア現地取材員として登録され学生証を受け取る。

大霧大学付属高校のギルド関係者、生徒会関係者の公開されている名前を手帳に記入し一年十組教室に戻る。

昼食を食べたので問題はないと判断し、一階の購買部で学食のパンを購入し、自販機からミルク入り珈琲を購入して教室に戻る。入るときに友近と俺の二人が話しており挨拶をする。

俺は脳天気なムードメイカー兼トラブルメーカーな感じ。竹葉が言った年上志向の高校一年生の友近は俺と違った意味での平凡な

少年だった。

「友近 ホイ、こう見えても中華系の華人だ」

「四度目の自己紹介アリアベルタ・デ・久志、通称が慣れないベルタ」

「すげえ美人さんの奥さんが人生順風満帆だな」

同じ事を前言われた、そいつは中学の時に分かれたクラスメイトの言葉だった。俺の経験から適当な返答後席に戻ることにした。

「だといいな」

手を振り席に戻る相当暗い顔をしていたのだろう、アリアの手が背中に触れる。わかってしまうこともある、若いとか歳をとったとかとは違う何かを守るために何かを捨てた、捨てたものがとても自分の中で大きなモノだと気づく時それが学校という場所だ。

失った平和の担い手は薄暗い闇に潜む組織の兵士だ。

明るい要素などはない。多少落ち込む。

「どうしたヒート」

「いやな人生の末期は意外に明るいと思つて」

「泣きたいか？」

アリアなりの冗談なのだろうどこかでブレーカーを落とさないとヒューズが飛ぶ。

「酒、煙草、女、この中で一番の良薬は」

「妖しいのが女で、美味しいのが煙草で、旨いのが酒だ」

「晩酌してやるからそんな顔するな、暗いぞ」

「大事なもののために捨てられるか？俺は捨てた」

「現にヒートの側にいるだろ、離れないから安心しろ」  
「そうだな」

俺は恋も愛も知らないが優しい心遣いは理解している、耐え難い苦痛の中にも顔色一つ変えない少女は非常に優しい。声色も優しい響きだった。だからこそ返す言葉がある。

「今日帰ったら結婚記念日を祝おう」

「結婚記念日は来年だがワガママを言っていていいか」

改まっていうので振り返って目を合わす。その時周囲の目線が微妙に泳いでいた。

「海で泳ごう」

「わかった放課後、沖縄県に向かおう目指せ海」

俺の返答でアリアの顔が艶やかな微笑みになり、上半身を動かして俺の顔を両手で固定する。その後に引き寄せ愛しそうに抱き寄せた。

「甘い時間ね」

「甘いですね」

外野の二名が羨ましそうにぼやく、すでに二人の世界に突入している為に外野のぼやきにしか聞こえない。昼休みが終わり、お隣の伏見、竹葉の二人が午後の大学部の講堂での授業をわかりやすく教えてくれた。ある意味安心感を買ったのか相談が寄せられた。

クラスの男子の友近から相談で年上大学生に告白したいとか、妙に相談役になってしまっていた。アリアの方は性格もあるだろうが相談役だった。放課後の時間、友近に付き合い告白らしいイベント

トに参加する。落ち着かない様子の友近は年相応の少年だった。告白相手らしい女性はモデルのような女性であり正統派の美人だ。

「こんにちは」

挨拶からして好感が持てるが俺的にはすでに終わったといえるだろう、友近を一別しなかった。告白する相手が友近だとわかって言っているのか単にネタ集めの一環でいる俺に興味を持ったのかは知らない。

「友近、はっきり言っていいか」

「仕事がありますのでサヨウナラ」

返答は簡素だった、最後だけ英語のような発音だったが、他人の恋愛が破綻する様子を初めて見た。友近は一言すら話していない。

「あれは無理だ」

「遅い、へこんだラーメンで食いに行くわ」

「一応アドバイスだが年下好みの女性にしておけ」

ゾンビの様に歩いていく級友を見送り、次の相談に向かう。伏見から同じクラスの同級生男子との橋渡し役を依頼された。人の好みは様々だが体格の良い東南アジア系の留学生。顔の善し悪しは知ったことではないので情報収集を始める。要は探偵のようなモノでアリアが交換のネタを受け取り、俺が会社で教わった情報収集の基礎的行為で集めた情報を元にその男子の相手は既にいた。またしても他人の恋愛が終わった様子を見た。

会社帰りならぬ学校帰りの放課後、アリアと商店街で夕食を食

べる。

「大将、熱爛二つと焼き鳥フルコース」

アリアから注文を受けた焼鳥屋店長は微妙な顔で言葉を返し、ひとまず熱爛が置かれた。

「大学生に告白、一別もされず撃沈、青春なのか？」

「観た感じは」

「モデル業を営む十代最後の学生職、偉い美人さんでスタイルもよし、性格は知らないが挨拶からの好感度はあるが、友近が相手とは思っていなかったらしい、天然のボケとサドが混ざっていたナチュラルな鬼」

俺の特技暗記だけは得意だ。手帳に特徴とバストアップの顔を描く。見た目からの一目惚れだったらしい。年上志向はあったがオロオロし落ち込む様子から今頃やけ酒か暴飲暴食は決定だ。アリアが熱爛での酒を注ぐ様子はとても女子高生には見えなかった。

「ありがとう、聞くがヤケになれているな」

「アリアベルタ家の家系を辿れば第一次世界大戦前の日本海軍将校とロシア外交官の家系の行ったり来たり、北海道系の日本人とチエコト系住民との結婚、そんな話がイヤになり十二の時組織に頼み沖縄県の海上都市で整備員として働きながら自立していた」

「そして先輩後輩の関係からのお酒のお酌係？」

アリアが懐かしそうに話すが四年前、現在の円経済圏自治都市の前身である海上自由都市が一般の公開された。反響は日本の技術力を世界に誇ると開発者が言った、新コロニー計画から生み出された自由都市は現在量産化に向け中央部、外縁部の開発が日本領の海

域で建設されている、

それが戦争や紛争の火種にならないのはそれを守組織が凶悪だからだ。

三年前自由都市になったクーデター時に国際企業としての立場を明確に表した学生資本と呼ばれる学生の資金が国際超企業体を生み出した、それが李だ、情報を司る立場で様々な組織に提供する中若手上級幹部の武闘派で知られる李のオーナーが当時の都市で大規模な事件を起こした。

一言で説明すると犯罪に関わる者を震え上がらせる爆破テロと暴露生放送、日本政府の警察が隠蔽した裏金資金ルートが世界に公開された。最悪なことは当時の事件の影響で自由都市の警察機構は二つになった。それだけならまだ敵対する組織はあった。二年前、日本警察機構の全施設を同時爆破した、その理由は自由都市で一区画警備隊の皆殺しに関わった警官の行き過ぎた法の狂犬へのお礼参りだった。

その事を恨みに持つ警官よりも理性的に考え、自由都市の表も裏も大規模な組織は干渉しないことになった。

当たり前だが本来なら戦争物だがあまりにも被害が大きすぎた。その当時に自衛軍が出動し警察に施設を提供したほどだ。酒の話は尽きなかったが自由都市になってからの血生臭い闘争や暗闘の裏話をするような高校生も珍しいだろう。

アリアが酔っぱらわない質らしく全く酔わない上によく食べる、店長が品切れの項目を作ったほどだ。店を追い出され自由都市から沖縄県那覇市に向かうモノレールに乗り込み夜の沖縄県宜野湾市北谷のビーチに向かう電車に乗る。

治安が悪いことで有名な街でもあるがもちろん李の社員に手を出そうというお馬鹿な連中はいない、居たら李の警備兵に捕まり浜

辺にはいることになる。入るとは文字通り入る、首だけを出して助かるまで海水を沢山見ることになり、今まで李に手を出して不幸の度合いにもよるが禁固刑に処された上に李の圧力で首になった連中は多い。

関わりたくないと思われるらしくビーチである意味安全の空白地帯で海水浴をしていた。

泳ぎ疲れた頃に不幸な現場を発見する。日本本土からの男性の旅行者が兵隊に脅され穴を掘っていた、警官は居るが介入できないために見守る、馬鹿をするとどうなるか街で暮らしていれば詳しくなれる。

仕事が入り緊急を要する特一級扱いの仕事だ、どのみち帰る予定なので電車に乗り現場に向かう自由都市に到着し第三娯楽区の到着する。専用区が近くにあるため治安が最高にいい区で学生が集まる街でもある。現場は人気のない裏路地。現場は李企業体警備部門の警備兵が封鎖していた俺達が社員証を見せると通し、碁盤目状の建物に倒れるように二人の成人社員が倒れていた現場を仕切っている警備隊の隊長に話しかけた。

「一体何が？」

「さあな、通報で社員が倒れているとあつて駆けつけたが、倒れている社員の死因は出血死だ、だがみでの通り血はない、訳がわからない通報した学生も、裏路地で一息つこうとした単なる通りすがりだ」

「吸血鬼？」

「と言うしかない、嗜血病という病気があり血を飲まないと精神的に安定しない病人もいるそうだ、どちらにせよ猟奇殺人だ」

手帳に書き込んだ、事件というモノだ。その後二つの警察が現れ現場検証をする俺達が特一級の命令の上で行動しているので情報を提供してくれた。それによると電気ショックで失神させ薬物で無力化した後血を飲み干したもしくは持ち去った。人体の血液は通常六リットルそれが全部なくなり異常な犯罪というしかない。証拠と思われる指紋を見つかっていない犯人は証拠を完全に消し去ったと思われる。

集まった情報を表と裏の上司に報告した。報告の後返答があり専用区の対策会議に参加するように指示があった。警備隊が車で送ってくれということで助かり専用区の自宅に戻った。

「気づいたか？」

「何がだヒート」

「顔を覚えている強化兵だったそれ以外は知らない」

「つまりヴィーナスのラヴァーズのジーンネイターだ？」

「少なくとも遺伝子調整者であることは確かだカプセル識別番号？M-111、片方は女性だったので知らない」

「それで特一級指令か、頭文字の意味は一番目の魔術師だ、そうだと会議場に向かうぞ」

私服の着替え、外出用の道具を持ち専用区の会議場に向かう。

会議の場には情報部の代表者が集まっていた。当たり前前にヴィーナスの下級幹部達だ。下っ端の情報役が集めた情報を纏めたメモリーを配られた。会議現場に集まったのはジーンネイターと呼ばれる強化兵だ。

会議の始まりの前に下級幹部の纏め役の現場総責任者で李企業体の虚社長が現れて始まる。

「今回の事件はジーンネイターのラヴァーズが吸血され死亡し

た」

「電気ショックで失神させ薬物で無力化した後、血を飲み干した、もしくは持ち去った、事件は猟奇的と言うしかない、証拠はないが被害者の行動時間から分析された」

メモリーに記録されていた。被害者は学生社員で最近の学生副業調査を行うため第三娯楽にいた確認がとれた時刻は発見された時刻との差は二十分、可能とされる吸血法は特殊な吸水機での作業、現在可能とされる道具を探しているそうだ。

被害者の二人の識別番号は？M - 111、？M - 511共に一番目の魔術師で番号は調整番号、投入された能力は一つ。テング、可視光線を生体電磁場で歪め姿を消し潜入する能力、役割はラヴァーズのナイツ・オブ・デスのバックデス。暗殺の専門家だ。

ヴィーナスは知られていないため殺し屋の誓約と言われている、それによると犯罪者を殺すための犯罪組織であるが真つ当に生きている自由都市市民からは応援サイトまである。つまり嫌われている暴力組織とは違う、事件の結論は心当たりがない。銃殺なら色々かわかったが殺害方法は特殊な機材での吸血、犯人を絞る事が難しい。ちなみに現在ジーンネイターが組織で分散しているが能力タイプからの役職になることになっているそうだ。

自宅に戻る、テレビでは李企業体学生メディア学生社員が猟奇的に殺害されたことが報道されている。吸血鬼の犯行だと主張する者は居なかったが吸血事件と銘打たれ様々な関連情報が放送されていた。夫婦で作った情報サイト自由都市事件史で公開しているいい情報を記載した。

直ぐに反応があり特殊な道具を作るよう依頼された町工場の職人

がいた。電話番号がかかれていたので直ぐにかけた。

「こんばんは情報サイトの管理者ベルタです、オリエタさん？」

「ああそうだ、犯罪に関わりたくないが、仕事上で作った高速吸水機だ図面があるから買い取ってくれないか？」

「言い値で買います」

「助かるよ注文を受けたのは六月三十日、昨日のことで、徹夜し作成したが機材には欠陥があると後でわかった、濾過器がない何分いきなりの仕事だったので部品の組み立てで忘れたらしい、だが事件に使われたなら必要ない部品だったのだろう、被害者には申し訳ない」

「いえ、今回の事件は常軌を逸しています不幸な事件ですが、確認したいのは注文の方法はネット依頼？」

「ああそうだその線の証拠なら警察にしる、李にしる、直ぐにわかるだろう図面と携帯での決済をしたい第三工業区の駅前にきてもらえるか」

「その前に警備隊に連絡し保護しますいいですか？」

「感謝する」

交渉が成立し警備隊に事情を話し、俺達夫婦も車で運ばれた。

警備兵は迅速に展開し第三工業区を制圧する。駅前での携帯の確認で駅前に大学を卒業して二・三年の技術者が現れた。

「オリエタさんですね」

図面は二つあった、一つはメモリーにある図面、一つは紙に印刷された図面、法律で二つの図面を保管することが義務となっている。二つを買い取り第三工業区の継続した制圧を行うことが命令として下された。専用区に戻る車の中で現在の表裏の上司に連絡した。

「編集長ですよね？」

「そくだ証拠を手に入れたそくだな買い取り値は必要経費で落とす」

話している途中で通話が途切れた。赤信号で車が止まっている、深夜の道路は当たり前になっている。エリアに話しかけようと思ったら窓かひび割れ運転手の頭部を何かが貫通した。

とつさの判断で車からアリア抱き飛び降りる、全速力でアリアを抱きかかえながら狙撃されないよう飛び跳ねながら近くの建物に突入する証拠を確認しながら外を見る。

専用区近くの工業区の十字路、周囲には工業系の建物が並んでいる。道路は狙撃の危険がある。深夜のため残業中も一般人が建物にいたるぐらいだ、ただわからないのは狙撃を可能とする銃弾では特殊防弾硝子を破壊できないことだ。現在の主力戦車に使われる積層装甲の廉価版が使われ無反動砲でもない限り傷一つつかない。

「熱源探知を使え」

「悪いが周囲の人が多すぎて意味がない、弾道の軌道から真横だ、つまり反対側、俺の能力で把握する前に場所変えたジーンネイターだろう」

「馬鹿なヴィーナスを裏切る奴はいない」

確かに一理ある世界展開する国際超過激派犯罪組織だ、表でも裏でもアジア圏では国家をしのご最凶の組織だ。裏切ればどんな悲惨な目に遭うか分かり切っている。

俺の能力であるアグニでの熱源探知の限界からの一撃はジーンネイターだと推測されるが可能とする道具があれば確かに事足りるが組織を裏切れば待つのは破滅だ。

通信機類は妨害電波で使用不能、連絡で到着の遅れから妨害を受けていると判断されアーマード機工兵が現れるのを待つしかない。

「援軍を待つ」

「いや対策はある二手に分かれる同時に動けば相手の戦力が単一以外だと判別できる」

「功を焦るな相手が打って出る今がその機会だ」

痺れを切らしたアリアが飛び出る、仕方なしに俺も飛び出る、二手に分かれ専用区に向かう。

一組の男女が現れた、片方は白髪 of 褐色の肌、東南アジア系二十代前半の中肉中背の男性、女性の方は黒髪の長髪、陶磁器のように白い肌が特徴的な判別できない人物。

男性の方が手を突き出す、一瞬で何もない空間が弾ける様に衝

撃波が生まれ俺は歩道近くの車を盾にした、反対側のエリアは衝撃波の中に突入する。二弾目の攻撃で空間が弾ける、単調な攻撃だと判断し俺も攻撃する、ヴィシュヌの発動で雷が駆け抜け生体電撃の一撃を男性が片手を振るうことで無力化する、どうも大気そのものに干渉する能力のようだ。大気中の気圧変化で今度は銃撃をするが同じように無力化される。力の桁が違う。拳銃を撃ち続ける足止めするその間にエリアが駆け抜けていくままと足止めされ。

拳銃をしまうそして向かっている反対側の道路に向かって歩き出した。夏の沖縄、その夜空の様子がおかしくなりある程度離れると電流を流した。ヴィシュヌの能力は動物という電気ウナギ、同じような能力で生体電流になる。電力はプラス電流に変換して放出する静電気になって帯電していく、ざわつく地面、雨が降り始めた、大気を干渉する能力のメカニズムはどうあれこれでは能力を教えるようなモノだ。

いかなる者も打ち砕く嵐の軍勢を束ねるインドラの鉄槌が振り下ろされるのを待った。巨大な閃光が走り。落雷のメカニズムは単純だ、地面にある正電気と雲の中にある負電気が結びつく相手の二人に流された正電気が二人に帯電し誘発された落雷が落ちる。自由都市の電力を賄えるほどの何十億ボルトの雷だ。落雷の衝撃で地面が抉れ、爆音で周囲の硝子が破碎した。

だが落雷の中心には被害がなかった、女性の方が何かの能力を使い防御していた。だが明らかに能力の行使で疲れているのか息が荒い、男性の方は女性が張り巡らすシールドの中で攻撃を行うべく飲み物を飲んでいて、紅い、血だ。

ただ疲労したのは俺も同じだ二発目の落雷を落とせるほどの能力はない生体電流を作る体力が枯渴しかけている。悪天候の中天翔ける騎兵が到着した。李企業体が開発した対地ガンシップ、重武装

へりだ。改良されエース級のパイロットが最新鋭のアーマードを着込み二機が降り立つ。通称レイヴンズと呼ばれる現代の歩兵だ。

「ヘイ、ボーイ、倒せなかったのか？」

通信機能が戻っていた。頸骨無線通信から声が流れる。返す言葉をつぐほどの体力がないため短く嘆息した。

「戦闘の専門家の動きは違うぜ、狩るぞ」

重武装のガンシップに装着されている対地ロケットが発射される、それを女性はシールドで防ぎおそらく強力な電磁場のシールドだ、爆発からの爆風が大地を薙ぐそれを男性が無力化する。

まさに完璧な防御力だ。二機は機械装甲服の会社としては大規模な国際企業の機体を装着していた。重量級の亀さんの愛称で知られるクレスト社MRシリーズの最新鋭の作品08、地对地の垂直発射ミサイルを発射する、雨の中を白い発射白煙を残し片手に持たれた無反動砲を標的の二人に向ける。

「死んどけ化け物」

暴言と共に放たれた第三世代主力戦車の複合装甲を貫通し爆発する徹甲爆裂ロケット弾が爆音と共に迅雷の速度で飛び出るがシールドで無力化する、爆発の熱波と爆風の衝撃波を男性が無力化する。さすがに啞然とする。重武装ガンシップのロケットを無力化し現在の装甲技術では防げない攻撃を防いだ。軽く笑える。

「ヘイ、ボーイ、正気か？」

「俺を回収後離脱しろ本物モンスターと戦うには役不足らしい」

「悪いな体力があるなら離れている垂直ミサイルが落下する」

「勉強が足りないな相手は電磁場を操る、当に無力化されていると言っわけだ」

「なら火力で圧倒するのみ」

ガンシップから12・7ミリの重機関砲が二人に向け銃撃するが連携で無力化される。地面の二機が発射できる垂直ミサイルのポットを投擲し接近戦は危険と判断したのか片方の一機が間隔をあけ徹甲爆裂ロケット弾を発射する、ミサイルとロケットが接触し死の爆焰と熱波の衝撃が目の前で起きるが二人は防ぎきった、そして二人は可視光線を歪め逃走した。

回収された後尋問を受けた。

「最初に狙撃を受け運転手が即死、次に二人で近くの建物に待避、次に二手に分かれ先手を打つその後ヴィシュヌを使い落雷を落とした、そこで体力が尽き救援のガンシップとアーマード二機が到着し攻撃したが効果はないそんな馬鹿な話があるかと言いたいが現実には無力化される映像を見た、あの二人の能力は大気の気圧を変化させる能力が男性、電磁場を操る能力が女性、私見でいいどの様に対応するべきか？」

「わかりませんよ何でも有りのような防御力ですよ、詳しくは科学者から聞くべきです」

「だが君の攻撃は的確だった足止めに拳銃を撃つその後には必殺の落雷を誘発させた何か対策はないか？」

「無駄でしょうね、電磁場を操る能力で可視光線を歪める能力の土台が違う」

「そうか、これは冗談ではないが二人はナチュラルだ」

「ひでえ冗談だ先天能力者？」

尋問した組織の下級幹部は頷いた、最悪だ。人工的な遺伝子操作と調整の能力それを辿れば先天能力者の遺伝子を見つけないといけない、俺の教育を担当した科学者の小母さんが説明した。

強化兵は確かに遺伝子を改良し能力を得たが、先天能力者能力を持つために自在に操り、その上に何の負荷もない。まともに戦えばどうなるか分かり切っている。

下級幹部が言いにくそうに本題を切り出した。

「君にはセンスがあるようだアンチ・ジーンネイターの付与を受けないか」

「意味がわかりませんが」

「つまり対強化兵手術だ、相手の能力を妨害する能力」

「俺に死ねと？」

「もちろん危険はある、しかし、組織としても必要なのだ」

妨害する能力は強力だが反面強力すぎて制御に失敗すると即死する。大きなリスクを負うことになる、さすがに死ねを組織も命令できなかったらしい。

「妻は何と？」

「君に一任すると話した、言いにくいが、彼女はエリートの整備員だ、有効な組み合わせだと判断している、君の価値は能力でも彼女は必要とされている、我々としては君だけに手術を施したい」

「ダンディズムではないですが承諾しましょう、俺一人で十分ですただ妻の能力が無力化されることはないですよね」

「それは安心してくれ、恒常的能力の無力化までは技術的に不可能だ君と奥さんをアンチ・ジーンネイター戦闘捜査員として一つの課に所属させる、成果を期待させてもらう」

会話が終わりヴィーナスは自由都市に必要とされる組織だ、その進んだ技術が多くの人々を救ったことは知っているがさすがに冗談がきつい。五番目の能力を付与させる事は厳しい審査がいる。それを行わず手術の遺伝子調整が行われ戦闘能力を向上させるためにブーストと呼ばれる能力そのものを高効率にする制御、出力、消耗の三つを高い領域に持ち込む最先端技術が施された。

目覚めると病棟にいて生命維持装置に繋がられ、覚醒すると俺の前担当者の小母さんが現れた。体重が百キロに到達する肥満体、常にハンバーガーを食べる自称アメリカ美人。

「坊や、起きた？」

「ここは現世だな小母さんみたいなメタボ科学者がいる」

思いつきリド突かれた、俺が黙ると説明を液晶画面に介した映像で伝える。

科学者の中でも強化兵技術はふざけた愛称を持って親しまれている、第一の能力ヴィシユヌはジオ、第二の能力がアグニはアギ、第三の能力がヴァーユであるがザン、どれもゲームの単語だ。第四の能力ジークフリートは体力アップ、第五の能力はハイクオリティ、雷撃ハイブースト、火焰ハイブースト、衝撃ハイブーストとも呼ばれる第六のアンチ能力ヒュプノスは痺れ大波動、神経麻痺ガスを放出する能力だ。

「坊やは希な能力を持っているわ??カテゴリー」

「何だよ、それ」

「早い話が十二個の能力を付与できる遺伝子適合者、最近発見された遺伝子なんだけどね」

「後六個か？」

「そうよまあアンチ・ジーンネイターの多くが？カテゴリーの遺伝子適合者なのだけどね」

「つまりサンプルな訳か？」

「まあ遺伝子は採取したけど結局は先天性遺伝子の話で、後天的遺伝子改良を受け付けない複雑な遺伝子配列な訳、案内するからついてきなさい、それと人前で裸になるのはやめなさい聞いたわよ遺伝子調整の時真っ裸の強者がいたなんて恥というモノを覚えなさい」

「久しぶりに小母さんの小言を聞いた、やめとくから小言は勘弁してくれ」

小母さんが重々と頷く、俺は時刻を確認したが深夜の四時だ。案内され通された区画は新装らしく真新しい道具が置かれ第一課から第四課まであり俺は第四課学生班。課長らしい人物がノンビリと煙草を吸っていた、それに小母さんがキレ、激怒した凄まじい追求を受け課長は必死に謝り禁煙されたあげく学生の面倒をみるための勉強会に参加することを義務付けられた。

嵐のような小母さん、井口・タイタ・アニーアが正式な名前で

も何というおうとも下級幹部ですら礼儀を覚えるしかない小言小母さんだ。四十に入り周囲の煙を吸ったために危うくガンになりかかったため煙草が大嫌い。がハーブの煙草を愛用している、反則的な趣味だ。

「大変ですな課長」

「その内禁酒まで言い渡されかねない、稀有な遺伝子を持っているそうだが、ヒュプノスの反動を伝えよう」

と言ってもメモリーを渡され識別番号からの席で液晶フィルターの薄い画面を見ながら情報を閲覧する、現在開発されている能力は大別すると恒常的な能力、一時的な能力、限定された能力を無力化する防御能力、ヒュプノスに言われるアンチ能力は特殊な分類でヴィーナスの切り札だ。一番効果的な行使は直接接触だ。ただ神経毒ガスの欠点である無差別的な能力でもあり多用されるのは禁じられている。

同時に同様の種類の多重行使は禁止されている、発動に負荷が掛かりすぎることと下手すれば能力の暴走が発生する可能性がある。課の装備で高純度栄養圧縮剤、リミテッド反応を可能とする高性能機能白兵刀剣が標準装備。

課に妻が現れる、半端怒っているような顔であったが何も言わず刀剣の中で扱いやすく帯剣しやすいスモール・ソードを渡した。手続きを済ませ俺達夫婦がアンチ・ジーンネイター戦闘捜査員、正式名称は対強化兵捜査員として活動許可を受けた。

自宅のある下層既婚者区画に戻る。疲れから爆睡した。

## 25

7 / 2 日、木曜日。

一時間の睡眠後、五時から七時まで可能な限りの戦闘訓練、帰宅する七時に二人で風呂に入り俺の体力は持つが本来整備員の妻の体力は低いが気丈にも弱さを見せることはなかった。

風呂が終わり、俺が朝飯を作り弁当を作った後妻のマッサージをして一言も発しない不機嫌な妻の機嫌を必死に立て直していた。

「怒るなよ」

俺の声に妻の美しい顔から凄味のある声が出る。

「ふざけているのか？」

体が竦み上がる様な声だ。怒り心頭らしい。制服に身を包んでいるが会社からの正式な社員として李企業体学生社員制服である白い裾の広いシャツ、薄手の黒い色柄の縁が銀色の刺繍で背中から鎖骨を跨ぎ左肩に会社のエンブレムが刺繍される、右肩に学校のエンブレムがある。ボウタイは黒色でストラックスは右足に部署のエンブレムが刺繍されている。

非常に派手な制服だ、妻のご機嫌が斜めなのは俺にあり制服の丈が合っているので人形みたいな外見にハイソックスを身につけている。つまり機嫌が直らないと登校が怖い。

「リスクは分散させることが重要だ」

身長が同じのため上半身の顔からの視線が思いつきりあう。そ

の目つきからすれば後一步で爆発する。せこく点数稼ぎが効くような柔和な性格ではないことは百も承知だ。しかし、やっておいて損はない。

「それに能力の付与が重なると暴走確率が増える」

「すでにガン細胞が暴走しているが」

「それに能力の容量がある通常は四、最高で十二、能力の付与は慎重にした方がいい」

「そう言うことにしておくがアンチ手術の許可を出せ」

「俺の能力が効かなければ別の能力を投入した方がいい」

「効果的なのは栄養吸収だ、パワースナッチというらしい相手の体力の元である栄養源を強制的に奪う、必要性がわかったか？」

「初耳な能力だ、連絡しておこう」

妻の機嫌が一応建て直り、朝の登校になる、通信機器の鞆を背負い、防犯民間拳銃を右のホルスターに納め、課の装備のスモール・ソードを左に帯剣し制服が制服だけに珍獣のようにみられていた。女性の方は大人しめで左右非対称のミニスカートで終わっている。教育区に到着し付属一に向かう道程にある商店街での買い物を終え、アリアに手渡した。

「皮肉だな」

アリアが刻まれた文字の指輪に皮肉氣に口元を歪める。

「汝と我の分かつ刻は死なり、二人を死が分かつまで共に刻むか」

「皮肉というか限定品だった単品生産らしい」

アリアの機嫌がよくなる、嬉しそうに指輪を眺める、俺の方は銀色の鎖を腕輪にしているが同様の文字が刻まれ左右に宝石が取り付けられ珍しいのは鎖の部品のように小さくされていることだ。見栄え向上というより記念品だ。

学生社員の制服を着ているのはちらほらいるがラヴァーズの組み合わせは珍しく、さらに強化兵となると少なく、見る限り学生社員の恋人達の強化兵は二組程居た、俺達夫婦に興味を示し商店街の片隅にある露天バーに招く。

「藤堂・スティーブル、藤堂 和美」

体格のいい美少年、東欧圏の外見だ。少女の方は大人しそうな日本人。片方は南欧系と日本系の組み合わせだ。

「江東 瑠璃、夫のガロード」

名乗った方は気の強そうな少女、相方の少年は美少年にはいるがラテン系の少年だ。

「アリアベルタ・デ・久志、通称はベルタ、妻のフィーナ、通称はアリア」

「早速だが能力の説明を頼めるか？」

「私がヴァルナ、アイスブレイク、アイスブースタ、和美の方はヴァナーニ、アクアブレイク、アクアブースタ」

「ヴァルナーニか水と夜の神妃から水撃、ヴァルナは三界の王にして氷の王から氷撃、確かに強力な組み合わせだ」

「失礼自己紹介の途中です横やりは控えてください、現在は和美の護衛を担当する警備部門の学生です、和美は学生メディア現地取材員共に私立鳳学園に通っています高校二年生です、結婚してからは一年、質問は」

藤堂・ステイブルの自己紹介が終わり、社員証と学生証を見せる。少年の方が？C-101、少女の方が？C-501。一桁の番号は試作型の番号で人体実験の最初の学生であることを示す。

「試作型に多い暴走経験は？」

「ないと公式にはありますが満月が近づくと喉が渴きます、それは吸血衝動と判断されました、現在は投薬治療を受けながら通学しております」

意外だったが嗜血病患者になったのかそれとも元々か、それを訪ねようとするアリアが話題をそらした

「七番目の戦車という訳か、聞くが先天性のカテゴリーは？」

「標準的な四つです、ジーンネイターになって選ばれたと思いますか？」

「まさか単なる科学現象の個人能力だ先天能力者から遺伝子適合者に移植した、取り付けられた能力でしかない、強いて言えば武装かな、そもそも遺伝子強化計画の一環で発見された先天性のオリジナルからの遺伝子解明による技術的投与、要は贗作だな」

言い切った、アリアが完全に言い切ったため二組の強化兵はにこやかに笑う。

「私の能力はアグニ、ヴァーユ、ファイアブレイク、ウィンドブレイク」

「俺の能力はヴィシユヌ、サンダーブレイク、バトルソング、サッドソング」

江東の識別番号はガロード？H - 122、瑠璃？C - 522。

「炎と超音波に雷と、二つは何だ？」

「神経高揚と神経低迷」

「アグニが放射熱、ヴァーユが可聴域外の超音波攻撃、ヴィシユヌが生体電気、ヴァルナーニ、ヴァルナの仕組みは」

「ヴァルナ同量の窒素と酸素を化合させ一酸化炭素を生み出す際の反応熱はマイナスになるヴァルナーニの能力は体内液体の高圧放射」

「ええそうですね、アイスプレスにアクアガンとでもいう能力です」

「私の能力はただ一つデメテル、ガン細胞制御技術、夫は五つよ」

平気な顔で嘘を話した。それを全く疑わない四人は感心したよ

うに聞き入った。

「ヴィシユヌ、アグニ、ヴァーユ、ジークフリート、ハイクオリティ、ジークフリートは赤血球のヘモグロビンが酸素を一度に三個運ぶ、ワニの遺伝子、ハイクオリティは前項に上げた能力の高効率化能力」

「あの、防御能力がないと諸刃の刃になりますが」

和美が初めて話した、弱々しい小鳥の囀りの様にか細い声。

「そうでもない能力そのものをしっかり制御するなら、ダメージは受けないようにできる」

「まあ確かにそうですが不安ではないですか？」

「慣れかな」

俺の台詞に外国籍の少年二人は驚くような呆れるような表情で居た、相方の少女二人は実りがあつた会話に満足した様子でいながら時刻を示す。

露天バーの店員は不機嫌そうにグラスを磨いていた、全く注文がない、それに気づきノンアルコールカクテルを注文した。一応出されるが二度と来るなど店員の表情は硬かった。

飲み物を飲み干し支払いを済ませた、立ち上がった時、何かを感じた、その時にアリアが抜剣し横に一閃する、それを硬質な何かを受け止めた。馬鹿なと思う、リミテッド反応は三千度に達する超高温の熱剣身を受け止めるためにはそれを超える耐熱処理の道具が居る。それを電熱で観測する、人並みの大きさに女性のような形が、間接部が隆起しており電熱の量が異常だ。

「そいつは人間じゃない散開しろ！」

防具になる剣を抜き、構えながら後ろに回る、アリアは動かない相手を真正面から斬りつけるが全て受け止められ、耐熱の能力と冷却能力が高い人型の何かは、アーマードの仕組みに似ているが身長は一メートル七十センチ前後で敵意がないように立ちつくしている。

「私は人間です」

「アリア！離れろ」

「何が目的だ」

「マスターから用があるそうです」

姿が現れる李企業体技術開発部門の制服だ。ウルフヘッドのプラチナブロンドの後ろ姿からは女性とわかるが、電熱で見る限り流れている電流や発熱量は並のアーマードを凌駕する。

「付いてこいという訳か？」

「そうです」

「登校が終わってからでいいか？」

「時刻の指定はありません」

二組は離れて能力の発動と引き抜いた拳銃を構えている、どこかの変人が作り出した電磁迷彩で光学式視認の発見を困難にする機能だが装備らしい物は見あたらない。

アリアが離れると女性らしい人物は追跡する様子で旋回する。付いてくるらしく、付かず離れずの距離を維持して登校する俺達の高校に入った、学校には生徒会直属学生警備隊が存在し、学生や関

係者ではない人物の進入を妨害する、高校から追い出され途方に暮れるように校門の外で立ち尽くしていた。教室に入る、担任のギャルソン・中島が入る時刻に一応間に合った。

出席は携帯での確認を終えている、閲覧する更新された情報を見て、質問等をする、担任は慇懃無礼な対応で通し何故かアリアの顔は不機嫌だった。液晶フィルターに反射して写った顔は更新された情報で再来週に試験がある、前回の定期テストを受けていないため前期に試験休みの連休補習がある。

「あの女性か？」

「それもあるが連休が潰れた、せつかく予定を立てていたのに」

「連休どころか学生生活が潰れそうだエキストラが満載だ」

「それは痛い、この歳で長期入院はしたくない」

「それは俗称墓入りか？」

「人生の最終駅ともいうな」

会話が終わり午前中の授業が始まる。高校の時間割は八時から十二時まで授業があり、午後の一時から五時までの授業がある、一日八限の授業に授業がわからない生徒のため六時までの居残り自習がある、部活動は放課後から生徒会が機能する十一時まででギルドが機能を終わらせる時間でもある、つまり副業も十一時までだ教育区の常識であり海上自由都市の常識。

日本語の授業は現代用語の授業でもある、五十分の授業が終わる十分間の休み時間があるが科目によっては移動することになるが

それは午後に詰まっている。

「さてと、取材でもするか」

「決めたことがある」

アリアが話す、俺は独白から気づき顔を向ける。

「何だ？」

「昼休み、最初に話しかけるのは私だ質問は？」

真顔で脅迫されている気分だった、脅迫から強制、頷かないと殴られるアリアは独占欲が強いようだ。頷くと俺は組織が話した献身的な女性とはかなり差がある、初日から家庭内暴力だ。

頷くとフィーナは艶やかな微笑みを浮かべ、安心したように吐息を漏らす、その仕草まで絵になる美しく艶やかな表情だ。周囲の生徒は絶句している、話しかけた近くの男子の稲葉は面くらい、俺達二人のインパクトは十分だ。

「と言うわけだ取材しろ」

かなり尊大に話す、伏見に向こうとすると妻の第一弾の鉄拳が顔を貫く。凄く痛い。

「取材は私からだ」

「ちよつといいか」

「貴様に用はない、黙って震えている」

妻の尊大な物言い、かなり高圧的な返答、俺から視線を外さない稲葉は力チンときたらしく何か言おうとするが。俺が場を納めるために妻に取材用の手帳を開く、行動に満足したように大様に頷く。

「ひとまず弁当を食べよう」  
「そうだな」

弁当を食べながら必死に話題を探した。弁当といっても時間がなかったので冷凍品の食べ物だ、褒められる要素はない。食べ終わると取材だ。思いつかない質問なので事件について取材を行う。

「まず事件をどう思う？」

「吸血事件のことか？」

俺が頷く、朝方話をそらした事もありエリアは難しそうに考える、庵と竹葉、そして大久保の三人が集まる、立場というモノからのだろう。

「事件の情報交換か？」

「私達ギルドには直接は関係ないけど学生市場独立保護機構の情報部」

「説明しておくが武力で従わせるのは簡単だ脅せばいい、単純にした簡単な方法だ、ギルドはそのやり方を嫌う。情報部関連組織、金融部関連組織、社会部関連組織、政治部関連組織、法律部関連組織、経済部関連組織、ギルドと呼ばれる学生市場独立保護機構の組織は多岐に及ぶ。消費者保護機構、副業保護機構、学生産業保護機構が生まれ、細かい調停文章が承認され敵対する二つの組織と仲裁するギルドの下請け組織が生まれたことでギルドは調停者から調整者になる」

「それを円滑にする情報網に上げられた要注意人物や集団は学校が九十一校も有るため縄張りのように争う反面、協力して儲けよ

うと努力を惜しまない、教育区とその組織が裏の住人だ。ギルドはそれを排斥しない、予想された状況だからだ、むしろ問題を引き起こす側を懐柔し説得し裏組織の影響が最低限に収まる方針でいた、それは思うように儲かることができない裏組織にとって悲しいほどの現実的な対策だった。」

「裏組織が組織されるが手に入れた情報を元に手段になる方法の最終的な目的を無力化する。

不正ができないために金が入らないため、立ち消えて行く組織も量もやはり多い

昼休みになる前に弁当を食べるのはすでに常識化し、昼休みに食事するのは時間の豊かな上流階級か経営者になる中流層、下流層はのし上がるために遊んではいられない。

仕事部に言われる幹旋屋は上流層。生徒会に代表される自治機構は中流層、生徒会長や副会長は上流層、仕事の幹旋を受ける個人は才覚次第、独自の組合は中流層と下流層に跨る。

部活等の部員は傍らで副業をする者は多い、専念する部員も居れば、副業で一儲けしようと思う部員もいる、情報屋は下っ端なら儲からない、ネタを集め有料で提供するかネット番組に売り込む、どちらにせよ下流層だ。中流層になるのは独自のネットワークからゲリラ放送を行う放送屋、それはラジオでもネットでも手軽に行える金が即時にステータスになるわけではない何故なら学生にも好みもあり特徴もある、儲かるだけの商売人なら上流層には入らず、中流層の中間止まり、メジャーの様に奉仕活動を行わない者は単なる商人だ。

メジャーの様な商売の上流は儲けた分学生に還元することだ、還元する事は金だけではなく奉仕活動である無給での働きや委員、生徒会委員、部活動に対する功績、勉強の指導、商売の提供、上げればきりが無い非利益活動があげられる、ご理解いただけたか？」

大久保が長文を読み上げるように説明したが俺もアリアも知っていることだけに聞き流していた。

「それは知っている、事件についてのことだな、被害者は学生社員で最近の学生副業調査を行うため第三娯楽にいた確認がとれた時刻は発見された時刻との差は二十分、可能とされる吸血法は特殊な吸水機での作業、現在可能とされる道具を探しているそうだ」

手帳に書き込んだバストアップの顔を見せる被害者の二人は大学生で都立橘大学の二年生、年齢でいえば二十歳。二人が狙われた理由は不明だが戦闘になった二人の内、一人は血液を飲んでいた、地が固まることから薬物で保存可能にしたことは理解している。

「大学生の学生社員がお悔やみ申し上げるよ」

「知人ということか？」

俺の言葉に俺が疑問を投げかける。

「なぜ知人になる？」

「いやだつて電気ショックで失神させ、その後薬物で昏睡させと警察より聞いたが、知人なら接近しても抵抗されないだろ？」

「早計ではないか？」

「だけど説明はできるわよ？」

「ならこうしよう、ギルドの二人は知人の選で追う、俺達学生メディアは集団の線で追う、大久保健警備員は？」

「僕は少し違った視点から追おうと思っている、理由は学生メディアを快く思わない旧市長派の市民層、逆恨みしてもおかしくない」

「わかったでは明日の昼休み意見を交換しよう、俺は生徒会に聞き込みに行く大久保警備員協力を頼めるか？」

大久保が頷き、俺と一緒に生徒会に向かう、事件のことで目新しいことはなかった。ギルドの支部に聞き込みに行ったが確認された不良集団の関与はない。大規模な二つの組織が搦んでいる情報でも正直事件は利益が絡んでないことから調査されているもの、次の被害者を出さないことには共通事項が確認できず事件の突破口が見つからない。

李企業体はアジア圏の多民族・多宗教の国際企業だ当たり前に国際法に則った行動をしているが違法的なヴィーナスの一面もある。東洋人からすれば欧米の同世代はふけ気味に見えるのが基本だそうだ。教育区の駅からモノレールに乗り込み専用区に向かう。

巨大高層複合施設の中層にある技術開発部門に案内され一つの研究室に入る。中にいたのは一人の科学者の女性と案内した少女と  
思う女性と同様の外見に電熱量が異常な人らしき女性。

「お帰りギンナル、ガンダルヴァ説明を」

「私達は機械甲兵です。」

遺伝子強化計画と同時期に出発した機械因子強化計画によって生み出されたインヒルト・ジーンネイターです、平たくいえば人工的に生み出された機械因子先天性適合者」

「全然平たくない、機械因子とは」

「ナノマシーンです、我々は先天性であるため成長と退化を司ることができるのです」

「さっぱり話が見えない」

「もつとわかりやすくいえば人工的にウィルスを作成し自由に遺伝子を構築できるのです、ただ欠点として外見の成長や変化が起きても精神面での成長には繋がりません」

「人工的に遺伝子を生み出す存在か、遺伝子強化計画、機械因子強化計画、先天性適合者を人工的に生み出すのは数年後と  
思ったが違っようだ」

「アリアは知っているようだが科学的な知識を総動員しても不可能に思える技術だ。」

「そこなのですが我々は遺伝子を生み出す存在でもあります」  
「断る」

「いや何を？」

「要約すればヒートの精子と遺伝子配列の採取だ、??カテゴリーの遺伝子と精子が彼女たちの子供作りに役立つと判断されたのだ」

「俺に死ねと??どう考えてもアリアに処刑されるぞ」

「やはり断るか、まあいい、提案は他にもある、生みの親であり後天的な機械因子適合者の私がなくした若さ、見た目は二十代だが実際は四十代後半、他の後天的適合者は先天的適合者を持て余して一番若い私の所にきたが、教育者に向いていないらしく、彼女達の相手ができない、かといって見た目からの年齢は高校生だ、そして現在の事件に彼女達が関与することでのサンプルの採取が可能だと判断した、要約すれば保護者になってくれ」

「いいだろう」

「好くねえ!!甘い生活がガキのお守りで消えるのはイヤだ」

「安心しろ里親として育てる」

「一方的に進めるな!俺達が結婚して未だ子供もないのに先天性のオリジナル、しかも機械ということは生体のクローンだろ、危険すぎる」

「ヒート、子供はいいぞ、そして欲しい」

断固反対したいがアリアは切実な顔だ、科学者の女性も期待している、二人の双子は黙っているが提案したことは賛同なのだろう。

「自らの欲だけで育児をするのか？」

「いけないか？」

「それはエゴだ」

「だから何だ、彼女達が必要としている、私達も必要だ、彼女達の存在が家庭をよくする」

声は切実で慟哭の様に泣きそうの様に弱々しい声だった。だから答える言葉は決まっていた

「わかった」

答えたが俺に父親としての生き方は知らない、青年ですらなく彼女達の精神年齢や実際の年齢は同時期に発動されて生まれたなら一年にも満たないだろう、下手すればジーンネイターの実践段階の投入時期である四月上旬の話。生まれて数ヶ月だ。

「ありがとうございます、お父さん」

片方のガンダルヴァは冷静で淡々とした印象が深いただ感情表現が下手なのだろう、片方のギンナルは感情に素直、感情表現の下手な赤ん坊とは変な話だが勉強の必要性がある。

「人生どこで間違えたか、考える日が必ず来る、と思ったがそれが今日だ」

「育児の相談はよそでしてくれ、報酬というわけではないが、よければ調べて機械因子適合者なら因子を与えるが」

「先天性の適合者なら可能かもしれないが、後天性遺伝子調整と書き換え、後天性機械因子調整と書き換えるの二重は危険ではないか？」

「危険？なぜだ」

「前例がない」

「ジーンネイターの両計画は本来相互に補い合う関係の上にある、前例がないのは先天性の二人が成熟してからでも遅くはないと

判断され行われなかったからだ、何より金がかかる」

「気になったから聞いておく、二人は親に機械因子を投与した  
いか？」

ギンナルが頷く、よくわからないが投与したいことはわかったが、??カテゴリーの俺は単なる一つですむがアリアは予定にあるアンチ・ジーン能力、パワースナッチの能力を考えれば貴重な一つといえるだろう。

「断っておくが後天性機械因子適合者はカテゴリーを全て使う、空白の分だけの能力を得るが、調整することで換装を可能とする為、限定因子から現在の能力に負荷がかかることはない、どのみちヘイフリック限界で死滅する不老不死な存在ではないのだよ」

「そんな柔なモノなのか？」

「ああ後天的な投入では完全に生み出すことができない、継続投与での能力が継続されるだけにすぎない、そして遺伝子強化配列調整での能力を超えることはできなかったジーンの憂鬱というがな」

「娘の二人はどうなのだ？」

「先天性適合者は人工的なオリジナルだが身体の成長、つまり遺伝子を変える能力があるだけにすぎないそして優れたシンネイターではない、先天性因子適合者は人の枠組みからは逃れられない、寿命がくれば死ぬ、単に老化速度を変えただけにすぎないそしてカテゴリーは二人とも標準的な四つに過ぎず、最近発見された??カテゴリーが異常なのだ、いや異彩だな」

「3LDKでの核家族か部屋が足りない」

「仕事部屋の一つを二人に与えればいい」

「言っちゃ悪いがヴィーナスのラヴァーズのアンチ・ジーンネイターは対遺伝子能力者だぞ、必然的に殺しもあるがその辺はどうだ」

「問題はない、二人も殺害することが事件被害を食い止める抑止力になると判断している」

「ならいいがよろしくなドール、ルージュ」

誰のことを示しているかは指で伝えた、俺が名付けたドールはギンナル、ルージュはガンダルヴァ。二人は新しい名前に片方は嬉しそうに頷く、ルージュは微妙な笑みを口元に浮かべた。

「アリアベルタ・デ・フィーナ、二人の名前はアリアベルタ・デにガンダルヴァ・ルージュ、ギンナル・ドールだ長いから最後を名前としてくれ」

「アリアベルタ・デ・久志、で私物は？」

「無い、成長し続けるので毎日制服を新調した、私物はサンプルとして分析に出ている、ついでにいえば許可を取るのに時間がかかる手続きが終わったら向かわせる、その際に機会因子投与を行う」

二人と別れ自宅に戻ると酷く疲れたが頑張った後にシャワーを浴び制服に身を通し組織の対強化兵課区画の第四学生班部屋に向かった。

課長が禁煙ガムを膨らませ、現状の調査の連絡書を閲覧していた。

「おはようございますシテノ課長」

三十代後半のノンビリとした魚釣りが似合う酒焼けした課長であるが識別番号はアンチ・ジーンネイター試作型の番号だ、組織の重要な下士官クラス曹長になる、俺達は軍曹、子供二人が投入されるらしく二人の階級は伍長になる。

「おはよう」

「遺伝子強化の調整、機械因子の投入の結果莫大な資金が使われますが給料あげてください」

「その件で話がある」

目つきが鋭くなった、二つの計画は一つの目標であり相互扶助の関係でもある遺伝子の調整だけなら高純度栄養剤で済むが、機械因子の投与は桁違いの資金が必要になり給料アップは音速で却下、労災認定もされない保険業は存在しないから必要経費の費用明細書を受け取ることあった。軽く泣け軽く愚痴りたくなる。

課長は珍しいことに？カテゴリーの遺伝子を持つ、アンチ能力を二つ持つ存在でもある。そして残った四つを防御用のブレイクで終わらせた対強化兵の専門家だ。その課長から言わせればパワースナッチ等役に立たない小手先の小技と言われ却下された。機械因子投与によってランダムでの能力はカテゴリーに強く影響されるらしいと推測されている、理由は遺伝子そのものがより強力により多様に存在しようとする生命は多様を好むの法則からだ。何より新しい能力ならサンプルとして貴重だ。

仕事は他の部署から集められた情報を元に現場に出る、今日は二人を待つために待機任務。

仕事を退屈に行っているとき学生社員の女性用を着込み課の標準装備刀剣のスモールソードを腰に下げ現れた、ドールは抱きつきたがる癖がある、ルージュはアリアの趣味と類似する刀剣の訓練好きだが実際は甘えん坊、まだドールの方が自立している。生年月日は四月一日、三ヶ月と一日の赤ん坊で外見だけなら十六歳の少女。二人は一目で判別できる碧眼の瞳を絶え間なくに動かすドール、興味のある物に注目し観察し続ける癖のあるルージュ。

手術というものは簡単でナノマシンを血液に混ぜ投与する。急速に体力が漲るが手術に関わった医師が真っ青になり投与を中断しようとするが他の医師が止める騒ぎが起こった。

騒ぎになった理由は単純だった能力が全て書き換えられた通常の遺伝子に最悪なロストだ。

原因究明のために長期の検査を受けることになる。が調べるとロストではないことが判明した、現在確認されていない遺伝子の擬態化だ。

「つまりどういうことだ？」

前例がないことだけに立ち会った医師の他にも科学者や生物学者様々な関係者がいる全員が困惑している様子だった。

「わからないというしかない、君の遺伝子は珍しく前例のない実験の結果調整遺伝子擬態化、先天性??カテゴリー遺伝子保有者、

我々もよくわからないが継続するか？暴走に近いが」

「高校生にわかるように説明しろ」

「わからないことが多いが一つだけ確かなことは君の遺伝子は現在高速に書き換えられている、それも類をみない真新しい遺伝子に、正直進化というしかない」

「医師さん、ロマンチストの改造人間がいる訳ないだろう、継続してくれ」

「わかった、継続する、断っておくが医療ミスではないぞ偶然が一度に起きたようなモノだ」

継続されていくナノマシーンと俺の血液の混合に循環、詳細なデータがとられ意味不明な単語で説明され最後に要約する説明があった。

「終わった、どうも遺伝子そのものがプロ・ウイルス化している」

「何だそのプロ・ウイルスってのは」

「細胞内に入り込み強制的に遺伝子を書き換えるウイルスだ」

「つまり何か遺伝子レベルでの書き換えが始まっているのか？」

「異種間特性発揮能力だ」

「だから高校生でわかるように説明しろ」

「まあ要約すると何が起きているかさっぱりわからない、簡単に言えばプロ・ウイルスその物になろうとしていることだつまり投与し続ける限り能力そのものが高度化していく」

「つまりお宝発見か？」

「偶然の産物だろうがメカニズムを解明すればジーンエースに對する切り札になる」

「定期的なサンプル抽出でいいか？」

「まあかまわないよ、ただ書き換えが終わるまで時間がかかる、寝ていて結構だ」

後に知らされたが先天性と後天性の暴走確率から推測される遺伝子その物の進化らしい、しかし外見には変化はない、能力も発動不能、推測されるのは成長していく第三世代のジーンネイターの姿だそうだ。遺伝子がより適正な遺伝子に適応するのは当たり前だ、それが偶然暴走し恒常的に発生し続けた、完全に手術は暴走そのものを押さえつけるためにナノマシーンを投与し何とか暴走を押さえることに成功した。それを説明する小母さんは何ともいえない顔でいた。

「人工進化技術になる」

「だが暴走しているだけだる制御しているとはいえない」

「可能性の話よ、奥さんとよく話した上で愛しなさい、液体感染でフロ・ウイルスが浸食する可能性があるわ、科学者をしていると色々と困惑する事が多いけど、今回はとびつきりよ」

「だが進化なんて毎日起こっているぞ子供が生まれれば進化だろ」

「坊や哲学の勉強はしている？」

俺が怪訝な顔になる、小母さんがメモリーを渡した。

「勉強しなさい、貴方はジーンエースに対抗できるかもしれない唯一の第三世代なのよ」

「能力発動できなくなるわ哲学の勉強しろとか踏んだり蹴ったりだ、小母さんは進化したいか？俺はどうでもいいと思うが」

「進化は突き詰めれば種の適応よ宇宙にあがれば宇宙に適合しなければならぬ、だけど人工的な進化はぞっとしないわ、人間の醜悪な一面はたくさんみてきた」

「が小母さんは前と変わらないぞ」

「分別はある方よ、恐ろしいのは進化する技術よ坊やではないわ」

「手術中考えていたがキメラは知っているよな？」

「知っているわよ」

「つまり俺はプロ・ウィルスその物を生み出す存在であり具体的な毒だ、進化の方向性を決められないか？」

小母さんの顔に深い苦悩がある、科学者全員が自然を操ることが正しいとは思っていない西洋の考えだけが世界の全てではない、東洋やアフリカにも沢山の思想がある、言わなければ進化を制御する方法として具体的に失われた部分を作り出す能力があればアリアの病気を治せる。欲を言えば失われた体の一部を再生できれば世界の不幸が薄まる。

「坊や、私達は人間よ、人間はね憎しみあつて奪いあつて傷つけあつて殺しあつてたまに愛しあつて助けあつて、一年後も十年後も我々が死ぬ頃も人間なの度し難い化け物と同じよ」

「違う人間は確かに醜悪な一面もあるが尊い部分もある」

俺は醜悪なところにいた犯罪組織の末端などそんな場所だ、だがその組織にいる人々は正しい理念を持っている正義など知らないが、信じられる人々がいることは確かだ。

小母さんが多少いつもの顔に近づき、ジャンクフードの定番のチーズバーガーを食べ始めた。

「何でか腹減った」

「ああそうそう当座の給料アップはないそうよ」

「ひでえ世の中だ」

自宅に戻る、妻の方は何ともなく機械因子投与が終わり、ガン細胞制御能力のデメテル、赤血球の内部のヘモグロビンが一度に運ぶ酸素の量が三個のジークフリートで二つは目新しい能力ではない、最悪な能力が発見された、珪藻の殻に近い原理で人体の細胞膜

に珪酸沈着を起こす石化能力、即効性のタンパク質系毒の生成能力、二つの猛毒な能力は白兵戦では最強の部類に入る、常に再生させる能力、恒常的な体力を向上させる能力、振れることでの石化能力、放出する猛毒能力、接近されれば終わりだ。

その妻が二人の娘に食事を作り、様々な本を読んでいる長閑な風景。

夕飯になる食事は簡素なシチューだった。それだけに美味しく何度かお代わりし能力の発動が不可能になったためスモールソードでの剣術、拳銃の射撃訓練、生身の兵士や暗殺者としての訓練、麻痺した日常に思えた。

深夜になると二人を寝かし、学校の勉強をする二人は疲れても居たらしく訓練中に倒れた体の使い方を知らない子供特有の行動だ。

「ヒート計画が気になるのか？」

「まあな、小母さんから渡されたメモリーをみた哲学というモノだ、頭でわかつくとするのは正しい行動だと思うが麻痺した日常を紡いでいる俺達には関係ない、選ばれた者とか選ばれなかった者とか何の関係もないただ違うところがあるだけだ、それだけのことがわからない子供じゃない、違うだけで争うのはお馬鹿だ、だが現実には相手の行動の結果被害を被る人々を守る一面をもつながら許されない殺人を行う、苦悩するなという方がおかしいだろう、だが正しいことは正しいのだそれだけは確かだ、だからこそ計画に賛同している」

「計画は合計して二つある、生物的な遺伝子書き換え調整、機械的なナノマシンの投与による書き換え調整、第一段階は先天的

遺伝子保有者の遺伝パターンを後天性遺伝子適合者に遺伝子にコピーする、つまり贗作だ、だが第二段階目の先天的、後天的適合者から生まれた存在は先天的に能力を獲得する、第三段階は能力そのものを生み出す存在それに行き着くまで長い時を要するそれも千年や何千年といった進化そのものに流れに乗るだから組織は困ってしまった、おそらく宇宙に進出した時代に生まれるはずの能力者がいきなり現れたのだから」

「青天の霹靂がよい子に対するご褒美だろう」

「よい子でも覚悟がいるのだ、どう取り扱えばいいのかわからないのだろう」

携帯が鳴る、事件の二度目だ。警戒情報から敢闘したのだろうか。負傷したものの生存している。現れたのは俺達を襲撃した一組の特徴とは一致しない先天性能力者事件現場に向かうよう指示があっただが不可能であるなら就寝してもいいという選択肢もあった。

「現場に向かう、これで二度目か」

「ああ向かおう理由はどうあれ襲撃は襲撃だ、自由都市のやり方を通してもらう」

現場は第四商業区、現場一帯に機甲兵が制圧しているが相手はやはり電磁迷彩で姿を消した。

現場に到着した対強化兵は名の知れた猛者が多い、古参に該当する第四学生班シテノ課長が特徴から相手の能力を割り出している。膨大な超能力と言える能力の中で直接攻撃に該当する能力は意外に少ない、理由は戦闘に要求される能力は多岐に及ぶからだ。そして相手の能力は直接攻撃能力火炎を操る能力者と風を操る能力者、二つを組み合わせることでアーマードの装甲を焼き払い数機が撃破された。生存はしているが目的が非常にわかりやすい物だった。

「金銭搬送係？」

「現物の紙幣を運ぶことで内部協力者の存在を掴もうとした」

「それもあるが我々を発見することが目的では？」

「それなら宣戦布告を改めて受け取ろう、お礼参りだ狩れ」

部長である対強化兵の管理者の女性が冷たく冷酷に言い切り、班に分かれ相手を捜す、数において劣勢なら同数の相手を攻撃するだろうという読みだ。

俺達夫婦が探す、封鎖されている制圧現場では様々な情報探知機が展開されている。発見できなくても増援はないだろう。能力が

制御できない中前回戦った先天性能力者の二人が現れる、片方は白髪、褐色の肌、東南アジア系二十代前半の中肉中背の男性、女性の方は黒髪の長髪、陶磁器のように白い肌が特徴的な判別できない人物。

「覚えてるか稲妻使い」

男性の方が流暢な日本語で話す。二人との距離は微妙な能力を発動しても防御できる距離であり接近戦を挑む距離にしては遠い。

「覚えてるぞ嗜血病患者」

俺の言葉に男性の方が行動に出るがやはり異常だった、片割れの女性の首筋にかぶりつき血を啜る、まともじゃない。女性の方は陶醉するような瞳でいた。

「よう変態カップル」

「嗜血病患者に見えるか？」

「ああそう見える」

「では尋ねようか貴様らの試作器型が訴える喉の渴きは？お前たちが接種する薬の元は？」

「ここいいたいのか全員が吸血鬼だと？」

「それだと説明がつくだろオリジナルが吸血鬼だと知れば行動する者もいる」

「悪いなお仲間になれそうもないもうそれと少し紳士になれ、人前で彼女といちゃつくなよ」

俺の言葉に男性の方が困惑というモノと深紅の双眸に宿る、時間を稼いだ、十字路に対強化兵が集まり戦闘態勢に移行している。空天の飛翔、ビルの屋上から垂直に落下する二人がいる凄まじい音

を響かせ、道路を傲岸にも破壊した。一人は二メートルを超える巨軀、外見的特徴から白人系、片方はアラブ系それでも大きく九十前後はある。白人の方が増加燃料を持ったチェーンソーが武器でやはり瞳が紅い。アラブ系の者は二刀流の細身の長刀を構えている。

「我々は先天的能力者ジーンエース汝ら紛い物の量産型に用はない、保有している全てオリジナルを解放せよ、量産型吸血鬼共」

二刀流のアラブ人が宣言する、俺達からすれば見当違いもいところだ、そして自由都市ヴィーナスの喧嘩を売ったことを地獄の親戚で後悔した方がいい。アリアが俺を退かす、二刀流のアラブ人が興味を示すように長刀を構える。

「ガン細胞制御能力のデメテル、赤血球の内部のヘモグロビンが一度に運ぶ酸素の量が三個のジークフリートで二つは目新しい能力ではない、最悪な能力が発見された、珪藻の殻に近い原理で人体の細胞膜に珪酸沈着を起こす石化能力、即効性のタンパク質系毒の生成能力、二つの猛毒な能力は白兵戦では最強の部類に入る、常に再生させる能力、恒常的な体力を向上させる能力、振れることで石化能力、放出する猛毒能力、接近されれば終わりだと言われる能力だ、吸血鬼かどうかなどくだらない曖昧な真実などどうでもいい。貴様らは我が社の社員を殺したその上に戦いを宣告した我らにとるべき道はただ一つ殲滅あるのみ」

「我々も生きるために血液がいるのだ、無益な殺生は嫌いだが生きるためには必要だ」

「口上などくだらない、死ね！化け物」

「紛い物にしては強そうだな」

「遠距離攻撃から殲滅する、離れろ」

「問題はない足止めする私と共に殲滅せよ」

「わかった??? S - 1001 お前に戦闘能力はない退け」

俺のことだと気づきアリアを見る。退けと目で話す、装備をアリアの側に置き相手を視認しながら十字砲火の陣形の奥深くに後退する。容赦のない遠距離からの雷、炎、超音波、酸、氷弾、水弾、銃弾、様々な能力や装備で攻撃される、アリアは殆ど打撃を受けないように壁際に後退していた。

「こちらアリアだ効いてない、電磁バリアで無力化されている」

指揮官の部長に顔を向ける、アリアの様な陽の美貌とは違う陰の美貌の女性指揮官は遠距離攻撃を続けさせる、同時に空からの攻撃を開始する被害など無視してアウトレンジから殲滅する、

そして攻撃が中断されるほどの煙幕が立ち上る。

四人は無傷で立っていた、十字路の中央に立ち、女性が立方体の電磁バリアを作り攻撃を無力化した。煙でわかったことは幾層にも作られる防御専門の先天性能力者だ。だが一つだけ欠点がある呼吸する空気までは無力化できない。

「1001、電磁バリアを無力化できるか？」

「知らない、ただやってみた方がいいか部長」

「馬鹿な、1001は貴重な第三世代だ何を考えている」

「我々と敵対した組織は尽く滅んできた、今更未来と過去が我らに頭を垂れることを許さない、我らが行すべき行動は一つ殲滅せよ」

「了解した攻撃する、支援としてライトアップしてくれ」

指揮官の部長の指示で空中から四人が何重にもライトが当てられる、白煙からの何重もバリアのせいで遠距離攻撃は全て無力化されたことを考えれば桁違いの電力を放出している雷使いだ。

東南アジア系の男性が大気を操る風使いなら相性は完璧だろう。

接近する俺に四人は出方をうかがうように凝視している。電磁バリアにふれる瞬間砕けるとヴィシユヌの暴走手段、制御解法をする。が反応はない。アグニを試すがやはり反応はない。ヴァーユを試すが無駄な努力だ。

「能力が発動しない」

「なら触れろ、接触し破壊せよ」

非情に命令だ、だが俺は躊躇しなかった、命令が下ったとき直に触れる。強力な電磁の効果で振れた部分が焼き焦げていく。そして気づいた、これは貫通させ効果そのものを低下させる薄い防壁だ。そして突入する相手を完全にとらえるための罠だ。

圧縮された大気がぶつかり俺の体が吹き飛んだ。さすがに血の気が引く、能力のそのものに熟練性が違いすぎる、それを伝えようと口を開く、出たのは血塊だ。医療スタッフが俺に応急処置をする、

指揮官の部長が近寄り話しかける。

「1001報告せよ」

「能力は雷、それを工夫し幾層の薄い防壁を生み出し攻防一体の防壁を作り上げその中で確実に相手を殲滅させるための罠が発動者、電力そのものは微弱幾層にも重なることで貫通できない、大気を操る能力から対空能力が高い、二人は対地用防壁、対空用防壁の機能を発揮するとともに遠距離からの攻撃を一方的に無力化する防御要員、気をつけるべきは伏兵がいる」

「アリアを後退させる、能力が不向きのようにだ」

「感謝を」

慈悲深い言葉で会話と意識が途絶えた。

7 / 3 日、金曜日。

医療区画に運ばれるが医者が多くが困惑していた、電磁バリアで焼けた腕は珍しくもない軽度の火傷、問題は即死してもおかしくない程の穴が体中にある、心臓も無い。小母さんが現れ挨拶する。

「ひでえ一日ばかりだ」

「不思議ね、何で生きているの？」

「しらねえよとつと治せよ」

「心臓がないのよ？何を治療するの」

「人工心臓でも埋め込めよ」

「一応聞くけど即死ものの攻撃を受けたのよ、医者が、心臓がない患者を死人というのよ」

「おりゃ生きている、血が足りねえ」

「あのね心臓がなければ普通は死ぬの輸血する以前に死んでいくはずよ」

「ひでえ世の中だ心臓がない患者ぐらい治療しろ職務怠慢だ」

手術台に乗っている俺は血塗れで周囲の医療スタッフが血止め

をするが効果がない、医者が一応処置をするが生きる前提の心臓がないためどうしていいかわからず胸以外の治療に専念している。小母さんが映像を見せる、二人の娘が健やかに眠っている。俺が無理矢理意識を維持した、可能かどうかではなく生きる執着は生命の前提だ。

ヴィーナスの最先端医療技術の結果、生命維持装置に繋がられ心臓の代わりの装置を使い俺を無理矢理生存させている。指揮官の部長と映像が繋がる。

「報告せよ1001」

「即死の攻撃に耐えられる身体機能が俺らしいです」

部長は合点がいった様に瞳を大きく開いた。

「現状は聞いた心臓がないそうだな、肉片はサンプルとしてラボに送った、生きているのだから戦死でも殉職でもない医療費は負担するがどれぐらいで復帰できる」

「心臓ができあがったら、ですかね、再生に何日かかるかは謎です」

「違うな、お前の身体そのものが別タイプの種となっているのだらう報告であったプロ・ウィルスの増殖と暴走による、遺伝子の強制的な書き換えが沈静化したのはナノマシーンを致死量まで投与した、つまり細胞的な自滅因子が発動している状態だ」

「つまり俺の身体は別の種になってしまい従来の医療技術では説明不能になった、ですか？」

「ああその方が説明しやすい、おそらく血液そのものが自動的に血管に流れているのだろう原理を説明すれば不老不死の兵士製造に役立つが不要な能力だ、エリアと合流後可能な限り迅速に戦線に復帰せよ以上だ1001」

「了解しましたがどうやって戦うのでしょうか」

「わからんよ、心臓のない兵士など聞いたこともない、太陽のコードネームのはずがゾンビだ、医者として興味があるが前代未聞すぎて私自身理解できない、近くにタイタさんがいるな」

「現在仮眠中です医療スタッフが解明しようとしています」

「現実が直視できないのだろう科学的なデータの医療では説明できない東洋的医学でも無理だ、そもそも心臓がないのに生きるのは心臓の補助器官が細胞レベルで存在していると楽でいいな核ミサイルでもない限り殺せない」

「では現状を把握した後に復帰しますが現在の戦力では相手にならないと思えますが」

「戦いは数だ質で押し切れるのは初戦だけただわからないのは相手の主張だ、使える手駒として判断した、相手の主張をわかるよう理解しておけ」

「お聞きしたいのは切り札の効果は？」

「怪しげな動きがあり使っていないが、おそらく無力化されるだろう、投擲した催涙ガスが空中で霧散した、大気に電気を操る能

力が組み合うと鉄壁の防御を誇る、残った二人の能力も未知数アリアと合流したならよくよく話しておけ、彼女はアーマードの現役整備員だ、下手な科学者より現実的な見識を持つ」

通信が終わり、家庭の映像を眺める個室であるが時折モニターの記録を医療スタッフが確認している、が俺自身もわからない体であるためにどうしようもない。

寝るのは危険だと思い暇潰しに戦闘画像を見る、現在局地的な戦争が発生している、制圧したが相手の防壁を突破できない、アーマードの重火器でも効かない、強化兵の能力も無効、アンチ・ジーンネイターの能力も効くがどうか怪しい、まさに万事休すで戦車の砲弾が効くかどうか怪しい、そもそも電磁バリアの技術的な展開には自由都市の電力とそれを完全に制御する技術がいるが確立はされておらず研究段階の代物だ。

部屋にアリアが入ってきた制服を新調し覇気のある笑いを浮かべていた。色々あるが笑えない状況でよく笑える好い根性だ。東洋的な美貌と性格は人間くさいがアーマードの整備員は技術的なレベルでいうなら天才や秀才の集まり。現役の整備員でも一つのシリーズが限界だ。

それを行える者は一級、報酬は一億に達する高収入だ。アリアがそれを捨て現状にいるなら謎ばかりだが生きているのでから問題はない。

「最近流行か、心臓がないゾンビ野郎、今月で何度目だ」

「さあな、どういう構造か医者でもサジを投げている、機械の方での説明ができるか？」

「さつぱりだ、補助器官が存在するなら何か発見があるだろう、そもそも普通死ぬぞ？」

「心臓がないからって差別するなよ、偏見はよくないぜ」

「大量出血で死ぬぞそれかショック死だ、ゾンビというしかない」

「まあふざけるのはここまでだ、相手の主張であるオリジナルの有無はわかったか？」

「確認したが普通に生活しているぞ、サンプルである遺伝子や血液を採取した後は社員として働いている、解放も何も自由意志だ、労働条件がいろいろいい好評だが、困ったことは自然が少ないという不満が多かったその点は私も賛成だ」

「じゃ連中は主張の空回りの空論か、しかし何故敵対する？」

「不信感だろうな、信じられない、現に医療スタッフの多くが科学的知識からヒートが死ぬはずで、常識という良識を持っているが言い換えれば頭が固い、現在二つの計画の産物であるヒートのメカニズムを説明するべく奮闘しているが前代未聞のゾンビ野郎だ、非常識すぎて理解できないそうだ」

「早い話は前例がないからわからないだろ、学者さんがよく言う話だ」

「現実的な医師も同じらしい整備員からすればメカニズムより重要な戦力だ何せ死なない大破しない戦車なら安心して使える、まあ私の能力も近いが、非常識もここまでくると快拳だ」

「問題は攻撃力がないということだ」

「現在古巣に話した一応突貫機の製造をしている、死なないなら安全装置などいらないからな安心して自爆兵装が使える」

「俺は特攻機に乗るのか？」

「死なない特攻野郎なら安心という訳だ」

「ひでえ世の中、全く容赦がないね、まあいつ完成する」

「連絡がくれば完成する頃だ、が、出してもらえるかは別だぞ、何せ第三世代はヒート一人だ、貴重な存在だぞ、まさか特攻機で攻撃してきますはいそうですかと了承するとは思えない」

「第二世代でも持て余す現状だからな、ドールとルージューに何て説明するか考えている」

映像が入る相手が離脱を開始しそれに対し各個撃破の指示が飛ぶ有能な指揮官である部長はこの瞬間に待ち全能力を試す気だろう。だが四人の内攻撃が効くのは二人だけだ残った病人と変態の組み合わせは鉄壁の防御で突破する、そして潜んでいた炎使い、風使いが戦力を分断させ返り討ちにしようとするそれを空中からのアーマード投下により逃亡劇凄まじい戦場になっている。

残った二人の能力は判明できない特殊なモノらしい、共に包囲から突破し逃走するが狙撃手の追撃を受けている、が全て無力化するのか攻撃を受け付けない、皮膚を通過できないのだ。

服に穴があくが構いなく、二手に分かれたが合流する場所に

移動するがそこを爆破する、それに隠れ逃亡に成功する。映像が途絶える。

朝方まで調べられ、分析結果で二人の能力が推測された、白人系の男性は皮膚そのものの硬化珍しくない能力であるが危険なのは鉄壁の防御で装甲服を着込んでいるようなモノだ、装備で持っていた回転ノコでの攻撃は的確で何人かが返り討ちに遭い重傷を負った。

片方のアラブ系は反応速度と動体視力の向上、生きるために血液を欲すると主張していたがそれらしき行動をとったのはたったの一人、だが嘘を言ったような気配もないかといって切迫した声でもない。対強化兵の能力に効果はみられたが防御役の二人がいる限り確実な効果とはいえないと報告にあった。

相手も組織だ今後の事件に影響が及ぶだろう。俺はというと俺の吹き飛んだ心臓を一応組み立て結合させた後に場所に移した。医者が目を疑うような現象が起きたのもその時期。傷だらけの体が再生する、高速に細胞分裂が起き急速に細胞が活性化する。そして急激に腹が減った俺は可能な限りの食事をしていた。

「お父さんお腹が変ではないですか？」

控えめに言ったルージユの顔には明らかに困惑がある。全く気にしていないドールは食べるだけに食べると妻に抱きつきじゃれている。

「大食漢なのだ一万カロリーを食べる変態もいるだろ、ああ言う大食らいなんだよ」

「太らない体質……？そんなデータは」

「ああない記載する必要がないあいつはお喋りだなんて記録しないだろ」

納得させる、腹が満ち足りた感じと喉が渇く衝動を受けた、与えられた高純度圧縮栄養剤を飲むと治まる、あの変態男の言つとおり吸血衝動がある、報告するには今頃多発している問題だろう。登校時間までくつろぎ、学生社員の制服で登校する、一家揃ってモノレールの乗り込む駅前に到着したとき対強化兵の部門を統括する部長や課長が集まり血液採取から健康状態の把握という課の活動をしていた。表向きは健康維持の医療スタッフに入る。

「おはようございます血液を採取しますか」

話しかけられたが俺はなんといえいいのかわからない、まさかゾンビの血液が必要な患者はいない、アリアはガン細胞からの恒常的な能力の結果通常の血液とは違う、娘の二人は世代そのものが違う、困った。

「あの義務ではないですが」

「済みません薬物を飲む必要がありますので無理です」

「では女性の学生さんは？」

「多少服薬している頭痛薬とかありますので難しいかと」

医療サービス担当の社員が残念そうに見送る、昨日みた変態野郎より血を欲している顔だった。複雑な顔だろう。

「エイシエ部長相変わらず」

ドールが桜色の口唇を小さく動かし呟いた。エイシエとは俺達

対強化兵武装捜査員組織の統括者の部長だ、一般的には健康維持サ  
ービスの統括者だが課長や役職のある社員は一応表向きの活動とヴ  
イーナスの意向に添う活動の合理的な活動内容になるが激務だろう。

装備が強化され5・7ミリ小型ライフル弾を発射する小型機関  
銃に帯剣するリミテッド反応の高周波サーベルで武装しているが効  
果があると判断されているのは機械装甲服での大量投入による物量  
戦、昨日の事件で防衛軍と李企業体との交戦も一応あった、違法に  
制圧していることに防衛軍の一部が発砲した、ただ防衛軍の官僚と  
の話し合いで解決し表向きは防衛軍との合同訓練となった。

当然二つの警察が黙っている理由はない、二つの組織が手を取  
り合う間柄ではないにしろモノレールの広告画面が緊急放送になり、  
現状で起こっている連続吸血事件とそれに偶発する組織間の暗躍か  
らの抗争、血塗れの都市と言われるゆえんだ。

「部長と知人か？」

「一応面識があるのです、あの人は？カテゴリーの唯一の先  
天性適合者と同時に二つの計画の第一段階を進行させた際の指揮官  
でもありました、出世は好まない性格から現在の問題に対応する現  
場指揮官になりました、ただ敵も多いのも事実です、エイシェ部長  
が私達の保護者のリストにあがった人でもあります、あまりに多  
忙なので断られました」

「頭がよくて医者免許とか沢山持っています知的な人です」

「しかし、女性だよな？」

「はいそうです、現在関係のある男性がいますが清い関係とも  
つばら噂です」

噂、よくよく考えると俺の噂も立つことになる心臓の問題は医療的常識からしてもいや控えめに非常識としても研究者はよく理解できないだろう。

「ではヒートの噂は？」

「不幸な学生に尽きます」

「なぜ不幸なのだ？」

ルージュが言いにくそうな言葉に迷っているとドールが話した。

「後天性から先天性の適合者遺伝子、複雑に入り組んだ遺伝子の持ち主です、貴重なサンプルとして本来なら扱われますが、エイシェ部長が気に入った課の引き込んだわけです、理由は使えそうだとエイシェ部長は強いですけどイマイチ人望とかない方だから、ある意味達観した性格で現実的に敵対する者との利害調整の使ったわけです」

へこむ、良いように利用されているだけではないか、賢くなる必要があるが勉強する時間もろくにない。家庭問題も多発、複雑化する体内状態、あまり先が見えない状態だ。

「俺は何か金の卵か？」

「どちらかといえば泉の精霊です、投下したら良策がでる絶対にほしがる人材でもあり、本来ならオーナー直轄組織に組み込まれますただ戦闘能力が低いことから外されました」

「あまり幸がある人生には思えないな」

アリアの言葉で締めくくられ俺は返す言葉がなかった。

教育区に到着し商店街での買い物後付属一に入る、教室に入ると大久保、伏見、庵、竹葉の四人が事件を整理していた。

「洒落にならない、アーマードが投入されそれを個体が防ぐ能力など」

大久保が引きつった顔で呟いた後挨拶した、学生警備隊の情報網はあるむしろ卒業生からのリークも存在する、教室では黒板に陣取った四人が書き込んだ情報を暇そうに眺める数名がいる程度で残りは新入生の二人に釘付けになっている。

「あおはようございます新入生ですか？」

「ああ娘だ」

アリアが言い切る、俺の脳細胞が溶解しないかと不安になるほど俺の意識は逃避に近かった。

「自己紹介だドール、ルーシユ」

「待てよどう考えても無理があるだろ？」

「里子だ」

「どう考えても同世代だろ？里子にならないだろ」

「親がいて子がいるこれが家庭」

「そうじゃなくて現実的な不可能すぎる」

「ゾンビという言葉か？」

クラスの会話が途切れる、娘の部分から俺達だけの会話が続いていた、無理がある、だが現実的には二人は赤ん坊で保護者が可能な限り側にいる必要がある。俺が複雑な葛藤を描いている中大久保と俺が肩をたたき、勘違いされた視線がいた痛いほど突き刺さっている。

席替えが提案され俺達家族が一カ所に固まり母親に説明を求める二人の女子に非常識な言い分で切り返して居た、俺は一時的な幸福を噛み締める。ギャルソン・中島教諭が一応確認するがさすがに現実の資料と現実の実物大に俺を職員室に呼んだ。

職員室は初めてであるが学生用の椅子もある、そこに座り資料が出される。

「李企業体人工生命体、年齢は今年の四月一日誕生、三ヶ月と三日になりますね」

俺になんといえと？かなり絶望的な顔で言葉を探した。

「抵触する条約等が存在しますがご存じですか？」

「具体的にはどの様な」

「国際法では人工生命体の製造は禁止されています自由都市が批准していませんが、日本は批准しています、その条約から日本と

自由都市の国際法的に審判が求められますが、李企業体は学生資本群の一つで国際的な立場もあります、その点についてはどの様な対応を」

「さあ元々は技術開発部門のお子さんですから、それに伝えられたのも昨日ですし」

「ではどの様に伝えられましたか、もちろん守秘義務があるますから答えられない範囲は省いてください」

「簡単に言いますと製造したけど教育できないから親になって」

「李企業体にもある悩みですか、まあ深い追求できませんが説明できる知識が必要ですから最低説明できる内容の資料を要求します」

「筋が通っているのですが、不可能と思います常識的な科学技術で、人体の完全な製造には脳細胞が必要で、脳細胞の完全にメカニズムは解明されていません、難しいと言っしかなく」

「確かに伏せるべき情報もあるでしょう現実的に成人に近い老化速度というしかないのですよ、どう説明するのです、老化速度の異常では療養中になります」

「では実際年齢の詐称になります」

「不可能です、質問に答えるためには経験がいりますあの双子にその経験がありますか？嘘を言わず相手を黙らせる経験と知性があるとは思えません」

「既に手遅れな気がしますが」

「最低限の資料文章作成を行ってください」

「会社に通知します」

携帯で連絡すると最終担当者の科学者の女性が内容を作成して送りつけた、単純な文章で機密事項とある。

担当が悩んだがそうとしか言えないために、資料作成を学校側が依頼した。

学術的に正しいのかはさておき生まれたからには育てないといけない訳で、その過程は貴重な情報でもあるが二人の成長は当然のことに初めての存在だ。資料がない前例がない。根気よく教育するしかない。

さすがに学校側も無理があると李企業体との話し合いを持ったが、家庭内の問題だと切り替えされ黙るしかない。教室に戻ると二人に絵本を読んでいるアリアが居た。席に戻る、午前中の授業が始まり終わる、四人が集まる。

「鳳は駄目だった、ただ事件の進展はあった先天能力者ジョーンエースと名乗る組織だ」

報告を纏めた物を見せる、ドールとルージュは健やかに寝ている。

「つまり超能力者集団というわけ？」

竹葉が話すそれを俺が頷く。四人が手を引くかと思えば違った。

「上等じゃない学生に手を出したらどうなるかきっちり教えてあげるわ」

「さし当たって捜査に方針だな」

「大久保、もしだもし俺が」

「死んだら二人を預かってほしいか？」

「いや絶縁した両親に伝えてほしい俺は満足の中で死んだと」

「死ぬ気もないのにそんなこと話すな、捜査は事件が起きた地点の聞き込みだな、そしてベルタとアリアには李企業体内部協力者を捜してほしい、おそらく誰かが流した情報がある」

「何でだよ、李がそんな真似はしねえ」

「違う、李の中でも色々あるだろう李は確かに立派だが人は必ず過ちを犯す」

「わかった、ギルドが掴んだ情報は？」

「わかったことは犯人と思しき存在が元ハードエッグの構成員ということだけ」

「ハードエッグは関わっていないと情報にあったぞ」

掴んだ情報を纏めてみる、事件があった日が7/1日、水曜日、血液を抜き取る猟奇事件として捜査された。

7/2日、木曜日。事件の捜査の過程でハードエッグが関わっ

ていないこと、対殺し屋の誓約組織ジーンエースが事件起こした、特筆することに先天性能力者、超能力者の集団、夜二度目の事件が発生、重傷を負ったもの生存、犯人以下六名の存在を確認、先天性能力者と判明、第四商業区で局地的な戦争に発展が傷一つつけられなかった。六名は逃亡。被害として十名近い者が重傷。

7/3日、金曜日。ハードエッグの元構成員が関わっている情報が入る、ただハードエッグは拠点を持たず組織化されていない、対李企業体組織今まで情報を強奪されることがあった、構成員の不明から優れた情報組織と思われる。

ジーンエースの構成員と判明した六名は外見的特徴から追跡調査がされているが足取りは不明。なお嗜血病患者が構成員として存在している。

「以上だ」

俺が終わる、俺、竹葉は深刻な顔でギルドの首脳部陽炎に連絡する、大久保は現在の警備隊隊長に連絡する。

伏見が現在の生徒会長に連絡する。李の学生社員が狙われていると思われ教育区全体に連絡が及ぶ。事件は深刻なダメージでもある猟奇的な殺人犯が暴れ回っていることになるからだ。

この事件に生徒会連盟の重い腰を上げた。正式に事件の調査を公表した。そして賞金をかけた、賞金稼ぎが狙うようにし向けた。

「で、何でまた連中は血液をほしがる？」

「自分達を吸血鬼だと主張している」

「麻薬ラリっている訳ね」

「俺の勉強不足かもしれないが、両目の瞳孔が紅くなる薬はあ

るか？」

俺が大久保をみる。意外にも俺が口を開いた。

「あるぜレッドゾーンと呼ばれる特殊麻薬、特徴として両目が深紅になり反射神経が向上する、元々は格闘家のドーピング用に開発された薬だ、ただ欠点がある服用する度に効果が薄まり麻薬の副作用で使う量が増える、手っ取り早く薬中になるわけだ」

「猟奇的な連中が麻薬を使うか？」

アリアの素朴な疑問に伏見が回答する。

「意外かもしれませんが使われないことが多いです、猟奇的和麻薬が組み合うことは少ないのです、特に自由都市では高純度の麻薬が取引され殺し屋の誓約から組織事潰されていますが、それでも取引する者は存在し末端価格は様々ですが、ニュースになるメジャーな化学合成麻薬の金額は自由都市ですと一キロ数百万、那覇市ですと半額です」

「思ったが連中は那覇市に潜伏しているのではないか？」

俺の思いつきだ、しかし、それだと様々な説明ができる、現在の上司に連絡し那覇市搜索を伝えた。だが返答で不可能であるとあった那覇市は様々な犯罪組織が暗闘し毎日のように銃撃戦が起きている犯罪都市だ。

「聞き込みだな、アリアは残ってくれ二人が起きたとき不安がるから、な大学部に聞き込みをすれば何かつかめるかもしれない」

確認し終えると大学部に向かった。情報をそう易々とはくれるような大学生は多くないが李企業体らは別だ、受けがいいらしく李の社員証を出せば教えてくれる昼休みの終わり頃教室に戻り調べた情報を纏めた。それによると那覇市の抗争が激しさを増している時期と事件の発生日が近いことが判明した。那覇市に潜伏していることは間違いないと確信した。

午後の休み昼寝をしていた二人が起きて子供特有に教師に質問攻めにする。教師の方も慣れているようにしっかりと説明する。そんな午後が過ぎ。放課後になる。那覇市の危険性から取材許可は下りなかった。何より二人の相手することが重要だといわれた。仕方なしに専用区に帰宅する。妻が子供の二人を相手にしている間に家事を終わらせ夕食になる。

「生ものですか」

ドールが刺身をみて困ったような顔で俺をみるがワサビをたっぷり使い食べ始めていた。嫌いらしく食べない二人に妻が苦笑してワサビをどける。

「これなら食べられるか」

二人には新鮮だったらしいわさび抜き刺身を食べ始めるが箸の使い方が下手なので突き刺し食べる。一つ一つ覚えていくしかないのだ。

夕食を終えると俺が家事を行う、そして一段落つくと二人に自由都市の歴史を教えた。

何となくわかった、あの女性がいった若さとはつまり時を刻ん

でいる世代のことだ、人生の主役は自分であると思いいこんでいる物語の主人公であることを自覚している時期だ、それは多くのモノが失った青春という蒼い時期。それを伝えるにはその世代の者を用意するしかなかった。仕事の時間になる、二人はよく話す、双子であるが性格が違うために発想や様々な興味が違うことからの衝突ではなく意見を交換する事、二人の性格は理性的な子供であり現実に対して過剰な期待を持っている。だが現実はいくらでも牙を向くたえ無垢な子供でも。

第四課対強化兵武装捜査員の学生班の課長が、古参の兵士のため二人の接し方がわからない。

兵士として過ごしたため子供に対する接し方を忘れてしまったのだ。

だから俺達が相手をする。

刀剣のトレーニング、拳銃に扱い、方肉体を酷使した戦闘術の訓練、二人は痛い嫌いいらしく嫌がるが必要であることを理解しているのでおっかなびつくりになっている。

勉強の時間もある強化兵の能力は科学的な現象であるため生物学的な学習から応用問題時折わからない兵士に専門家がわかりやすく説明する捜査から手を引いた二組も勉強はしていた。

二人が例に漏れず質問攻めする学者は喜んで説明する、俺からすれば怪しい科学的知識より常識的な教育を考えたが現状に多くはいえない。育児に悩んでいる親御さんが集まり勉強会が開かれた。

「では教育委員会を開く発言者は識別番号を名乗ること」

「識別番号1001です、すでに青春期にはいった子供に対しての根気強く教育をしていまいすが、問題点が存在します他人に興

味を持たないことです」

「それは少し違う興味があるものだらけのため埋没しているのだろう」

納得する、教育の専門家まで存在する組織に多少何でも屋組織というのがわかる。

やたらと専門用語を使う専門家はいない、わかりやすく説明することになれているのだ。それを考えると下手な教育組織より恐ろしく熟練している。学習時間が終わり午後の十時になる自宅で二人を寝かし、久しぶりに休んだ。

エイシェ部長のいる執務室に向かう。

「1001、511、質問がありました入りました」

「何だ」

「はい、特攻機の製造が終わりました」

「その件なら知っているが、もう少し有意義な使い方を考えた、電気形状変化金属を知っているな、アーマードに使用されているモノだ」

「よく知っています中学時代は闘技に参加していましたから」

「それなら話が早い私が発案した生物兵器製造計画に参加してほしい」

「参加する前に情報の閲覧は許可されますか？」

「秘密にする理由はない第四課で閲覧してくれ」

敬礼し部屋から出る、部長は現在の対強化兵最強の遺伝子調整者らしく能力は秘匿されている能力が多い。その為に兵士からは畏怖の名前で呼ばれている。グングニールの魔女とその為に従う兵士の統率力は高く精強な兵士が並び、士気も高いが反面指揮官として有能すぎる人物と言われる要約すると現在の立場が妙だということになる。それもそつだろ階級にすれば少尉扱いだ。

犯罪組織は実力主義一点張りだ有能ならどこまでもあがれる。

一体何があつたか噂されることが多い。現に俺達夫婦のように一兵卒から這い上がってきた、そして実力以外で評価されるのは組織の理念に反する。

だが発言力は絶大らしい、課で閲覧した計画情報は現在の技術力を結集し対ジーンエース兵器製造計画になる、一介の少尉の部長が提唱できる計画ではない。

計画の重要な素材が俺だ暴走する遺伝子の書き換えから致死量のナノマシーンを投与した。

計画は第一段階として変身する能力、通常の形態から戦闘態勢の戦闘形態に変身する、それにより匿名での行動ができる。二つを明確に区別するためのノーマルタイプの変身前形態、先天性能力者に対抗する能力を発揮する段階の戦闘形態の明確な区別技術の開発。第二段階として戦闘形態、通常形態のうち移動、偵察、戦闘の三形態の移行する能力、第三段階として能力そのものの最適化能力の獲得。

参加するジーンネイターは自由参加、危険すぎて強制はできないと判断された。参加を希望した俺達は二人の娘に参加不能を求めた、計画自体は第二世代の必要性はなく第一世代の強化目的の計画だ。ただ計画の母体になった二つの計画は持続されることになっている二つの計画より得られた技術が医療的コストと採算が合うように低コストかが始まっている。

それから大真面目に対ジーンエース計画が開始された、もちろんではあるが非人道的な人体実験でもある対をなす計画として無力化計画もスタートする。学校には長期療養の必要があると言うことで休学し、計画に参加した。

第一段階の技術自体は確立されていた技術でもあったが戦闘に適する能力とはいえない先の見えない開発計画であつたがエイシェ

部長の様な天才の技術者が可能とした。第三世代の俺に対する生物兵器化研究も実践段階の移行したのは夏休みが終わって九月に入る頃だ。

ジーンエースに対する最強の切り札として開発が進められた。

俺無しでは量産化は不可能と判断され必要な素材を大量にかき集めた、素材は俗いう遺伝子だ。どのみち再生していくために無尽蔵に採取できる。そんな日々二人の娘は複雑な気分だったらしく少しだけ反抗的な態度をとるようになった。困ったことであるが俺自身が解決する問題でもある。

「そんなにイヤか？」

双子が俯く、イヤなことには変わらないが必要であることは知っているらしい、ドールは口を開く。

「お父さんはイヤじゃないの、お父さんが素材扱いです、イヤです」

「ふむ、素材扱いがイヤか、しかし、誰かから手に入れた遺伝子を使うしかないのが現実だ、それに事件は続いている被害を食い止めないといけないのはわかってるな？」

ドールが拗ねたように口を尖らせる、少し早めの反抗期だ。俺が二人の頭に手を置く。

「誰かがしなければならぬことを俺はしている、すべき事があるのにそれを投げ出す父親は立派か？」

「立派とか関係ないです、イヤなのです」

「訓練はしているな？」

「違います、訓練は必要だから」

「俺も必要なことをしている、俺は自由都市が好きだ、李も好きだ、ヴィーナスの理念にも賛同している実験の結果死亡しようとも満足な死だ、他人の命を奪うことは簡単だ、だが何かを守るのは常に難しいのだドル、ルージュ、君達を生んだのは李企業体と、ヴィーナスの組織から集められた技術だ、技術からの申し子だ己を律しなさい、己を律せず道を間違えるな」

二人が初めて涙した、どうしようもないことが世の中にはあることを気づくには早いがあるのだ、どうしようもないために人は絶望するがそれを踏破するのは常に人だ。そこには古くからある人としての営みがあり素朴な正しさがある。故にわかるしかないことや、刻むしかないこともあるのだ。二人には少しだけ早かったようだ。

生物兵器として俺の体は再構成されているために培養液に入り体を修正する作業が繰り返された、人体実験の結果ではあるが確実に兵器化している。

俺の意志はただ一つ売られた喧嘩をお礼参りで返すことだ。それが一つの共同意志としても。

「1001時間だ」

俺の再構成は終わっていない、完全ではないため、培養液からであれば肉体細胞組織の自滅因子が発動し死に近づく。計画の多くの賛同者が身をもって体験したことだ。

研究によりわかったことは俺の遺伝子は感染させることで体内の後天的に書き換えられた遺伝子を特定のパターンに作り替える、その後自滅因子が発動し人体の細胞組織から失われる、が副作用として他の細胞が類似した遺伝子構成を持ち徐々に体を作り替える。それを第一過程と呼ぶ。

第二過程は技術的な投与がある類似した遺伝子を記憶させた形状記憶細胞組織これをコアと呼ぶ、そして身体から投薬によって遺伝子を擬態化させるその理由は消耗する体力の枯渇を防ぐためだ、擬態化することでの休眠状態にする。それが第二過程の目的。

第三過程は取り出されたコアを変身用の生体部品に移植し拒絶反応が起きないようにする。

第四過程になり初めてコアが重要器官に移植されるそれにより戦闘形態に移行する変身能力を得る。最終過程でもある第五に微細な調整が行われる。アルカナから識別番号が存在する。

第一段階の研究は進んだ、第二段階への移行の技術からは実戦に投入する事による情報収集が必要とされ世界中の紛争地域での実戦投入があった。そしてその中で多くの戦友達が戦死していった。生き残った者から集められた技術により第二段階への移行が決まった。

俺は母胎計画第三世代の唯一の存在、その為組織は実戦投入に慎重だったいや慎重にならざるを得なかった。ジーンエースとの戦闘で自由都市での事件発生は加速度的に悪化し他国の組織からの干渉も始まった、過激の攻撃をするヴィーナスであるが舐められた結果により好戦的な態勢に移行するしかなかった。自由都市の他国の

組織に対する実戦にジーンネイターを投入した。結果は明白なモノがあった。個体能力の桁が違う、たった一組のラヴァーズのジーンネイターにより殲滅された組織は数知れず膨大な戦死者が生まれる。

他国の干渉は必然的な外交関係の劣化でもある、商業国家でもある自由都市は外交の悪化は経済的打撃を受けることになる。

ヴィーナスが俺の実戦投入を許可した背景はそんなモノだ。

変身能力をマシンチューナーと呼びいち早く第二段階の技術が投与された俺の能力は合計四つの形態を持つ、通常形態つまり生身だ。マシンチューナー形態、移動形態の高機動タイプ、偵察形態の高効率知覚タイプ、戦闘形態の一角獣騎士タイプ。

「サラマンダー、ウィンデーネ、シルフ、ノーム、フェンリル、トール、六種ブレイク」

「理解しているようだな、敵対組織の説明はいるか？」

場所は那覇市の新都心、現在自由都市に兵隊を送り込む最大敵対組織ジーンエースの拠点、一つの複合訓練施設だ。戦闘形態である一角獣の角がある形成した生体甲殻フルフェイスヘルム、体には肩当てから指までを守る生体甲殻装甲が胸、腹、腰当てに別れ、下半身の隅まで生体甲殻装甲が覆っている。隣にいるアリア、相棒も同様に生体甲殻装甲で覆っているが俺の近・中・遠距離万能能力とは違い、標準的な四つのカテゴリーから恒常的な二つはすでに施された技術のため神経のブレイクと猛毒の二つの能力を撃ち出す能力ヴァルナー二を換装している。

「情報では先天的能力者と母体の吸血鬼から生み出された下級従者の集団だったな」

「注意する必要があるのは弱点がないことだ、重要器官を一発で破壊しない限り生存する」

「何が紛い物なのかわからないな、先天性能力者の血液と天然の吸血鬼から生み出された薬物強化兵、ドーピングヒューマンとジンネイターの戦い、第一の目的が自由都市制御技術入手だろ」

「遺伝子強化兵、薬物強化兵、まあ間違いではないが純粋な人間という生物からすれば私達が人間に近い、連中は人間から吸血鬼の僕になった一応そう主張している企業テロだ」

「単なる闘争だな、裏表のぶつかり合いだ」

「生物兵器である我々と薬物から強化された元人間の戦いだ」

「そして相手は重火器で武装の上に専用機種アーマードを装備か」

「21-1001、20-1501、戦闘準備は終わったか」

「終わったというか、引きこもり生活で世間ずれが発生しています問題ですよ」

「そんなものでもいい、4タイプの女帝1501と12タイプの太陽1001合同作戦だ投入されたからには成果を上げる」

「では給料分働きます」

生体甲殻装甲内部に取り付けている頸骨通信での会話が終わる、

相手が戦闘能力を発揮するのは太陽が落ちてから、それまでは専用機に乗り込み活動する、相手の耐久力が落ちてから撃破するのが常套らしい誰にでも必要になる睡眠と食事中に襲撃する。

六属性を司る俺からすれば雑魚だ。複合訓練施設のドアを生み出した灼熱の火焰を腕に宿し融解させる、進入した俺とアリアを迎え撃つ薬物強化兵が高射砲を旋回させ撃ち始める、それを灼熱の防壁で蒸発させる、弾薬を撃ち尽くすと普及している装備であるリミテッド反応型大型ナイフを構える、増援に現れた三名。こんな現れ方をした俺達に敵愾心むき出して迎え撃つ。

アリアの腕を変化させたヴァルナー二で四名に猛毒の水滴を発射する、振れただけで急速に壊死していく、中和剤を打ち込まないと短時間で即死する。

「おいおい薬物強化兵士、ドーピングソルジャーの皆さん、お暇なら戦闘に参加してくれないか、もれなくお礼参りの爆破があるぞ、抵抗しないと死んじゃうぞ」

四名の兵士は退却するその後ろから追撃の火焰の熱波を撃ち出す、一瞬で炭化し燃え上がりながら倒れる、その衝撃で体が壊れる。

「弱いなこんなものか」

「部長、出力が高すぎませんか？」

「いや許容範囲だ元々の遺伝子でもある炎、雷、風の三つは高い領域で引き出せる事が確認されている、残り三つは勉強不足と訓練不足から苦手らしいただ本来は単一の能力十分な成果だ、殲滅した後帰還してくれ」

爆破が起こる、相手の薬物強化兵は好戦的に押してくるが直線上の相手を熱線で倒す、それを射程が許す限りの範囲で回転させる、建物の耐熱性から殆どが上半身と下半身を切り離され耐熱シエルターのハンガーに逃げ込んだ兵士だけが生存し専用機を身につけ現れる、爆破により崩壊していく建造物の中で俺が単純な方法の攻撃を行う化学反応からの反応熱がマイナスになり冷却現象が起こる大気から呼吸する、冷えた空気は吸い込んだ器官を容易く冷却し凍り付かせる、呼吸できなくなれば脱ぐしかない。専用機から現れた兵士をアリアのヴァルナー二の高圧水滴発射器官で射殺する。何の意味もない平凡な戦場だ。

移動形態のファイザーに変身する背中から生体甲殻装甲の翼が生えその下に昆虫類の羽が生える二重の飛行能力でレーダーに映らない高速で移動ができ離脱する。

人気ない場所に移動し偵察形態に移行する情報器官が急速に発達し知覚する範囲から視認できないことを確認し変身を解く。高純度栄養剤を飲むその影絵は皮肉にも病人のようだ。

「20 - 1501、21 - 1001作戦を終了、殲滅を確認」

組織の回収役が車からの帰還を補助する。陸路で自由都市の拡張工事が終了し厳密に自由都市と那覇市を分ける自然の海は見えない専用区が新たに生まれヴィーナスに関係しない者を住まわすことになった。陸上ルートの増加からジーンエースの攻撃の過激化し防衛軍が日常的に取り締まっているが効果ない。

専用区の技術開発部門に帰投する、口頭での報告と監視役からの報告の二重で報告を受けた後調整段階の培養液に入る。それが終

わった後自宅に戻ることを許可され帰還する。

「お帰りなさいお父さん、お母さん」

制服姿のドールが抱きつき第二段階の俺の筋力は高く反動を完全に押さえる。妻の方にルージュが作った料理のレシピを出す。

「シチューが作るから待っている」

身長之差からドールを担ぎ暇潰しの歴史の話をする。ドールとルージュが好きなのは学生クーデターが起こる前の時期平和な時代だ。

「さてと、問題だ、海上自由都市と自由都市量産化計画の関連性は？」

「同じ都市？」

「ドール勉強不足です関連性は施設によるモノだと言えませんが、正確には海上自由都市が試作型の完成品で量産化される都市群にはオシアス共同体の権限が重なりますから、現実的な関連性として資本群の類似現象です、導き出される社会基盤を新たに想像することから必然的に家庭が生まれる、その中で注目されるのは第二世代に該当する子供達の移民です」

「ルージュ要約すると単なる人口分散では？」

ドールの反撃にルージュが負けん気を刺激されたのかムキになって難しい言葉で説明するが基本的に同じような勉強ないようなためルージュが勝てず俺に援軍を求める、黙殺して正解を話す。

「人は多い、しかし、生活するなら快適な安全な場所を選ぶことから主導権の権力争いだ、自由都市を製造できるのは現在日本と自由都市だ、そして二つを強く結びつけるのはその二つの社会現象だ、二十世紀の末期にあった冷戦の崩壊それから引き起こされた国際政治バランスの崩壊、それが現在に強く影響し現状を打破するために新コロニー計画が生まれた、自由都市は言い換えると新しい環境開発だ、七割の海を人が変えようとしている渴望する新領土になる、戦争ではなく技術により新しい大地を生み出そうとした。その意志は現在の多くの先進国が抱える、テロ問題の解決として新天地の創造、海はフロンティアだ、多くの問題を解決するだろう、社会は変わるただ危険もある海上都市が生まれて一年の頃電気停止事件があった」

話が一変したことに二人が不安そうになる、電気を失った海上都市は容易く崩壊する文字通り都市が制御できず崩壊するのだ。

それを解決させた方法はない。今でも調べられている謎の事件だった。それは自由都市が隠している最悪の事故でもある。それに調べようとした同僚が圧力を受けたこともあるそれも李の上層部から。自由都市のあの事件はなかったことにしたいのだ、わかりやすいえば自由都市が崩壊することなど認めないのが李だ。

「だが一度だけだった、あれからは起こっていない何が原因だったのか今でも謎だ」

「あの事件か、あれは正直今でもわからない、謎な事件だった、ただ謎といえ自由都市の製造技術が何故公表しない、莫大な権益が生まれると思うが」

「たぶんですが、日本は家族がほしかったのではないでしょう、か、国家に真の友はいませんから、せめて同じような国を欲した、

そういった意味で自由都市に平和を一番願っている親ではないでしょうか」

「ならば今は反抗期だな」

アリアの冗談だが笑うしかない、シチューと双子の料理を食べ、古い友人に手紙を書こうと思った、まだ日本の領土であった頃の友人だ。今はオシアス共同体東アジア日本連邦自治都市になっている、日本の影響を持つ新天地、時を刻むことに俺は色々と経験し一つの疑問を持った、今の状況は自由都市生まれの国際超企業体との抗争に発展しているジーンエースだが、何か求めるモノがあると思うそれを友人に頼みたいジーンエースとの和解を求めることだ、もちろん許されない行動であると戦友達はいうだろう。

だが多くの孤児を生んでいる現状を変えるためには必要だと思っている。英雄ではないのが俺なのだ。

夕食の終わり仕事部屋で書き終え、郵送の担当者を紹介し偽装した後を送った。

9 / 6 日、日曜日。

真夜中部長に呼び出された珍しいことに下級幹部の纏め役である虚社長が同席していた。

手紙の複写が机におかれた。部長の事は知らないが現状に強い危機を持っていることは知っている相手も同様だ止まらない暴力の応酬を止めるためには何らかの手段をと執るしかない。

「正気がアリアベルタ・デ・久志」

「正気ですから和解を求めたのです、無駄な戦いにしか思えませんが」

「そうかならば警告でもあるが、家族のことを理解しているか、お前に勝てなくても家族に手を出し脅すことができるのだぞ？」

「ではいつまで続けるのですかこれは終わらない戦争です」

「違うな闘争だよ、自由都市が生み出した李とヴィーナスを生み出すことになった世界中の産業スパイの育成機関、その調和を絶とうする対抗組織との抗争に過ぎない」

「ではお聞きしますが和解交渉に賛成ですか」

「若いな子供に戦を語りたくないわけだな」

「良い父親は知りませんが戦争は不幸の土台です。語るのは老後にしたいのです」

「切り札の暴走かエンシェ、どうするのだ」

「上級幹部会合に停戦策を提示します、最低自然休戦に持っていきたいですが」

「難しいが手打ちも必要だろう、だがどこかでケリをつけないと

いけないことも確かだ」

「1001、最終作戦に参加することを許可する」

頷くしかない、友人に送った手紙から形態にメールがあった。簡素に行うとあった。

最終作戦とは文字通り最後になる作戦だ。理由は戦闘継続が可能な状況におかれたことを示す、それは敗北という、当然最終作戦で相手とのケリをつける、可能な戦力を集め必要な作戦を展開する、自由都市から沖縄県的那覇市に連なる大規模な最終決戦作戦だ。

誰も俺を責めなかった。それだけが少しだけの憂鬱だ。

李の歴史を辿れば自由都市と海上自由都市の境目にある学生クーデターと旧市長派層とのぶつかりである、ヴィーナスは李の成長に伴い拡充してきた。言い換えれば破竹の勢いで勝ち続けてきた。その李が最終作戦を展開した情報に日本自衛軍と連邦の自由都市防衛軍、学生警備隊、自由都市防衛機構に位置する全ての軍事力が集結し最悪のシナリオである李の崩壊に伴うアジア圏の情勢崩壊に備えた。

それ程に危険な作戦でもある。同盟軍のアメリカ軍は李アメリカ支社との話し合いで不干渉を貫くことを闇に宣言した。

近隣国のアシオスの台湾、超大国の道を辿る中国、インドは中立を宣言し関係する様々な組織に撤退を下した。不気味なほど静かに戦争準備が始まる。オシアス共同体合同軍が静かに展開する、那覇市の人口は五百万に近い大都市であるが静かに避難が始まっている。

「これより李企業体グループの最終作戦を展開する」

上級幹部の筆頭李・狼爬、李・煌煌の夫婦が静かに宣言する。上級幹部は合計で七大陸分の十四人、膨大な下級幹部や兵隊組織とは違う表の成功者が存在する一種の国際経済集団だ。

「現在9月6日、事件発生から二ヶ月、諸君はよく戦った、しかし帰らなかった者も存在し殉職者を出し、組織の疲弊は甚だしい現在可能な限りの兵力が結集している李が集められる最終的な戦力である警備部門陸海空の総兵力三十万、内投入される戦闘要員は三分の一の十万である、が通常戦力では相手を殺傷するのは困難として、可能武装化によって投入される兵力は半数の五万である、内自由都市防衛に二万、沖縄県那覇市市民防衛に一万、最終的な戦闘に携わる者は二万であるこれからは最終指揮官に権限を移す。諸君生還することを希望するそれが李を生み出した私達の望みだ、諸君らが裏切らないことを熟知している以上」

上級幹部の権限から下級幹部に移行する、軍戦闘態勢に移行する中、散発的に警察機構や賞金稼ぎとの戦闘が始まっている李の警備部門は困だ。真っ向から戦えば李の戦力は崩壊するのが理由だ。

「現場総責任者虚だ、我らが負けることはあり得ないが相手にも必死だ、氷より熱く諸君の帰投を希望する最終作戦をここに承認する。これより現場指揮官に権限を移行する」

「最終作戦を担当する司令官エイシェだ現在投入される二大計画のジーンネイター、アンチ・ジーンネイター、私の計画である対ジーンエース生物兵器マシンチューナーを投入するなお帰投後の報告は免除する作戦は単純である相手総兵力を殲滅せよそれが不可能なら主力兵力の殲滅、通常の兵力である下級従者は容易く倒せるが上級従者と先天性能力者の吸血鬼は第二段階のマシンチューナーを投入するそれ以外の戦力は探しだし足止めせよ、時刻は朝日の時だ、それ

「までは待機し可能な安息を得よ」

時刻は真夏の朝日が昇る五分前、ジーンエースにとって防ぐか全滅するか二択しかない最終作戦の展開だ、俺が頼んだ和解の場面に打って出るなら今になる。

最終的な装備として装着する機械の鎧アーマードが投入された、ジーンネイター専用機、アンチ・ジーンネイター専用機、マシンチューナー専用機。三つの専用機は暁社が送り出すLHシリーズの最終機体LH-22AMR、通称アーム、実戦型軍事用最終軽量級機体。

最終作戦に投入される第二段階のマシンチューナーは合計六人いや六体と言うべきかもしれない、最終的な作戦に使用される遺伝子最終兵装換装を終わらせた。俗に言う核技術からの超破壊力の粉碎を主軸とする。

朝日が昇った。作戦が開始される。隠れる場所がない下級従者はアーマードを着込み対抗するために結集しているが最終的な戦局には何の意味もない相手の主力である十二名のオリジナルの殲滅が目的だ。統括する母胎、どちらか片方を失えば敗北は必死だ。

「始まったな」

俺達六名には機体は無い、直接稼働のアーマードは個体能力として邪魔であると判断された。

黒金の一角獣、深紅の一角獣、深緑の一角獣、純白の一角獣の四名は知らない第二段階のマシンチューナーだ。四名は他的大陸で調整された第二世代の？カテゴリー適合者。標準語の日本語が通じるらしい一応待機地点であるジーンエースの補給基地にいる。

第二世代の能力が高いことはジーンエースも認めるしかなかった。

最終的な和解交渉の六名が選ばれ深紅の一角獣がどうも筆頭選ばれたらしくマシーンチューナー専用機に身を包んでいるエイシェ司令官の護衛をしている。相手が選んだ交渉役は六名の護衛の先天性能力者と一人の主人級の吸血鬼だった。

「兵士に同情するかえ」

老婆のような口調であるが純血種らしい深紅の瞳と開いた口から見える牙、本物がお出ましとは驚くがそれ程に切迫した作戦であることはお互いに知っている。

「キメラと言っらしいの」

「薬物強化兵よりはマシだ」

エイシェ司令官が強く言い切った。相手は気を悪くすることもなかった。ただ護衛の六名はお互いに睨み合っている。種違う存在が共存繁栄などあり得ないのだ。何か束縛する枠組みがいる。

「誰も悪くないと言い切れるか古代種」

「さあのう、善悪など持たない種故に」

「いやある、現に眷族を守るために行動した」

「眷族？何か勘違いしていないかえ、護衛に連れてきた者は確かに眷族、されど下級など他国よりの非合法兵士にすぎない、現代の日本語で言うといリーガルソルジャーかのう」

「言葉遊びの時間か？」

「妾が欲するのは自由都市そのものじゃ、一つくれ」

「ではジーンエースの要求と見なすぞ」

「違うの妾の要求であり、ジーンエースと名乗る変異遺伝子異能者の要求は、自由都市の組織として公認することじゃ」

「そうか我々の要求は自由都市に手を出すなだ」

「妾としては陸地の方が好いのじゃが、表向きの領土を得るには自由都市を手に入れるしか方法はない、核兵器で殲滅はいやじゃて」

「要求が受け入れなければ、主力兵力を殲滅するが」

「それで？」

「しかる後、那覇市に核兵器を落とす」

これには相手が黙る李なら出来るからだ、理由などいくらでも作られる李の財力は超大国の予算を生まれて一年で超えた。現在は後身国の医療、軍事、司法、立法、教育、国家の基盤となる様々な分野に資金と技術を提供する、どの国家か李と敵対し高が一地方都市の一つに対する核攻撃の批判という天秤をするかといえは話にならない。李の敵であり最大の味方であるアシナスは最大の基盤だ、自由都市の技術さえあれば那覇市の壊滅の経済被害と採算が合う。

ヴィーナスからすれば正気ではないといわれるが交渉の席では狂気の比べっこだ。

「恐ろしいの自ら生み出した人工物に対する敬意はないのかえ」

「くだらない見栄は張るな、李が最終作戦で用意している核兵器は小型化された次世代型電磁核だ、電子機器の全滅で都市機能は麻痺する、当然お前たちが使う全ての情報機器から様々な電子機器は全滅する」

「ならばこちらも用意している一手を明かそう、巡航型核搭載ミサイルのイージス艦を持っている北アメリカの超大国が失敗作として打ち捨てた廃品を買い取った訳じゃ」

「対空システムは完備している、旧世代の巡航ミサイル程度で女神の盾は抜けられないことは知っているか」

「知っている、じゃが、魚雷型は防げまい」

「伝えておこう対潜水艦防衛網が存在し遠距離攻撃を無力化する電子兵装の防衛潜水艦は完成している」

「して実戦は？」

「イージス艦の性能では短距離だ、それに防衛用のイージス艦はアメリカ、日本、超大国に数えられる中国、インド、イギリスを含めたヨーロッパ共同体に配備されているが大陸間弾道ミサイルは使えない、かといって魚雷型は使えない、何せ攻撃されないための海中に膨大な機雷が存在し、防衛網から短距離魚雷か超低空巡航ミサイルの攻撃以外は効かない、ついでにえば最近開発された防衛情報電子管理機構から、海上都市に対する海上・海中攻撃以下先制攻撃は効かない、防空網からの攻撃も効かない。唯一陸路だ、しかし、自由都市に対する攻撃をするなら日本自衛軍、自由都市防衛軍、合

同軍の三軍と戦った後に李企業体警備軍と戦うことになる、聞くが勝てるのか」

「困ったの」

「要求は受け入れられない」

古代種の吸血鬼は本当に困った顔でいるが護衛の六名の顔には焦りの色がある、いくら何でも戦う敵が多すぎる百万程度では済まない、三軍の総兵力から李の警備軍を併せれば軽く二百万の馬鹿げた戦力になる。しかし、相手が持つ旧式核兵器も問題だ使われれば間違いない超法規的な措置による殲滅作戦が承認されることになる。それはテロ戦争というより暗躍した国家を巻き込んだ時代の主権を握るための戦争に突入する。

「お主は時代を戦争に持ち込みたいのかえ」

「それなら李は生き残る」

「そうじゃの最終的な戦争では我らに勝ち目はない、最低限の交戦規定を締結するしかないの」

「締結する必要はないテロの怯える時代は終わった」

「和解の交渉にはいるしかないかえ、今日より攻撃を辞める少なくとも今月の攻撃は控える」

「了承しよう細かい条文必要ない、どのみちアーマードに記録されている」

「ではこちらの本題じゃ、那覇市での最終作戦に停止じゃ」

「了承しよう」

作戦が中断される、両者が攻撃を止めることで武力衝突は防げた。残りはお互いの譲歩案の出し合いだ。細かく自然休戦の期間や様々な条文が取り決められる。

「一つだけ気になる誰に情報を得た」

「ジン・陽炎・ファルネ・システイーナからのリークじゃよ、あの若造も李に対抗する組織作りに躍起じゃて、李が生み出した利権が壊れた後の世界、それを生み出す為の切り札に使えると判断され妾は雇われた訳じゃ」

「灰色の陽炎かなぜ殺さなかった」

「あの男は殺せぬ何せ異能者を生み出す切り札と、自ら持つ未来を見る能力を持つ、わかつていないようじゃが、予知能力が能力者の最終形態じゃ。そしてそんな者は当に一族として行動し、今回の騒動を陽炎から聞かされ我らは手の平で踊った訳じゃ。ギルドの手は長く李と敵対でき故に行動じゃ敵の味方は敵で色としては灰色、味方の敵は味方で灰色、わからんじゃろうがあの北欧の若騎士は自由都市の歴史を知って骨を埋めにきた。危険な技術開発をやめるのじゃな」

「なぜ伝えた」

「単純じゃよ陽炎と戦ってほしいからじゃ聞けば恐れ敵対する」

ギルドとの敵対はあり得ない故に離反させる気だろう学生資本群の力を削ぎ自由都市が量産され移民が始まればどうしても学生資本が邪魔になる企業や国家様々な集団がある。

「司令官ご命令を始末します」

「間違うな陽炎が我々を攻撃したか？ギルドに手出しするな、これは上級幹部会合決められた組織の命令だ」

「ほんに愚かじやの、陽炎は何千という死を覚悟し演劇を起こしたのじゃ、自由都市の結束力を維持するために単騎の騎兵が旗を掲げないからじゃまだわからないというか」

「灰色な李でいいのだ、正義を決めるのは子供たちだ我々ではない」

アリアが言い切った、古き種の吸血鬼は初めて興味を示したようにアリアを見る。

「お主子供がいるのか？」

「居る子供が決める未来こそが正義だ、それ位のことは知っている未来も過去もそれが決めた、我々が子供であった頃、子供たちが未来を決める頃、世代が変わり時代は移ろうそれが人間だ」

「そうじゃ故に強いのが人間じゃ、吸血鬼に運命は微笑まなんだ、所詮は遺伝子の変形体でしかない種として弱い変化種に過ぎない、進化の落ちこぼれじゃよ」

「語るべきことはないが我らは変わらない」

エイシェ司令官が帰投する、俺達六名が計画最後の実戦投入形態だったと記録されている。

戦闘形態の俺とアリアが最後に立ち去ったとき護衛の六名と古の吸血鬼は消えていた。

9 / 7 日、月曜日。

第二段階の標準的能力として六属性を司る能力とそれを無力化する能力で終わり、？を超える適合者は少ないことが知らされた。さらに？カテゴリーを超える人数は数える程。

自由都市の歴史にジーンエースは名を残し、李企業体が灰色な態度を崩すことはなかった。陽炎が放った策略を突き破ったことになる。

やるせないこともある、今日登校する中記録された戦死者が企業体として名前を読み上げられた放送がある、陽炎が掲げた旗と李が掲げない旗、ギルドという枠組みの中に存在する情報を司る立場の者、その闘争の演劇の結果、多数の死者が出た。双子を抱きしめることで忘れた、忘れるしかないこともある、アリアは変わらない、壊れた世界の破片が多く散った事件だった。

モノレールで教育区に到着し、陽炎と北谷が立っていた。敬意を払う気は全くないが無視した。だが二人は話すことがあるらしく皮肉な現場に招いた。

ドールと初めて出会った場所、露天バーの席に復讐心の憎悪に燃え上がる晴美の夫婦がいた二人は下級幹部で犯罪利益統括者だ。戦死した学生社員のラヴァーズも多く二人の部下だった。

「皮肉とは思わないか」

白石の美男子が苦々しげに呟いた、吸血鬼の造反は予想していな

かつたらしく腹黒い暗躍、灰色な陽炎と言われる所以だ。

「何が皮肉だ」

俺の掠れる声で答えた、守る側の違いで争う立場の者同士だ。

「実に皮肉だギルドは学生市場独立保護機構、李企業体グループは情報取引組織、この二つに楔を打ち込むために策略にまんまと乗せられた」

「汚いな言い逃れか？」

「言い逃れ、近いな、条約違反者に対する罰則だ」

「何人死んだ、何十人孤児を作った、何百の家庭を壊せば気が済む、何千の不幸を作れば機嫌が直る、何万の血が流れば安心する」

「そうだね君達が殺してきた兵士たちの家族にもいえるね誰もが祖国や義務、名誉のために戦ったが武を決めるのは常に知だ、それを分からせようと思って久しぶりに画策したわけだ」

「クズが、反吐がでる遊びだ」

「君達が正義を行った結果、死んだ様々な組織の人々は誰が救う」

「貴様以外かな」

「残念、李に逆らうなの世界など興味はない闘争こそが世界の真なる姿だよ、第一に君達だって犯罪に生きてきた今更正義の味方が、最後に核を持ち出す、もちろん情報だけ、李がそれを短時間で作れ

る技術と製造場所があることだけ判明すれば世界は動くわけだ」

「正義？そんなくだらないモノで戦争を引き起こしたのか？」

初めて意見が分かれた、俺は正義など求めない、正しいことと正義は違うことを知っているからだ。人が標榜する正義ほど純粋に狂気なモノと何がどう違うというのだ。

「皮肉だなとはその事だよ、まさか第三世代が生まれるのは悪夢だ、おまけに敵愾心が発揮できるように化け物化手術を受けている、わかるか一個人が持つ力の本質はどうあれ、振られる力の結果は同じだ、単に李が自由都市の守護者を気取るのをやめてほしいだけだ」

「そして貴様が守ると？」

「お父さん？」

俺の口から出たのは本心だろうが純粋な殺意の言葉だ違うといえは殺す気でいたがこの男は一風変わっていた。相棒も同じように自分の命や未来を重視していない。

「頭が悪いようだね一年生、君がどう力を振るおうと君が正義に見えるかい？自由都市で正しいのはギルドでいいじゃないか」

「話にならないな、とんだ茶番だ貴様が正しいと言わせたいだけだ」

「わかっていないねそれが正義だよ何か間違っている」

「ああ間違っている、戦死した連中の分だけの、孤児になった子

供達の方だけ、壊れた世界の破片分だけだ」

「生憎だけで企業私兵なんか知ったとじゃないね」

「そうか一秒だけ命乞いを聞いてやる」

同じく三年生の晴美ナナシが拳銃を突きつける、知性派で知られる晴美 安倍も同じく拳銃を握る、俺が剣を抜く、生身の状態でも多少の遺伝子を活性化させられる、つまり暗殺する分には問題はない。アリアは唯一興味がないうで成り行きをみている。

「一つ聞くけど誰が李を守っているか知っているかい」

一瞬で銃声になり銃弾をこの男は立ち上がることで避けたそして椅子に座る。予知能力者と言うのは本当らしい、全てが見えるなら回避でないようにすればいいだけ、だが、不自然すぎる話でもある。

「今回は李の貸しだよ、世界の枠組みからでないことを強くお勧めするよこれは正義という名の主張と表現の違いだ、知っているか君達の英雄であるデス・オブ・デスは高校二年生だよわかるかな君達の先客を作ったのは李だ、どこの誰が正義という名の暴力を振るった」

「二人を救った気分か騎士さん」

「これ以上の暴虐は許さないという警告だ」

「そいつは面白い、やってみる動けば灰になるぞ」

「わかっていないね君の子供その情報の価値は君の死で決まる」

「ヘビーな話だろ、ギルドが言っているのは正しく道義的にも間違っていない、しかし我々が行うこともまた正しい、そして守る側が存在する限りどちらにも必要とする反面、価値観からの衝突があるわけだ」

「日本人の多くが間違っているけど、外国の人から見れば侵略国家の歴史は消えないよ、そんな国が超大国なんて笑わせるじゃないか」

「そうだな侵略し防衛する世界はそうして生まれた、だが結果として憎悪も生まれた、生まれた憎悪から復讐が生まれた、復讐から憐憫と怒りが生まれそして最後の希望を作った、世代闘争などくだらない、では聞こうか子供になんていう」

「それが誤算なんだなこれが、あの吸血鬼のセイでおかしな方向に歴史が修正された自由都市に隙が入る様にお題が改造されたのが大弱り、偽装ともいうね、さらにいえば吸血鬼の祖国を滅ぼした日本に対する復讐劇でもあるけど、操るはずが返り討ちにあつたわけ」

「なら貴様を殺しその後正義を決めればいい、関係者の善悪ではなく闘争からの力が決定すれば欧米で言う正しいことが決まるだろ」

「まあ欧米ならね、残念なことだけど今回は李と僕の失敗談と云う訳、あの年増が行った謀略の結果でもあるけど、裏切り、離反、造反、必然的にお詫びするよ」

「十年後貴様が生きていることはないな」

「残念だね」

話が終わりギルドの首脳部である情報部統括者、金融部統括者の二人が離れる。残った法律的犯罪者側の俺とアリアが企業生物兵器、二人が生身の犯罪組織幹部、双子が大問題の人工生命体、悪者は俺達になる。

「何が正義だ」

吐き捨て晴美夫婦が去る、対強化兵、強化兵、機械因子兵三つの能力を併せ持つ変身遺伝子保有者の生物兵器兵。歪んだ正義の結果とはいえ大きな親切即死のお世話で暗殺命令が下らないと期待した。そして俺には家族がいて失うわけにはいかないのだ。

付属一に久しぶりに登校した友人と呼べる四名が向かい入れた。その日は緩やかに過ぎた。

昼休み。事件の事を整理した。同士討ちという最悪のシナリオ。

「事件は結局何だったんだ」

俺が呟く。俺は納得する方便を知らない。

「同士討ちだ」

「どういうことだ」

俺が関係図を作った、李とそれに対抗する勢力であるハードエツグそれから離脱した先天性能力者が引き起こしたジーンエース事件は元を辿れば李に対する不信感から引き起こされた陽炎の画策、陽

炎が李にやめろよと話、李はそれがうちのやり方なのだと主張すると喧嘩になった、だが表向きには争えなかったため仲介者を作ったが暴走し裏切り戦争を引き起こした。

子供でもわかる関係図に四人は呆れ果て何も言えず黙った。

「真実なんていつもくだらないモノだ」

「終わったことだ忘れろ」

そう言う俺の瞳から滴が零れた、やるせないやりきれない事があるそれが、整理できない。強化兵の仲間である二組のラヴァーズは戦死した。もう戻らないのだ。

アリアが俺の涙を拭いた、そして抱きしめた。

「我々は生きているそれで十分だそれでいいではないか」

「正義とか正しいとか知らないがなぜだ、なぜ間違えた、絶対に間違わないはずではなかったのか、なぜ尊き者達が死なねばならぬ不条理だ理不尽だ」

俺の言葉は正しく愚かだ、終わったことに代価を求めても誰も与えてくれない、死んだ者が帰ってこないのが世界の掟だ。せめて最後まで騙しきってほしかった。それが無理なら忘れるしかないのだ、ヴィーナスのラヴァーズが死んだことは戦った相手も死んだことと同じだ。武の無力な世界だ。女々しくも俺は泣いた、許せないこと、しかし、許さないといけないことがある、割り切れないこともあるのだ。

真実などくだらない、正義など紙切れだ、吐き気がする現実はい

そつたれだ。割り増しで十日に一割のようにくそつたれになつていく。

「灰色の陽炎に李は同類だ同じように戦い故につけ込まれたのだ」

「そつだな」

戦争で傷ついた自由都市や那覇市は復興が始まっている何と云えば善いかかわからなかった。

放課後の昼寝をしていた双子を連れ商店街で外食をする二人は初めてらしく落ち着かない。

焼き鳥と飲み物はノンアルコールの清涼飲料水。

「お父さんどうやって食べるの」

「私もわからない」

二人の無垢で無邪気な声があるが周囲の客はエ？とある、苦笑しながら食べる。それでわかつたらしく一つずつ食べる。

「微笑ましい光景だ良かったら子供達が居て」

「まあ、そうらしい、わからないものだな、ただ給料あげてほしい」

「今後のみの振り方は考えているか？」

「難しいことはわからないがお礼参りがしたいな」

アリアが苦笑する、匿名での破壊活動ができるので陽炎の自宅を

破壊したい。

「お父さんこれ」

感情表現が下手なルージユが四つの指輪の中から一つをとりだし渡す。

「何かの記念」

「ありがとうルージユ」

アリアに一つ、ドールに一つ、家族の証のような物だけに嬉しくもあり微笑ましい小さな幼子なりに色々考えることが多かった日々、そして何かの結果を出したかったのだらう。

食べ終わりと会計をすませ第三娯楽区に向かう。色々あったが私服ぐらいは買ってやりたいものだ。それに二人は気づかず、アリアが微笑ましく二人の頭を抱きしめていた。

久しぶりにきた娯楽区に珍しい組み合わせをみた部長が白人の知的な男性と歩いていて、俺に気づくと近寄るなど目で威嚇したのでそしらぬ顔で通り過ぎた。

頻発していた事件が終わり、第三娯楽区には学生が戻ってきて妻の趣味で二人に似合う秋物の洋服とお出かけよう洋服、パーティ用チャイナドレスを買い込み二人はチャイナドレスが一発で気に入り早速着込んでいる、今日はよくあうらしく竹葉と庵の調査先の居酒屋で鉢合わせた。

「子供を居酒屋に連れてくるなよ」

「ノンアルコールで通している問題はない仕事の打ち上げか？」

同席し双子の二人は目新しい食べ物注文している俺が何気なく取り出した細身の葉巻をアリアが速攻で潰した、軽く泣けた。

「ここは禁煙席だ」

「ごもつとも」

竹葉が厳しい瞳で言う、俺が同情的な瞳を送るが何も言えず、疲れのような吐息が増える。

「前々から疑問だが何で剣なんてつり下げている」

「軍刀を携える習慣があるだろ今の流行なのだよ」

「流行？便利な方便に聞こえるな」

「リミテッド反応は知っているな」

アリアが説明し始めドルがルージユに抱きつき困った顔でルージユが俺に抱きつく。甘えたい年頃なので二人の相手をすると店員に怒られた。今日は本当によくあう日らしくタイタさんが同僚らしい科学者集団を統率し飲み食いしようとする居酒屋に入ってきた。

挨拶すると珍しく小言を言わず挨拶を返し奥の団体部屋に向かった。アリアが会社内の話をし、双子の相手を俺がする何となく今日は休日なのだと漠然とわかった。アクシデントとして酔っぱらった馬鹿か声をかけたが酔いが覚めるように剣が抜かれた、馬鹿は何度

も誤り逃げた。

部長からメールで今日は休日であることを告げられ双子が眠るまで遊び、帰宅した。

二人を寝台に運び寝付かせると妻との時間になる。共に第二段階のマシンチューナーであるが二大計画の第三世代の俺と第一世代の妻との日常は何も変わらない。

「変わったなヒートは」

「そうかあまり変わった感じはないが」

「いや父親として誇れる道を歩いている、好い夫だ」

「そうか、アリアは好い妻だと思う、子供たちが見る夢が平和であるように」

日本酒で乾杯しある程度飲むと多少の夜語りになった。

「戻ってきた日常だな」

「戦争なんてない方がいいそれでいいのさ、死んだ連中には悪いが、戦争で生まれるのは復讐の連鎖反応だ、まあ黒幕の始末なら喜んで引き受けるが」

「そう言つな陽炎が言うことは正しいぞ最初から我々は間違っていた」

「間違つてねえ、みんな法律に束縛されない理念の元で戦ってい

た」

「その理念は正しいかもしれないだが、ヴィーナスの実験にする様々な過程は正しくない行動ではないか、正しいと言い切れるか」

「言い切れないこともあるが、正しい姿でもある、他人の正義ではなく、自らの理念を貫くだけだ」

「日本人だな理想主義は明日からはゴミ掃除だ」

「それなんだが俺達第二段階が投入されるか？言うなれば切り札じゃないか」

珍しく妻が黙った、俺の言葉は当たっているジーンエースとの戦いで唯一敵の打撃を与えられる生物兵器を自由都市や那覇市のゴミ掃除に投入するとは思えない。そして戦争の爪痕に多数の組織は生き残るために平和主義の共存繁栄組織に移行したと噂では聞いた、ジーンエースと殺し屋の誓約で投入されたジーンの名前が付く強化兵の能力は桁違いだアーマードの装甲する融解させる能力を持つアグニがあげられる。研究が進み結果として生み出された、馬鹿げたほどの大量殺戮生体兵器技術、戦争好きな企業はない、戦争は最後には企業そのものの崩壊につながる丁度沈んでいく船のようなモノだ、右から攻撃されたから左を壊して浮力を維持する。そんな馬鹿げた技術を世界に公表しようとは誰も思わないだろう。知らない技術と言うしかない。ゴミ掃除するならジーンを使う必要もないデスで始末すればいい。

明日の聞いてみよと思う。今日は微睡みに抱かれて寝る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7682x/>

---

今時金色のヴィーナスの方程式・空の軌道編

2011年10月31日15時28分発行